

— 乾季、北への旅

その夜も、また、宮殿が大騒ぎとなった。

よくあることだが、突然、シッタッタ王子の姿が消えた。

「まさか、と思うところを、お探し…」

その声で、若い侍女たちのしなやかな影と香りが、雨季のための宮殿の闇を八方に散った。

侍女といつても、高級官僚や富豪のよく躡された十代の美しい娘たち、厳選されて教育を受け、王子の身边に仕えている。

命令をくだした侍従頭じやくじゆうの声が、少しうわずって震えた。侍従頭といつても、まだ二十歳の聡明なバラモンの娘、一步城を出ると絶世の美女ともてはやされるのだった。

王子が抜けたベッドに目をやると、寝巻きの純白の布に壁の灯明の光がゆれている。ベナレス産の高級なシルクであった。うらめしそうにそれを見やり、侍従頭は、王子に、こつ夜となく昼となく姿を消されては身がもたないと嘆く。

おまけに、王子の教育係の若いバラモン、ラーンガラ賢者に訴えても一向にらちがあかない。賢者の域にあると噂される人物だから、それなりの思いがあるのだろうが、むしろ、王子をけしかけているふしさえある。

だが、もっと嘆かわしいのは、側に仕える侍女たちの体ていたらくだった。

天井から毒蜘蛛などが落ちないように王子のベッドの上には、夜通し、孔雀の羽で作った大きな傘をかざす。四人の侍女が二人ずつ交代で、その任にあたるのだが、それが四人とも眠ってしまった。蚊や毒虫に刺されないため、黄金の柄のついた扨ほっす子と呼ぶハタキできどき軽やかに王子のからだを掃く。これも四人が二人ずつ交代で受け持つのだが、全員、眠っていた。

雨季も末のこの時期、毒虫の発生が一番盛んなのに、このありさまではまったく危険きわまりない。お側仕えであるからは、眠たい盛りの娘たちだからという理屈は通らないのだが、なぜか、王子のまわりでは、それが許される雰囲気なのだ。

しかし、その一瞬の隙をついて抜け出す王子も、なかなかのものである。手間をとられ大変だが、一面、頼もしいかぎりでもある。それも、抜け出す先が奇抜で、その場の思いつきとは考えにくい。おそらく、聡明な頭脳で次々に思案をめぐらしているにちがいない。あるときは、王宮中をしらみつぶしの末、やっと、城壁の片隅にそびえる太い菩提樹の根方で見つけた。洞ほらに首を差し入れて動かなかった。毒蛇の子が、底にころがる卵を中から割って、ぬつと顔を出す瞬間に息を呑んでいたという。

「ワニもへびも、二度、生まれるのだね…」

五歳の王子の目の輝きに、侍従頭は、思わず瞳を大きくし、微笑みかえしたものだ。

またあるときは、夜半、宮殿の一番高い屋根に寝そべっていた。

遠く北に聳えるヒマヤラの猛々しいシルエットを眺めながら、何時間も月と星の移りゆく後を追ったという。

「お月さまにお供して動くお星さまが、いくつかあった…」

星は動かない天井の穴と思っている侍従頭は、その観察眼にただ舌をまくほかなかった。

「シーター、シーターはどこ？」

侍従頭に呼ばれて少し細身の侍女が、王子の寝室に入ってくる。

まだ少女という印象で、瞳がひととき大きい。

「このベッドのようすからは、どこにいらっしゃるかしらね」

シーターと呼ばれた侍女の瞳が、天井に向かっていつそう大きくひらかれた。王子の姿が消えたときは、彼女が、いつもの確に状況を判断し、ほとんど行き先をいいあててきた。

侍女たちには、神通力の持主と一目も二目も置かれているうえ、

かならず第一発見者となるので、シッダッタ王子には、敬愛の気持ちを含めて「千里眼」と慕われている。

「スジャータ様、さあ、まいりましょう」

シーターは、侍従頭の手をとると大急ぎで寝室を後にする。そうして、大雨による出水に備えた高い石積み階段を降り、雨季にはめずらしい透明な月が地平に傾くのを追うように、王宮の庭を小走りに駆ける。

ゆくてに雨で水かさの増した蓮池が広がっている。あたり一面、有明の静寂が満ち、夜明けまえの風が冷たい。

岸边に近寄ると、やはり、純白の布とサンダルが脱いである。

シーターがはいつくばって月明かりを透かし、やがて、そのまま、池のなかへと身を沈めた。

前方には、蓮のつぼみが、いくつか桃のかたちを描いて闇に透けている。その葉隠れに王子の大きい頭がじつと動かない。

「蓮の花は、夜明けまえポーンと音を立てて開く、と聞いたので、沐浴しながら待っていたのです。シーターは聞いたことがありますか。その音」

水音を盗んで近づいたシーターの顔へ大きな頭が振り向き、白い歯が笑った。好奇心あふれる声だった。

「ワニでも来たら大変です。さあ、あがりましょう」

重なる蓮葉の陰で、シーターが王子をしつかり抱き寄せる。華奢な身体は意外に従順で、されるがままであった。

しばらくして後、王子の寝室では、少し薄衣をまとっただけ、ほ

とんど裸身のシーターが、王子のからだを拭って清めている。張りつめた彼女の肌が初々しく輝く。

「シーターとは、まるで、知恵比べだね」

王子が、裸を預けながら白い歯を見せ、顔を覗きこむ。

「いいえ、王子さまと知恵比べなど、いたしておりません」

「どこにいても、かならず見つけ出す『千里眼』なのに…、ですか」

「はい。どのときも、王子さまを大切に思う心が、そつと導いてくれるのです」

彼女は、侍従頭の許可をえて、王子を洗い清めたあとの水で自分のからだを拭う。胸いっぱい豊かな乳房がゆれている。

清め終わると、再び、許可をえて王子に声をかけた。

「冷えておからだに障ってはいけません。シーターが暖めさせていただきます。おいでください」

ベッドの脇、厚い絨毯じゅうたんのうえにあぐらして坐ったシーターの豊満な乳房めがけ、王子が飛び込んだ。初々しく暖かな肌が、華奢な身体を包む。侍従頭が、二人の身体をシルクの布でそつと巻く。

王子の冷えた身体にゆっくりと女の体温が滲しみていく。

「千里眼とは、大切に思う心…なんだ」

シーターにしがみつき、五歳の王子がぼつりと呟いた。



それから二年後…。

そろそろシツダッタ王子にウパナヤナの儀式を受けさせようかと
思案中のシャカ国王スッドーダナのもとへ二人の使者が訪れる。

ウパナヤナの儀式とは、バラモン教のいわば元服式で、バラモン
やクシャトリアなど上流階級の男子が七、八歳になると、師をきめ、
ヴェーダ経典を口伝くでんで暗誦するほか、兵法、武術、天文、古典など
を学ぶのである。

王子の教育係のランガラ賢者は三十歳そこそこ、スッドーダナ
王に仕える宮廷司祭長の長男で、聡明さ、沈着さ、豪胆さが衆に抜
き出、若いのに国中から賢者と敬われていた。ただバラモン僧独特
の形に髪を結わないので、親しみをこめて「長髪の賢者さま」と呼
ばれている。

スッドーダナ王は、彼の人物、評判からして、ウパナヤナのあと
は、正式に王子の師とするつもりだった。それも、ただ学芸ばかり
でなく、何はさておいても基本として、「帝王学」を授けてもらい、
後継者として育ててほしいと熱望していた…。

一方、侍女のシーターは十六歳、聡明で思いやり深い女性に成長

している。シッタッタ王子に劣らず洞察力に優れ、ほかの侍女には、まったく不可解な王子の行動もすらすら読み解くので、王子からの信頼は日を追うごとに厚くなっていった。

五歳の王子に『千里眼とは、大切に思う心』…なんだ」といわせただけあって、王子への敬愛の気持ちはひとしお深く、とくに、生後間もなく実母を失った王子の境涯への思い入れは、余人にかえられないものだった。

母を失ったとはいえ、実母は継母として母の末の妹が迎えられ、実母に変わらぬ愛情に恵まれたが、シーターの思いの深さは、それに勝るとも劣らないと噂された。

そんなようすに、スジャータ侍従頭は、自分に代わってシーターを、その任にあたらせるよう王に進言しているのだった…。

そんなとき、申し合わせたように相前後し、使者の一行が、二組、シャカ国の城門に到着する。門を守る兵士に向かって、それぞれ、コーサラ王国とマガダ王国からだと告げた。

両国とも、シャカ国とは比較にならないほどの強国で、わけても、コーサラ王国は、シャカ国の西南に接する大国、王はこれに恭順の意を表して朝貢していた。マガダ王国は、さらにその南東、コーサラ王国に接する新興国だが、もっと強大で勢いがあった。

両国の使者がもたらしたのは、王が、いままさに、ウパナヤナの

儀式をあげさせ、王子教育の中心に据えようと考える重要人物への誹謗中傷だった。

コーサラの使者は、迎賓館に迎えいられると、スッドーダナ王に人払いをさせ、重々しく口をひらく。

血走った目が、王を頭から噛むようだった。

「正統なバラモンの国、コーサラ国王のことばとしてお聞きいただきたい。何度も申しあげた通り、貴国の司祭長ターシーブトラは、バラモンと自称するにすぎない卑しい階級の出身者である。ましてその子、ラーンガラは、貴国では、『長髪の賢者』などともてはやされているようだが、われわれ、正統なバラモン国からすれば、はねあがり者もいいたころ、異端の輩である。髪も正しく結ばない者がバラモンと称するなど、もつてのほかである。

それに、マガダ王国と気脈を通じていると、もつぱらの噂である。彼を、聡明な王子の師としてウパナヤナをあげられるのは、問題かと存ずる。われわれが、正統なバラモンの賢者を派遣するので、ぜひ、受け入れをご検討いただきたい。

これはコーサラ国王、直々のことばである」

いい終わると、使者は、再び、血走った目で王を威嚇した。

「余計な内政干渉だ。シャカ国にはシャカ国の流儀がある」と一喝したいところだが、小国の悲惨さを知り尽くしたスッドーダナ王は、

丁重に使者をもてなし、後刻、貴王に使者を遣わすと約束する。

内部かく乱策に踊らされ、司祭長の一家を追放でもしたら、王への不信を招き、シャカ国の強固な結束がゆらぐのは、十分に承知していた。バラモンの派遣の申し出を断るしるしとして、相応の宝物を携えさせ使者をコーサラ王国へ遣わすつもりである。

いわれのないいがかりだが、小国の悲しさ、ただ、恭順の意をあらわすほかない。ただ、内部にゆるぎない結束さえ保っておれば、いかに強国といえども容易には攻め込めまい。

時を同じくして遣わされたマガダの使者は、侍女シーターへの誹謗中傷を運んできた。

マガダの使者は迎賓館へ通されると、友好的な態度を見せながらもこういった。

シーターは、幼い王子の信頼が厚いようだが、コーサラ国のさる有力なバラモンの廻し者である。そのバラモンこそ、毎日、シャカ国を呪う祈祷に明け暮れている。スッドーダナ王もシツダッタ王子も、このままでは、不幸な急死を遂げることになるだろう。マガダ王国としては、逆に、シツダッタ王子に一刻も早く勇壮な王になつてもらふことが念願である。ついては、従来のバラモンの旧弊にこだわらない、よく躡されて美しい侍女を十名ばかり贈りたいので、気遣うことなく受け取ってもらいたい…というのだった。

コーサラの使者ほど威嚇的ではないが、マガダ王国もそれなりの思惑をもって、王子のウパナヤナを機に、何か陰謀をたくらむらしかった。

これにも、また、宝物の使者を遣わさねばならない。そのころ、北インドでは、十六大国と呼ばれる国々が群雄割拠し、このように、権謀術数と侵略を展開していたのだった。



シャカ国では、王子の教育方針やウパナヤナ儀式のあり方などをめぐり、世代間の隔たりが表面化している。

ランガラ賢者は、王子を「大王」に育てるのが夢だった。

いま、シャカ国は、スッドーダナ王の四人の弟を中心にくつかの部族が平等に結束した部族国家である。国の重要事項は、各部族の代表が集まって会議で決めるので、自主自立の気概は強いが、国家といっても、所詮、小部族の集合体にすぎない。

ガンジスの中・下流に位置するコーサラやマガダ王国は、「大王」の統治する王制国家である。各部族長は「大王」の配下にくだつて整然と統治され、農業、商工業が盛んで税制が整い、強大な軍備を誇る。税の取り立てが厳しい反面、街はにぎわい、人々の暮らしは

豊かである。

こうした状況では、部族国家が、王制国家の軍門にくだるのは時間の問題であろう。

ラインガラ賢者は、スッドーダナ王から王子の教育方針について諮問を受けたとき、あらまし、そんなことをいったのだった。

そのとき、王は低い声で静かに答えた。

「少なくとも、わたしは、その器ではない。それに、そうした運もめぐってこなかった。強国に潰されないだけで、精一杯だった。

シッタータは、まだ幼くて、まったくの白紙である。願わくは、

そうした大器であつてほしいとも願うが、強国への道は至難である。運がめぐりきて、しかも神の加護がなかったら、王国など、なろうとしてなれるものではない。それに、生涯、戦いに明け暮れるわが子を見るのも、しのびない。若いそなたには笑われそうだが、現状維持がやっと、というところではなからうか……」

ラインガラ賢者はもちろん不満だった。

小国とはいえ、王には、もつと断固たる覇気がほしかった。稲作と製鉄が盛んで豊かなシャカ国ゆえ、それを武器に、もつと他国と覇権を競ってもらいたいと思う。だが、王の実直で人間味あふれる態度を見ると、反論さえできない。

王子に、夏、冬、雨季の宮殿を与え、侍女ばかりはべらせて毎日

を送らせる教育方針は、軟弱な後継者を育てるだけと、苦言の一言も述べたかったが、それもいえなかった。

ただ、ウパナヤナを機に、王子には、見聞を広げる実地教育をやらせてほしいと、裁決を仰ぐのがやっとだった。

さらにまた、ラインガラ賢者は、ウパナヤナ儀式を一時のお祭り騒ぎで終わらせたくないのだった。

表面の派手さより、次の国王にふさわしい自覚と責任を促すような、もつと内面的なやり方がある筈である。そうしてこそ、聡明な王子に似つかわしいし、さすがによく考えていると、内外への強いメッセージにもなるにちがいない。

それに、王子のきわめて私的な行事にもかかわらず、早速、当然であるかのように、近隣国からは内政干渉の魔手が伸びてきている。その懐柔には莫大な出費も覚悟せねばならないのに、派手なお祭り騒ぎなど、許されるはずがないのである。

しかし、そんな情勢を考慮することもなく、ラインガラの父、ダーシープトラは、ウパナヤナ儀式の執行責任者として、相も変わらずバラモンの古式を尊ぶのだった。

儀式は七日間とり行う方針だという。

連日、型通り、護摩ごまを焚いて神々への賛歌を詠い、王の権威を示すため牛十頭ずつを生贄とするほか、神酒のソーマ酒、穀物、乳製

品なども供える。

曰く、対象を変えて人々を招いて馳走をふるまい、神に供えたあとのソーマ酒を飲み交わす。その製法は、バラモンの秘伝中の秘伝、ベニテングダケという茸を原料とし、飲めば恍惚の境地に誘われる。

この一大儀式が終わると、後継者門出の意義深い行事を記念して、司祭長には、王からひとつの村が寄進される…。

こうした父の取り組みに、ラインガラはまったく反対だった。あの意味で、国難に乗じて私腹をこやす行為とも見えた。

しかし意見する息子に、父は、決まり文句を並べる。

「神々への供養、人々への布施を王に促し、さらに、神官への寄進などによって、王に功德を積んでいただくのが、バラモンの使命である。そうしてこそ、国内にダルマ（天の法）による政治が行きわたり、戦乱や自然災害、厄病が止み、国がおのずと栄えるものだ」
ラインガラは、もういうことはもなく、白けきった心境だった…。
こうして、コーサラとマガダの両王国へ向け、宝物と美女たちを贈る長い行列が衛兵に護られて城門を出発していった。彼らの帰国を待ち、やがて、シッタッタ王子の盛大なウパナヤナが挙行の運びとなる。

カピラ城の庭園に斎場と屋外の大宴会場が設けられた。専門の

ツク部隊が呼ばれた。司祭の指示を受け、かまどの設置から仕込み、調理、給仕などの準備万端が終わる。

いよいよ儀式当日、着飾った大勢の僧侶によって護摩の大祈祷が行われたあと、手順に厳しいウパナヤナの呪い儀式をシッタッタ王子が、いささか硬くなりながら、教えられた通り無事に終える。

そのあと、毎日、数千人もの客が招待され、馳走がふるまわれた。こうして七日間、派手な散財が行われたのだが、これこそが、王として理想の高徳の振る舞いなのであった。



シヤカ国のカピラ城下では、その日、雨季明けの満月祭が行われるのだった。

ひときわ明るい太陽が昇ると、城内中央の櫓やぐらから祭りを告げる太鼓が高らかに響きわたる。同時に、城内、数カ所の櫓からも太鼓が鳴った。

遠く朝日に映えたヒマラヤの嶺々が、その音でいつそう神々しく輝くかに見える。アンナプルナの白嶺が、山脈の中央に頭ひとつ高く聳えて赤く染まり、美しい稜線が青空にきわ立つ。

ベッドで太鼓を耳にしたシッタッタは心がはやった。

ウパナヤナの儀式以来、ヴェーダ經典の暗唱や兵法、武術など決まった日課をこなす毎日だが、その日は休みである。しかも、この祭りから、ラーンガラ賢者を供に徒歩での見物が許される。前回までは飾り立てた馬車の中だった。

花輪などで着飾った人々がごつたがえす中を、砂埃や花々の香り、強い香水の匂いなどに酔いながら心ゆくまで、店々をのぞき、踊りや曲芸など大道芸も間近に見てみたい。

特に、城外の村々からは、野菜や果物がどっさり持ちこまれるほか、芸人は笛、太鼓、踊り、曲芸、獅師はペット用の珍獣や干し肉、毛皮、木こりは家具や香木の置物など、それぞれ珍品逸品を携えて商売にやってくる。どれにも興味は尽きないし、それらの村々の暮らしぶりも聞いてみたい。

海に向うや西方からの珍しい品々も隊商が運んでくる。遠い国々の奇物珍獣にも触れたいし、異国の秘話奇談も聞きたい。

それに、父王が、飾り立てた象で城内を巡行するので、もちろん、その姿も見てみたい。とりわけ、城下の人々が、王のそんな姿に、どんな反応を示すのか、ぜひとも確かめたい。

とりわけ一番やってみたいのは、修行者との会話だった。

朝、城門がひらかれると、修行者の一群が、ある者は裸形で、ある者は糞掃衣ふんそうえという粗衣で姿を見せる。日頃は家々を托鉢たくはつしてま

わるのだが、祭りのときは、園林の大樹の陰などで足を組み、托鉢の鉢をまえに瞑想する。

しばらくして、それが適度に満ちると、風のように、城外の深い森や丘のかなたの修行場に姿を消すのだった。

それらの修行者と直々に会ってみたい…。

そんなことを思いめぐらすと、もう、じっとしていらなかった。

だが、まだ早朝なので、侍従頭シーターからは準備の声はかからない。じっと耐えるほかない。ベッドの前で足を組み、短い語句を唱え唱え、はやる心を鎮める。

象百頭に勝つより一人の自分に勝て。これぞ真の勝者。

あるとき、少し身勝手な理由でシッダッタが侍女を責めたら、

「大王さまにおなりになるお方が、小さな自分に負けてはなりません。大国を治めるまえに、ご自分を治めるのです…」

と、シーターから、百頭の象を倒す武勇より小我を殺す自制心の大切さを教わった。忘れないため、自ら詩の形に整え、ことあるごとに唱える習慣としていた。

象百頭に勝つより一人の自分に勝て。これぞ真の勝者…。

やがて、外出準備を告げに王子の寢室を訪れたシーターは、幼い瞑想姿に一部始終を理解する。そんな王子を見ると、敬愛の気持ちが、いつそう深まっていく。

ただ一言の注意さえ、一旦、王子に受け止められると、見事な詩であらわされるばかりか、たちどころに実践に移され、日常の寝起きに織りこまれてしまう。

鎮まった少年の姿に、声をかけるさえ憚れた。

「王子さま……」

目が牛のそのようにひらかれた。瞳は、波立たない深い湖水を思わせる。

外出準備には、沐浴してベナレス産の伽羅きゃらの香水を塗り、やはりベナレス産のシルクで身を包んでから、宝石の首飾り、黄金の腕輪、足輪などをつける。最後に、頭上に、祭り仕立てのターバンかかん花冠を載せる。さらさら光るものは、装身と同時に魔除けなのである。

着つけ・飾りつけは、十代の若い侍女たちの手で、華やかな笑いさざめきのうちに行われる。王子は、侍女たちの自然な振る舞いを好むのだった。

ただ、沐浴と香水のときは、王子の肌に、侍女たちの手が触れることはない。王子の身体を中心部へはシーターの手しか許されないのだった。王子自身もそれを望むかに見えた。

台座に腰掛けた王子は、はや宝石の首飾り、黄金の腕輪などを身につけている。悪戯盛りの少年も、宝石と黄金で飾りつけられると、ちよっとした動作さえ、王者らしく変身した。

そんな変化を見つめながらシーターが不安を募らせる。

ランガラ賢者といっしょとはいえ、初めての祭り見物である。

異常なほどに好奇心の強い王子だから、一つに夢中になった隙に、さそりや毒虫、毒蛇にやられはしないか。幼いときのように、もう、突如消えたりはしないが、何かを深追いしすぎて思わぬトラブルに巻きこまれはしないか…。

とりわけ、城下での王子の評判は目覚ましい。城中をさがった侍女たちの口から、深い敬愛の気持ちが続々に伝えられるので、一目でも拝みたいという人々の列は引きも切らないであろう。そんな群集に囲まれ、王子は、どう振る舞うだろう…。

「何をどうご覧なされたか、ヒマラヤの山ほどのお土産話を、心からお待ちいたします。

ただ、道を歩まれますとき、見物なされるとき、群衆に囲まれなされたとき、どのようなときも、心静かに真ん中をお進みください。

脇にそれると、思わぬ毒虫や厄介が潜んでいるものでございます」
ひざまずいて話すシーターを台座から見下ろし、王子が白い歯を覗かせる。黄金の腕輪・足輪の仕上げのために、両手足をゆったりと侍女たちに預けている。

「ありがとつ。天に届くほどの土産話をかかえて持ち帰ります。でも、どんなに珍しいもの、興味深いものがあったても、心奪われる

ことなく、平静に、知恵だけを働かせることにします。

心を奪われず、真ん中を歩め。これぞ多くを学ぶ道……。ですね」
こんなときのアドバイスは、祭り気分ですわがわがで浮かれています。侍女の世話も邪魔にならず、すんなりと届きにくいものである。

シッタッタには、そんな状況にお構いなく、意図が届いて的の中ずる。だから、シーターの愛情はますます深まるのだった。

不

ラインガラ賢者の予想は的中した。

城を出た馬車が、城下のほぼ中央、東西南北に走る幅六メートルの大路が交差するあたり、望楼の立つ広場にさしかかると、大群衆にとり囲まれてしまった。たちまち立往生である。

あらかじめ屈強な衛兵を市民に変装させ、くれぐれも粗暴な振る舞いのないようにいい渡し、数百名が配置してあった。

早速、衛兵が、それとわからないよう馬車を遠巻きに囲む。お陰で、馬車を中心に大きい人垣の円が描かれ、人々が平等に王子の姿を見ることが出来る陣形となる。

いつの間にか、望楼はもちろん、あたりの大木にも人々が鈴なりである。その高みの見物人たちから一斉に歓声があがった。

王子が馬車から降り立つのだ。

ターバン花冠^{かかん}の華やかさ、首飾りや腕輪、足輪のきらびやかさが、人々の目を奪った。人垣が猛烈な勢いで縮まろうとする。

シッタッタは、熱狂的な歓迎の群衆にすっかりあがってしまった。馬車のステップを踏むときから足の震えがとまらない。馬車からどう降り、どこをどう進んでいるのか、ラインガラ賢者の姿がどこにあるのか、もう何も見えなかった。

王子がともかく歩を進めると、そこが、モンスーンの目となって、^{あびた}夥しい群衆が歓声をあげながら勢いよく渦を巻き、王子めがけて雪崩れていく。

しばらくして、シッタッタは足元の異変を知って震えあがった。なんと、マンゴーやパイナップル、バナナのうえを、それと知らず踏んづけて歩いていたのである。それも、よくよく観察すると、王子の姿に目を奪われた群衆が、前を歩きながら、踏み潰した跡らしい。人垣が邪魔して見通しがきかないが、いままで歩いて来たのは、どうやら大路の端で、地面には葎が敷かれ、村人たちの店々の商品が並んでいたのだった。

心を奪われず、真ん中を歩め。心を奪われず……

幾度か呪文を唱えると、天下の大道が真横を走っているのがわかる。あわてずシッタッタは、道の縁の土留石^{とどめいし}を頼りに、中央へと歩

を進めた。すると、サンダルの裏に舗装道の確かさが伝わってきた。

道路は、鉄滓を基礎に入れて、砕いたレンガを敷き詰め、表面を固く叩いてある。

王子が進路を変えた途端に、モンスーンの円形がかたちを変え、今度は大路に沿って縦に伸びはじめた。王子が歩むと、前方を道に沿って幾重もの人垣が立ち並び、後方を大群集がついてくるが、どうやら大路から外れてはいない模様である。

心を奪われず、真ん中を歩め。これぞ…。

シッタッタは、呪文を唱えながらゆっくり前後を確かめ、今度は、村人たちの店々が大丈夫なのに、ほっとする。

モンスーンが去った後では、早速、事前にランガラ賢者から命を帯びた衛兵たちが、被害を受けた店々を訪れ、シッタッタ王子からだと損害賠償の硬貨を握らせてまわる。

事情を聞いた人々から歓声があがる。

と、そのとき、どこからか、息せき切って若者が駆けつけ、かごいっぱいマンゴーを王子の胸に押しつける。王族には、むやみにものを手渡さないのを礼儀としたが、若者は、こらえきれなかったのである。やむなく、王子は、それを抱いて歩かざるをえない。

しばらく行くと、まわりが竹林の蓮池がある。岸边には沐浴のためのガート（石段）が設けられているが、祭りの日は、そこが劇場

の観覧席となる。池の横の小高い丘で、毎年、大道芸の踊りや曲芸、楽団の演奏が行われるのである。

シッタッタは、大道芸を楽しもうにも、いままでは馬車の窓からだったので、今年こそと期待して足を運んだが、大群衆の雑踏の中では楽しむ余裕もない。芸人たちも勝手がちがうのか、自由奔放でないように思われ、少しがっかりさせられる。

先ほど、ふと気づいたのだが、ランガラ賢者は、いつも数歩後ろを歩み、決して前に出てこない。側において、もっとあれこれ指図してくれると思っていたが、何事も、王子が自分で判断せねばならないのだった。

そんなことを思いながら、次に、王子は、鬱蒼とした森へ足を踏み入れていく。城内に残された密林の一部で、昔、シャカ族がこの地を開いたとき、野猿の群れが生息していたので、いわば、鎮守の森のように、園林として残したという。いまも野猿が多い。

毎年、その奥、密生する大樹の根方で、幾人かの修行者が瞑想している。王子は、そこへ行くつもりだった。

シッタッタが、その園林の入口にさしかかったとき、師が、はじめて、あわてて吹っ飛んできた。

行く手に、乞食の一団がうずくまって道を阻んでいたのだが、そのなかに、レプラの人らしい姿がまぎれこんでいる。

シッダッタは話には聞いていたが、姿を見るのは初めてだった。だから、最初、それとは気がつかなかった。

ラーンガラ賢者は、王子の横に飛んでくると、大声で呪文を唱えた。すると、さらに、背後から怒るような大声の呪文が聞こえたかと思うと、一人の若い裸形の修行者が、王子とレプラの人との間に割って入り、ゆくてに立ちはだかった。

どちらも、明らかに悪魔の祟りを解こうとする祈祷である。

突然のことで、シッダッタは、どう振る舞えばいいか、困ってしまつ。と、やはり、あのことが頭をかすめる。

心を奪われず、真ん中を歩め。これぞ多くを学ぶ道。

シッダッタは、ためらわず大路の中央をそのまま闊歩することにした。その先にはもの乞いのレプラの人が待ちかまえる。

だが、王子は一直線に歩む。

先ほどまで、熱気を帯びて渦巻いたモンスーンの目が、急に静まりかえって固唾のみ、円が、飛び散るかと思われた。

だが、シッダッタの歩みは止まらない。勢いに押されたのか、若い修行者も道を開けた。やがてもの乞いのレプラの人に近づくと、王子は、マンゴーの大きなかごをその胸に抱かせた。

その一瞬、シッダッタは、その異形にはじめて気づき、驚き戸惑うが、シーターの呪文が口を突いて出る。

心を奪われず、真ん中を歩め。これぞ……。

最初は、すぐにも逃げ出したい気持ちだった。しかし、呪文の陰で、もちまえの何でも見ても見てもやれ精神が働き、辛うじて相手に投げかけた視線をはずさないですんだ。

そんな小さな動作さえ、一斉に注がれる大観衆の目によって束縛されるのを、シッダッタははじめて痛感する。それを熟知しているので、ラーンガラ賢者は、いまさら手出ししようとしなない。

ひと抱えもあるマンゴーをもらったうえ、頭から爪先まで、花冠^{かかん}や首飾りなど金銀で着飾った王子に見つめられると、レプラの人は、太陽に照らされたように熱くなり、感激の大声をあげて泣きすがらうとする。

驚いて裸形の修行者が割って入った。

いわば全国民が注視の中なので、行きがかり上、王子は、修行者の行動を退けざるをえない……。

王子のそんな一挙手一投足に、大観衆が息を呑み、溜息が漏れる。

ラーンガラ賢者は、そんな光景を見ながら、日ごろ侍女ばかりに囲まれた王子が、やっと外気に触れだしたとひとりよごこんでいる。



「王子、こちらへ来るのです」

背後から声をかけたのは、先ほどの修行者だった。王子の前に立つと、先導しはじめた。長髪のランガラ賢者とは異なり、バラモン式に正しく髪を結び、裸形である。やっと修行者と会話ができる、シツダッタは心が躍った。修行者は、やがて大樹の根方に足を組むと、王子を招きよせて坐らせる。

二人が腰をおろした大樹は、十人が両手を伸ばしてやっと届くほどに巨大な菩提樹で、「ゴージット（英雄）」と呼んで崇められていた。枝からは、大蛇かと思まちながう蔓が、滝のように、絡まりながらたれさがっている。

このとき、幼いシツダッタは知るよしもないが、この修行者は、シャーリプトラという聡明なバラモンで、出生地マガダ王国の首都、王舎城近くの村から、インド全土を歩き、高名な哲人に師事してきたが、いまなお、帰依する師をもたないのであった。

満月祭で、高名なシツダッタに会えるかもしれないと、カピラ城下に足を運んだいた。

修行者が低い声で問いかける。

「チャンダラに触れたときの、バラモンの教えを答えなさい」

チャンダラとは、バラモン、クシャトリア、スードラという順に高いとされる身分制度の最下層、スードラのまだ下の、いわば賤民をさすのだった。

シャーリプトラは、さきほど、シツダッタが、悪魔の呪いとされるレプラの人に平然と近づいて布施するのを見、バラモンの考えでは、異常とも非常識ともとれる、その行動の真意を知りたかつたのである。

裸形で正式に髪を結ったバラモンといえば、最高のエリート、王子といえども、したがわざるを得ない。

威厳ある声に、シツダッタは、思わず回答を促され、即座に、淀みなく答えを暗唱してみせた。

「さすがに聡明な王子、いかにもその通りである。しかし、王子が布施を与えた者は、チャンダラよりもっと穢れたもの、前世の業によつて悪魔の祟りを受けたものである。そこで、王子、輪廻転生についての、バラモンの教えを答えていただきたい」

王子は、それにも、すらすらと経文を誦んじてみせる。

「いかにもその通りである。では、王子自身、その穢れてしまった御身をいかなされるおつもりか」

シツダッタは、少しもあわてるようすを見せなかった。

しばらくすると、居住まいをただし、花冠を脱いでわきに置く。

続いて、首飾り、腕輪など、金銀の装身具をすべてとりはらうと、花冠の横に並べた。

人々は何がはじまるのだろうと、それこそ目を皿にする。

そこで、シッダッタは、すがすがしい白衣の右肩を脱いで立ちあがると、修行者の周りを三回右廻りしてから最敬礼して坐りなおし、静かに頭をさげる。最高の敬意の表現だった。

「尊者さまがお許しくださるなら、ごいっしょに、この大樹の根方で、梵我一如ほんがいちにょの瞑想に入りたいと思います」

静まった密林に王子の声は凜と響く。

シャーリプトラは、王子から「どうか、浄化儀礼をとり行ってください」ということばを期待していた。古来、神に願って祟りを被えるのは、司祭階級のバラモンだけとされてきた。

だが、シッダッタが口にしたのは、自力浄化を願う「梵我一如の瞑想」ということばだった。

宇宙に宿る梵ほん（ダルマ・真実・天の法）と一体となり、それを実践するといふのである。

「梵我一如の瞑想で、なぜ、穢れが被えるのか、お答えいただきたい」

「マンガーのかごを渡すとき、わたくしは、彼に恐怖を覚えました。外形がどうであれ、彼も人の子です。わたくしも人の子です。共通

のダルマがあるはず。そのダルマに近づき、彼を、人として感じたいのです。彼によつて穢されたかどうかより、彼を同じ仲間と感ずることの方が、わたくしには大切と思えるのです。

それゆえ、このゴージット（英雄）の樹神のお力も借り、尊者さまとごいっしょに瞑想をさせていただきとつごいます」

シャーリプトラは、震えながらそのことばを聴いていた。



それから三年後の秋……。

王子に初の北への旅が待っていた。

ひたすら大王への成長を願うラーンガラ賢者が周到に練りあげた実地見聞の旅である。

カピラ城を出てやや北東へ五日間、ヒマラヤ山脈の主峰の一つ、アンナプルナ山麓の村にいたる。一時間に約三キロ歩いて一日約十時間、ほぼ百五十キロの行程である。そこから東方へさらに四、五日、ヒマラヤ山麓沿いに進む。やはり百五十キロばかりである。

その地域を本拠とする部族を、一カ月かけて訪問するのである。

北東への旅を選んだのは、南東のガンジス川中流域は、コーサラやマガダなど強大国が占めているが、ここは、原生林などの広がる

未開の土地が残り、小さな部族が点在するにすぎないからだ。

シツダツタが覇を唱えるときは、まず、ここを押さえて足がかりとせよという示唆でもあった。そのためには、幼いときから土地勘を養うことが大切であるし、王子自身が、それらの部族長とよしみ通じることができれば、理想的である。

早くからそういう構想をもっていたラインガラ賢者は、永年かけて北東域の部族とよしみを結ぶべく、自らもしばしばこの地を訪れ、使者も遣わしていた。

雨季明けの満月祭には、こうした部族長に使者を出して特産品の販売を呼びかけ、現金収入の機会も与えた。とくに、よしみの厚い部族長が、祭に姿を見せると、スッドーダナ王に会見させ、王じきじきシャカ国特産の鉄の供給を約束させるなど、仲介の労もとった。周辺の森林部族や狩猟部族にとって、鉄は、伐採や開墾、狩猟に欠かせない貴重品中の貴重品だった。

ラインガラ賢者の外交武器は、それだけではない。

「ラインガラ」というのは牛に引かせる「犁」^{すき}のことで、名前を聞くだけで、農耕民族の末裔と察しがつく。

インドには、大昔、農耕を行う母系制の先住民が住んでいた。

そこへ北方から侵入した遊牧の民アーリア人が征服者となって自らを優れた血統のバラモンと称し、定住して農耕文化を受け入れつつ、

先住民を下層の者として支配してきたのだった。

そんな背景のなか、「ラインガラ」という名前は、アーリア民族でもなければバラモンでもないことを、牡牛の角のように、強固、かつ頑固に主張しているのだった。

ラインガラ賢者が、よしみを結んできた北東域の部族の人々は、先住民か、はるばるヒマラヤを越えてきたアジア系の部族が多いので、ラインガラという泥臭い名前だけで、アウトサイダー民族としての気脈が通じるのかもしれない。

王子の北への旅は、そうした友好関係の厚い部族間を縫って企画されたものだった。

そんな事情は、王子には明かされていない。ただ、王子には、今回の旅は隊商と一緒に伝えてある。実際は、万に備え、商人に変装した軍隊で、一部、ほんとうの商人も参加させ、どっさり買い込んだ部族長への土産の品々を牛車ごと何台も運ばせるほか、道すがら商いもさせる手筈である。

それに、実地見聞の旅といっても、王子は、糞掃衣をまとって修行者の姿となり、裸足で歩く。

正直、ここは、ラインガラ賢者がもっとも思案した点だった。

「大王」をめざさせる王子に物見遊山の「大名旅行」などさせるつもりは、毛頭なかった。かといって、まわりの国々にも名声の聞

こえた王子である。中途半端な旅ではランガラ自身、それこそ笑
いものなるだろう。そこで、思いついたのが糞掃衣と裸足だった。

幸い、三年まえの満月祭以来、王子を賛美する噂が、国内外に高
まっているので、これを利用することにしたのである。

人々は王子を美化して口から口へこう伝えている…。

シツダッタ王子様は偉いお方だ。はじめて独りで祭りにお出に
なつたとき、一目、お姿を見ようと群がった人々が、押しあいへし
あい踏み潰した露店の品々を、そっくり弁償するようその場でお命
じなされたのだ。

いや、そればかりか、誰も近づかないレプラの人を目にするや、
駆け寄つて布施をし、彼が天に生まれ変わるよう、修行者と一緒に
祈禱なされた。だから、折角、象に乗つてお側を通りかかった王様
にさえ気づかれなかつたのだ。王様もお情け深いが、王子様はもつ
とお情け深い。

こういふ噂のなか、王子が、修行者の姿となつて旅に出たとなれ
ば、名声はいっそう高まるにちがいないと、ランガラ賢者は考え
たのだった。

ただ、問題はスッドーダナ王の説得だった。

幸い、侍従頭シーターも大賛成で、王のまえにいっしょに両手を
ついてくれた。人間味豊かな王だけに、献身的な教育係二人から頭

を下げられると、もう反対はできないのだった。



旅立ちの前日、昼休みの瞑想から立ちあがった王子が沐浴をすま
せると、侍従頭のシーターは、若い侍女たちを遠ざけた。

しばし別れを惜しみたかつたし、それとなく長旅にふさわしいア
ドバイスも与えておきたかつた。しかし、この二、三年、精神的な
成長の著しい王子には、老婆心の類かもしれない。

沐浴池の傍らの台座に王子を坐らせ、濡れた腰布こしぎれをとり去ると、
身体のしずくを拭うため、首から下へとゆっくり布を当てていく。
放置しても、すぐに蒸発するのだが、濃やかな世話がシーターの心
尽くしでもあつた。

早熟というか、最近、背丈も伸びてすっかり男らしくなつた体つ
きに、シーターは、しばしば戸惑つたのだった。おまけに、その日は、
なぜか、王子がおとなに見えてならない。

水面には澄みきつた乾季の空が落ちている。竹林が池をめぐるが、
葉を騒がす一陣の風もない。日陰がすがすがしい。

ランガラ賢者に請われ、一年ばかり王子の北への旅の計画にか
かわつたが、その日がついに明日に迫つた。

王子に触れるシーターの手が、肌触りを惜しむようではない。

最後に足先を拭ってからひざまずき、足に口づけして語りかける。

日常のしぐさにすぎないが、なぜか、心がこもる。

「一カ月あまり、初めての長旅となりますが、道中のご無事と大きい収穫を心からお祈りしております…」

旅の期待にふくらんだ王子の笑顔がシーターに注がれる。

「ありがとうございます。まったく心配などいりませんが、ただ一つ不安があります」

「」

「シーターが側にいてくれないことです」

「しかし、ここ数カ月のご努力で、ほとんどのことは、お一人でできになります」

「身の世話のことではありません」

「」

「ここぞという肝心なとき、心の構えのアドバイスがもらえませんか」

「そんなにおっしゃってくださいれば、シーターは、天にも昇る思いでございます」

「ぜひ、一言、この旅、全般についてのアドバイスがほしい」

シーターは、裸身の足元にひざまずいたまま、予想もしなかったことばをかみしめ、王子の目を見あげる。

次は、シーターが両手で香料を塗る段取りであった。

「立って失礼します…」

傍らに立ち、香料をふくませた両手で肩を軽くマッサージしながら、旅立ちの訓話をはじめめる。

初めての旅は、将来に強い影響を残すだろうから、彼女は、深い真理を伝えようと準備してあった。

「これは、子どものころ村の長老からお聞きしたお話です…」

象は、大きな身体に似あわず、自己の内面に、もっとも耳を傾ける動物だそうです。

象軍は、いざ合戦というとき、お酒を飲ませると無敵なほどに狂暴となるそうですが、野生では、沈着冷静で智慧に富み、まるで、自分にダルマ（天の法）が宿るのを知っていて、それに耳を傾けて行動しているみたいだということです」

シッタッタの顔つきが見る見る真剣になる。

「その長老によりますと、生き物は、どれも多かれ少なかれ、自分にダルマの宿ることを知っているが、象だけは別格で、森の賢者といっても過言でないそうです。もっとも無頓着なのは人間で、象の足元にも及ばないとおっしゃるのです」

シーターは、王子の背後から横へとまわりながら香料を塗りつづけた。

「とてもためになります。もつと話してください」

「これ以上、詳しくは存じませんが、もつとも感銘深いのは、象が死期を知って象の墓場に向うことだそうです。不慮の事故でもないかぎり屍をさらすことはないのです。それに、怪我や病気のときは、決して無理をせず、動かずにじつと静養するといいます」

シッタッタは、身体をシーターに預けながら小さく呟く。

「身体にもダルマが宿る…肉体の声に耳を傾けよ…」

王子の横でシーターがつづける。

「それに、象は、かならず仲間と一緒に行動し、単独行動はしないそうです。子象は、家族みんなで守るし、仮に、誰かが、不慮の事故で死ぬようなことがあれば、白骨になっても、仲間だったことを忘れず、近くを通れば、かならず鼻で、生きた仲間同様に慰撫するそうです」

シッタッタはまた独り呟く。

「生きとし生けるもの、すべてにダルマが宿る。われにもダルマが宿る。わが肉体の声に耳を傾けること、即ち、生き物すべてに通じる梵我一如の瞑想」。

シーターのアドバースとは、つまりは、そういうことなのだ…
いつか、シーターの手がシッタッタの身体の中心部に届く。毎日繰り返す同じ仕草なのに、その一瞬は、シーターにもシッタッタに

も、格別の意味を帯びるように思われた。

ふたりの胸が急に高鳴った。

シーターが、驚いて手のものをそっと離す。シッタッタの心に、その瞬間、炎のように閃く思いが渦を巻いた。

シッタッタがひとりそつと呟いた。

「わたくしの肉体の声に耳を傾ければ、シーターの心が聞こえるのだろうか…」



その朝、旅の師弟がピラ城を発つのは、日の出前だった。

北の城門が開かれると、ランガラ賢者が宣告した。

「王子、自らがよりどころの旅です、さあ、出かけましょう」

数日まえ行程の説明は受けたが、一言の注意も旅の予備知識も与えられていない。シーターから象の話があっただけである…。

門前に立つてシッタッタが顔をあげると、東雲のヒマラヤの高い嶺々がはるか彼方にかすんでいる。その上に、アンナプルナの白い嶺が聳え立ち、白みゆく空にまぼろしのように浮かぶ。

薄靄の彼方へ向けて、シッタッタの胸は高鳴った。あこがれつつけた修行者姿での旅立ちである。

「はい、では、自分をよりどころの旅に発ちましょう」

一つ深呼吸のあと、シッタッタが答えた。

やがて、糞掃衣に頭陀袋ずだぶくろ、裸足姿の二人が、城門をあとにした。

ランガラ賢者の要請で、関係者の見送りは控えられ、ひとりの人影もなかった。ただ、朝カラスが城門の木立で騒々しい。

城門を出ると、街道は、北のヒマラヤの霊峰に向かって一直線に伸びる。両側には、田畑がどこまでも広がり、所々、ひとかたまりとなった村々がある。その背後に、密林が、緑の巨大な豹紋を描いて続いている。

城内の大路はよく整備された舗装であるが、城門を一步出ると、人の手の加わらないがたがた道となる。昼ともなれば、焼いた鉄板と変わるが、早朝は、土が夜の冷気をふくんで心地よい。

ヒマラヤの山懐からはいくつもの小さな流れが伸びくだつて森林と田畑を潤おす。肥えた田畑からは、稲、麦、豆、ごま、トウモロコシ、サツマイモなど、種々の農作物が収穫される。

城門から少し行くと、日が昇ったばかりの朝靄を突き、牛車や手押し車の人々が黙々と畑へ急ぐ。少年の姿も少なくなない。もう畑で忙しく立ち働く姿もあった。早朝から祭日の人出を思わせる。

「いま、豆の収穫で忙しいのです。ああして勤勉に働く人々が、国のいしずえです。税金は彼らの汗の結晶です。暑くならないうちに

働き、帰ってから食事をとるのです」

ランガラ賢者が歩く速度もゆるめずにささやく。

シッタッタは、一時間も歩いていないのに足の裏がただれたように痛みはじめた。薬と托鉢の器、それに、そつと護身の短剣を忍ばせただけの頭陀袋さえ早や前肩や額に食いこんでくる。汗だけで喉の渇きも激しい。

だが、国のいしずえの話聞けば弱音も吐いていられない。

いや、苦痛が身体を責めはじめても頭は真剣だった。

きつと、大地にもダルマが宿っており、それを生かした結果が収穫にちがいない…。とすれば、税金もダルマの結果ということになる…。

ダルマといえば、前夜の象の話とともに、シッタッタの身体はどこかに、ふと、シーターの手の感触がよみがえった。それをしばらく懐かしむ。

休憩が許されたのはカピラ城を出て二時間ばかり、二つ目の村に到着したときだった。

「さあ、王子、空気をいただきましょう」

まだ朝の時間帯というのに早や日光が照りつけ、足の裏は熱いというより激痛が走る。道には牛馬の糞が乾燥して車の轍わだちに砕かれ、歩くたび、糞を含んだ土埃が、異臭とともに舞いあがる。それが、

汗で身体にこびりつき、悪臭を発散させる。

幸い、村の入口には菩提樹の古木が茂り、深い影を落としていた。

急いで炎天下から木陰に逃げる。涼しさで急に汗がひき、まさに別天地である。樹の下には、何本か適度の太さの柱を立て、さらに横木が何本か、井桁にしばってあった。その前には石積みいしづみの古井戸もある。

ラインガラ賢者はどうするだろうとシッタッタが見ていると、頭陀袋を井戸の脇に置いて水をくみ出し、桶一杯、頭からかぶった。さらに、もう一杯浴びた。それから、濡れたままひょいと頭陀袋を背負い、組み木によりかかる。

よく見ると、一本の横木に尻が乗り、その上の木が背の荷物を支え、立ったまま休憩できる仕掛けとなっていた。炎天下、重い荷を背負って往来する旅人への便宜だったのである。

シッタッタも試そうとすると、師から声がかかる。

「この水は、まえの雨季、病気をだしました。口にされてはなりませんぞ」

うなずいてから、シッタッタも二杯水をかぶり、背が低いので、師とは一段下の横木に尻を乗せる。やはり、その上の木に頭陀袋が乗かってたいへん具合がよい。

「ああ、空気が美味しい」

濡れたまま木陰に立つと、水が蒸発する涼しさ、爽快さで、まさに命が洗濯される。天に生まれかわった心地とでもいおうか。

「村々では、大昔から、村の入口や峠で菩提樹を苗から大切に育てます。草をとり、水の少ない地方では、自分たちの水を分けてでも、育てます。下には組み木を作り、できるだけ井戸も掘って、旅人に憩いの場を提供してきたのです。」

王が、全土にこうした施設を作りますと、人々の往来が盛んになり、国が栄えるもとなりです」

説明を聞きながら、シッタッタは、シーターの象の話を思い浮かべて比較し、村々では、昔からダルマが実践されていると胸をときめかす。

それから、さらに三時間、炎天下を歩き通して最初の森の入口にたどり着く。

そこでは隊商の一群が休憩をとっていた。



森の入口あたりは隊商の休息地となっているらしかった。

森に通じた街道から少し脇へ入ると、大きい広場となっていた。

そこに、隊商の牛車ぎゅうしゃが円陣えんじんを作っていた。ざっと見て五十台くらい

だろつか。円陣の外側をとり巻くように、いかにも強くて怖そうな男たちが剣を手に目をぎらぎらさせ、思い思いの格好で坐っている。盗賊などの奇襲に備えるのだろつ。

ランガラ賢者とシツダツタが近づくと、一瞬、男たちの目がざらりとし、緊張が走ったようだった。

負けじとにらみかえしたが、視線をそらせば、飛びかかれそうである。反面、こんなに恐ろしげな面々との旅ならひと安心だと、師とふたりきりの心もとなない午前の行程をふり返り、シツダツタはともかくほつとする。

隊商の通行を妨げる難所には、盗賊、猛獣、無水、非人（夜叉などの鬼神）、飢饉など五種があると聞くが、この分なら、無水難所以外は、まず大丈夫だろつ。

師が、隊長にシツダツタを紹介してくれた。名をマカデーヴァといい、シャカ国一の大商人というのだった。彼はていねいに挨拶してから、一言、つけ加えた。

「いつかの満月祭の折の王子のお噂、コーサラ王国でもマガダ王国でもお聞きしました。若い王子によって、シャカ国はいっそう結束が堅くなったと大変な評判です」

シツダツタは、黙って丁寧に頭をさげる。

噂の真相は、ランガラ賢者の演出にすぎない。この旅でどこま

で自分に宿るダルマを知ることができるか、それにふさわしい振る舞いができるか、それができてはじめて噂通りだと考えていた。

挨拶がすむと昼の休憩だった。

シツダツタは、やれやれと急に涙がこみあげそうになる。実は、絨毯しか踏んだことのない足は、とっくにマメがつぶれた上に、石や木片で傷つき、もう一步も進めなくなっていた。それでも、そんな素振りも見せず、ここまで歩き通したのだった。

師が、一言、足は濡れた布で冷やすようと促した。そのあとつづけて、

「隊長から托鉢を受けよう」

シツダツタは、再び、涙がこみあげそうになる。実は、朝から何も腹に入っていない。のみならず、五時間歩きつづけた。足も痛い、空腹も激しく、ひもじさでもう目がまわりそうだった。ただ、二回目の休息の村の井戸で、思いきり水を飲んだだけであった。

生まれてはじめて知る空腹である。

師の指示にしたがって頭陀袋から托鉢の器を出す。

やがて、二人並んで休息中の隊長のまえに立った。

隊長は、自分で路上飯場の方に行くと、ふかしたサツマイモ数個とチーズをざるに入れて来た。うやうやしく礼をしてから、まず、師の鉢を満たし、次、シツダツタのそれを満たした。そうして両手

を敬虔(けいけん)そうにあわせた。

シャカ族の祖先は、稲作のまえ、サツマイモを主食にしていたとも聞く。

イモを見てシッダッタの腹が意外に大きく鳴った。他人の施(ほどこ)しが、これほど無上(むじょう)の宝に見えた経験はない。

腹の虫については、師が、適当にその場をしのいでくれ、ふたり並んで隊商のはずれに行つて坐り、足を組む。

空腹のあまり、シッダッタは、早速、鉢に手がのびそうになる。しかし、師を見ていると鉢をまえに目を閉じ、経文を唱えはじめた。

よく聞くと、バラモンの教えが説く五大供(ごだいこう)儀の一つ、鬼霊(まにま)へのその一節であった。これなら、幼いころ師から口授(くじゆ)を受け、毎日、食事(じき)まえに唱(とな)えるのでよく承知(じやうち)している。早速、師をまねる。

生きた人間、死んで霊となった人間(鬼霊)、そして生きとし生けるものが、争(ま)つことなく共に暮らし、恵みを分かちあうことを誓い、あわせ、五穀(ごこく)豊穰(ほうじやう)、安穩(あんゑん)息災(いきさい)を祈(いの)るのだった。

宮殿での食前の祈りは、この経文を唱えるだけである。ところが、本来、もつとも意義深いその先のあることを、森での食事が教えてくれた。

経文を唱え終えて目を開くと、まえに、いつの間にか、音もなく野猿(やえん)の群れが遠巻きにしていた。王様猿(おんさまえん)だろうが、一番まえには、

もつとも強(つよ)そうな奴(ひか)が控(ひか)えている。

師は、よく心得(こころえ)ているらしく、彼らの方は見向きもせず、イモを一個取りあげると手早くちぎり、先に、一切れを前の王様に投げた隙(すき)に、残りを後方の猿たちにもばらまいた。

一切れを鷄(う)の呑みにした王様が、威嚇(いかく)の声を発して後方の猿たちに迫ったときには、そこに散らばったイモの破片は、早や臣下(しんか)の喉(のど)もとを過ぎていく。

師は、そこまで見とどけると、残った二個のイモとチーズを、今度は、猿には見向きもせず、むしゃむしゃとやりはじめた。勢いに押されてか、猿たちは近寄つてもこない。

このときはじめて、シッダッタは、毎食時ごと唱える祈りの経文の真意を悟った。だが、実技はうまくいかない。

王様と視線が合ってしまったのだ。

すると、敵もさるもの、シッダッタの目を見つめながら、そつとにじり寄つて、手を出してきた。素振りが人間そっくりで、おまけに、そこまで懐(ふところ)近く踏み込まれると、もうイモの破片を投げつけるわけにいかない。

仕方なく、半分折つて手渡してやる。

そんなようすに安心したのか、後方の猿たちも至近距離(しきんきょり)までとり囲んできた。すると、彼らとも視線が合ってしまった。何だか、弟

分におやつをせがまれた気分である。残った半個をちぎって投げるだけでは、いかにも量が足りずに申し訳ない、といった感情が胸をくすぐる。

たったいま、空腹で鳴った腹のことも忘れ、仕方なく鉢からもう一個とり出してちぎってやる。

イモを指で割りながら、シッダッタは、カピラ城の造営に際し、先祖が残したという園林のことを思う。いまも、野猿が多いときくが、シヤカ族の先祖の知恵が生んだ鬼霊供犠きれいきょうごのひとつだったのかもしれない…。

そんなシッダッタを、ラインガラ賢者はにこにこしながら横から見つめている。



昼休みが終わると、隊商の長い列がゆっくり腰をあげる。

比較的小さい森らしく、一時間ばかりで緑のトンネルをぬけると、川をひとつ浅瀬で渡り、三時間ばかり平原を進んだ。

隊商の牛車といっしょなので歩みは遅い。足の裏の激痛に耐えて歩むシッダッタには、それが幸이었다。

実は、昼休みが終わって森を発つとき、わざわざ、シッダッタの

足を診みにきたマカデーヴァ隊長が、ラインガラ賢者に、この傷ではとても歩けないので、王子を牛車に乗せるようにとアドバイスしたのだった。

師は、それを受け入れ、シッダッタに、隊長のことばにしたがうよう促うながしたが、王子がはねのけた。

見栄みえでも意地でもなかった。この旅で、肉体に宿るダルマの声を聞くことに一つの目標を定めていたからだ。

ダルマは、身体を休ませよなどは、まだ、一言もいっていないのだった…。

それから再び平原をすぎ、今度、かなり深い森に着いたときには、早や日が暮れかけている。

森の入口には二、三人の使者が迎えにきたようだったが、ことがわからない。異民族の部落であるらしい。身なりから察すると、狩獵部族しゆりょうぶぞくにちがいない。

師と隊長が、使者に案内され森の奥へと消えて行った。

その間に、再び、牛車ぎしやは円陣えんじんをつくり、そのまわりに剣をもった男たちが坐った。それからしばらくすると、何人が一組となって火を燃もやし、夕食準備をはじめた。

ラインガラ賢者とシッダッタの夕食は、再び、隊長から托鉢を受けた。食事のとき、また野猿でも出てきたら大変と思っただが、日が

暮れたせいか、生き物一匹、姿を見せない。

鬼霊への供儀の経文を唱えたあと、師はどうするだろうと見てみると、夕食の乳粥の米粒を指でつまんで闇の空に投げた。なるほど、相手の姿が見えなければ、形だけでいいのだと感心してシッダッタも師をまねる。

それにしても、食事の度、恵みを、死霊や生きとし生けるものと分かつことを誓い、実際、食物の一部を割くとは、実に深い真理である。これこそが、ダルマの実践だと、改めて感心する。カピラ城の密林も同じ意味をもつと思う。王宮にいたるだけでは、そこまでは知りえなかつたと、いまさらながら、師に感謝の気持ちでいっぱいである。

そのとき師から声がかかった。

「明日、ここの部族長と会っていただきます。名を、チャンドラといい、この一帯の森に住む狩猟部族を束ねる長です。」

この部族は、都会生まれの王子の目には、野蛮と見えましようが、弓と槍に長けた勇猛な人々です。馬に乗って新鮮な肉を、わが国やコーサラへ売りさばきます。生き物を殺すので、不浄だとしてチャンドラと呼ばれています。しかし、どこの国にも属さず、立派に部族の血統を保っています。

チャンドラには、明日、王子からの土産だと牛車ごと五台渡しま

す。ベナレスの絹と香料、わが国の米と鉄です。何か返礼があると思います。その折には、シャカ国の王子らしく振る舞ってください。

糞掃衣に裸足でかまいません。王子ともあろう身分の方が、そのような格好で旅をするからには、何か不思議な霊力の宿る人物にちがいないと、彼らは、少し気味悪がっています」

万事、的確に配慮するランガラ賢者に、よき師をもったものとシッダッタは畏敬の気持ちを深める。

その夜、シッダッタは、牛車を交代で守る隊商の男たちの口から、ぜび、旅の先々での見聞を聞きたいと思っていた。だが、隊長から借りた毛布の上に横になると、早々と寝入ってしまった。



鳥の鳴き声とともにシッダッタは目を覚ます。

夜が白みはじめると、高い木々の梢には露が流れ、乳白色の空に溶けていく。鳥の鳴き声が、豪雨のように、梢から降りそそぐ。

足はまだうずく。だが、もう意識しまいと思う。

横で師はまだ眠っている。音を立てないように起きあがって頭をめぐらす。牛車の円陣のまわりには、見張り番の男が数名、ことは

もなく坐っているほか、皆、思い思いに寝そべっている。

昨夜は気づかなかつたが、眠ったのは、見張りに守られた中心の最も安全な位置だったのだ。

もし、師が朝の沐浴をしたいといえ、適当な水はあるのだろうか、頭を立てて五感を集中する。

と、森の奥、約五〇〇メートル先あたりから川の流れの音が冷気に乗ってきた。藻が多いらしく、青い匂いまでも流れてくる。ということは、水質が栄養に富み、魚も豊富だろう…

教わってもいないのに、ふと、そんな連想が湧き、少し得意な気分にはひたる。

もっと五感をそばだてると、さらに約五〇〇メートル先あたり、つまり一キロ向こうから、厩舎のざわめきが聞こえる。チャンドラという部族長の本拠地は、そのあたりにあるのだろう…。いつか、師が、こんなことをいつたのを思いだした。

戦では、一由旬先の音が観えなければならぬ。

由旬とは距離の単位で、約七キロをいうので、武將たるもの五感を研ぎ澄まし、そんなにも先の音を的確に分析できなければ戦に勝てない、というのだった。

シッダッタの透視力は、まだその何分の一にも及ばないと、少しがっかりする。

しかし、シッダッタが、一段と五感を集中して耳を澄ますと、厩舎のざわめきに混じって人の声も聞こえた。それも大勢である。

シッダッタ一行の招待の準備に、早朝から大わらわにちがいない。相当、気合が入っているのだろう…。

気がつく、いつか、師が目覚ましている。

早速、シッダッタが、

「おはようございます。沐浴されますか、それとも、清水を運びましょうか」

「沐浴がいいね」

と、起きてあがるや、師が、目を細めて遠くを望み、

「おう、やってるね。王子を迎え、気合が入っているらしい。それじゃ、まいりましょう」

賢者と呼ばれるだけあって、目覚めた一瞬、こともなげに遠い集落の賑わいを把握するし、土地勘があるのかもしれないけれど、川の所在地までも感知している。シッダッタは脱帽の思いである。

沐浴のあと、川岸に師と並んで坐り、祖霊を祀る経文を唱える。

シッダッタの直感通り、川には藻が茂り魚も豊富だった。序でに聞くと、師は、前夜、野営のときから、すでに川の音と臭いを感じていたという。

帰り道、師が少し川の上流まで歩くというので供をみると、野獣

の新しい足跡が見つかった。

「野猿の群れに混じってサイの足跡がある。草原からきたらしい。それに、これはシカの群れだ」

朝食は、やはり隊長の托鉢だったが、食事のとき、シカはおろか、野猿さえ姿を見せない。同じ隊商の野营地でも、昨日の森のにぎわいとは大ちがいである。



朝日が昇ると、王子を歓迎する催しが始まる。

シッダッタが透視した通り、部族の本拠は約一キロ先にあった。精悍な迎えの使者の案内にしたがい、土産の牛車五台を後ろにして、ラインガラ賢者、シッダッタ、そして隊長が進む。街道は、うっそうとした密林のなかを、少しずつ下って川にいたる。川を渡ると、今度はつま先上がりとなって、川を真ん中に挟んでちょうど一キロ先あたり、小高い丘の上に集落と広場が見えてきた。

雨季には、野营地と集落を残し、あたり一帯は水没して幅一キロの浅い湖になるといふ。そう聞いて、往來も大変だろうと思うが、気がかりだったのは、乾いた牛糞と人糞だった。水没域と見られるあたりに、隊商の残したそれらは決して少くないのだった…。

やがて目的地に着く。

木々が開けた広場には、こんなに多数、密林のどこに住んでいるのだろうと思つくり、部族の人々が集まっていた。男も女も、腰に毛皮や皮、布を巻いた姿で、男は、精悍な浅黒い上半身をむき出しにし、女は、首からさまざまな胸飾りを垂らしているが、乳房はあらわで、腕や手足には、色鮮やかな輪をはめている。

中央に、チャンドラと思われるひとときわ精悍な男が坐り、その横に、それぞれの部族の長らしい、やはり勇猛そうな男たちが並び、そのまえを、牛車五台が、ゆっくり車輪をきしませ整列していく。

牛車のまえに立つシッダッタを、チャンドラの両眼が虎のような視線で射る。その虎の目を王子が静かに受けている。

最後の一台が並び終えると、客三人のうち、ラインガラ賢者が、一歩前に出て片手をあげ、大声で何ごとか宣言する。

ことばの最後に、「シッダッタ」と聞こえたので、王子からの贈物だと披露したのである。

中央の精悍、勇猛そうな男たち、そして、まわりの部族の人々から、いっせいに大歓声が巻き起こる。嵐のようにしばらくやまない。牛車五台の絹、香料、米、鉄は、おそらく各部族長に分配されるのである。そんな生き生きとしたよろこびの感動が伝わる。

贈呈の宣言が終わると、恐ろしい顔つきで坐っていた男たちが、

相好そこうをくずして人懐ひとなつこい笑顔となり、いつせいに駆け寄ってくる。黄色い肌が黒く日焼けして輝き、からだが分厚ぶあつい。

シッダッタは、次々、そんな男たちに抱きしめられる。ことばは通じないが、心から歓迎する気持ち伝わるので、彼も思いきり、分厚い肉体にしがみつくと、シッダッタの感情が通じるらしく、再び、相手の抱擁ほうようが強まる。しばらく抱擁の輪が解とけない。

横を見ると、シッダッタとの抱擁がようやく済んだ男たちが、今度は、ランガラ賢者や隊長と、同じ熱烈抱擁ねつれつのあと、久しぶりの再会を楽しむように懐かしげに語りあっている。彼らは、ことばが通じあっているのである。

そんな光景から判断すると、ランガラだけでなくマカデーヴァ隊長も加わり、永年かけ、ここまでの友好関係を築きあげたにちがいない。男たちの友情といったものがあふれる。

ひよっとしたら、シッダッタ誕生のとき、彼らとの間で、王子が大きくなったら、どつさりと贈物おくりものをたずさえ、かならずお供ともをするから大歓迎を頼むぞと、堅い約束を交わしていたのかもしれない。その待望の一瞬がいま訪れた…。そんな感じさえするのだった。

歓迎の抱擁ほうようが終わると、チャンドラ自ら、先ほどまで自分が坐っていた中央の席にシッダッタを案内し、坐らせる。両側に、師と隊長が坐った。

部族の人々からいつせいに歓声かんせいがわき起こる。

と、チャンドラが、王子の周りを右まわりしてから、うやうやしく礼をする。

最高の礼を受けるとき、賢者と呼ばれる人々の姿は、ヒマラヤの山々から超然ちやうぜんとそびえるアンナプルナの秀嶺しゅうりやうに似ている。いつか、シーターから教わったそんなイメージを描きつつ、シッダッタは礼を受けた。

チャンドラの最敬礼のとき、また、大歓声が広場をつつんだ。

その声にかき消されそうになって師が耳打ちする。

「誇り高い彼は、めったに、あのような態度はとりません。王子に、格別の何かを感じたようですよ」

それを聞いてシッダッタにはじめて緊張が走る。



シッダッタのまえには祭りの舞台が広がっていた。

正面に三本、無憂樹むゆうじゆの木立がある。幹は一かかえもあり、梢しやうは見上げるばかりに天を突く。古来、女性生理を司つかさどる霊が宿るとされ、樹皮を粉末にして婦人薬とする。その木の前、中央にレンガを積んで大きい護摩ごまが焚たかれ、白煙と炎が立ちのぼる。

やがて、蛇を模した杖をついて司祭があらわれ、護摩の前に伏して真言を唱える。と、脇の楽団が、鉦と太鼓をかき鳴らす。そこへ、朗々と哀しげな謡が加わると、荒ぶる神が踊り出た。

隆々とした筋骨に誇張したペニスサック姿、髪、眉毛、目、口にはエネルギーの噴出を象徴する彩色を施し、首には大蛇を巻きつけ、短い足拍子で、白煙とたわむれつつ火炎のまわりを大仰に踊り狂う。跳ねるたびに、足元から砂塵が舞いあがる。

やがて、何度か護摩の白煙を豊かに吸う舞い姿を見せたかと思うと、一変、優雅な仕草となり、つと無憂樹に赴き、右まわりに踊りながら一周して、うやうやしく根方にひれ伏す。謡の音が低くたれこめ、荒ぶる神の仕草が敬虔そのものとなる。

三本の無憂樹に次々と、種繁栄のそんな儀式を舞い終えたとき、脇で何か、けだものの叫びが聞こえた。と、司祭助手が三人飛び出し、無憂樹の幹に何やら黒いものを縛りつけた。

両手足をしばられ、縦一文字となった野猿であった。毛のない白い腹がむきだしである。中央がオス猿、両脇がメス猿だった。三匹とも、堂々とした大物である。

前日、別の森で、シッダッタが仕方なくイモをやった王様よりはるかに立派な体格だった。同時に、朝食のとき、この森では、鹿も野猿も姿を見せなかったのを思いだす。狩猟を恐れ、森の奥深く身

を潜めていたにちがいない。

三匹の野猿の鳴き叫ぶ黄色い声が悲しげである。鉦、太鼓、謡が、赤々と燃える火炎とともに最高潮に達した。

司祭が霊そのもののように無憂樹のまえに立つ。部族の人々すべての目が、次の一瞬の動作を見守って、中央の彼一点に集中した。

司祭が蛇を模した杖を払った。刀が宙で一閃した。野猿の金切り声と同時に、白い腹部から赤い体液が飛び散った。同時に、真つ二つとなった腹部から、流動物があふれて出た。下で待ち構えた司祭助手が手際よく小刀を使い、滝を受けるように、それらを大きい器に満たしていく。流動物と赤い体液が、見る見るうちに泡を立てて満ちあふれる…。

間近で凄惨な光景を目のあたりにしたシッダッタは、急に気が遠くなるのを感じた。顔面が蒼白となって失神し、ぐったりとする。ラインガラ賢者は、予測でもしていたようにあわてもせず、その場にシッダッタを横にする。

そんなようすを護摩の横の祭主席からチャンドラが見つめている。ラインガラ賢者が、祭主にそっと目礼した。

シッダッタが気を失った間も祭は進行していく。

流動物だけが、すぐに器からとり出され、無憂樹の後ろの高台の上に載せられた。色のついた液が滝のように滴り落ちる。

と、それまで、木の梢で騒いでいたカラスが、真っ黒になって舞い降りた。それらを一喝するようになり、空高く旋回していたハゲワシ数羽が急降下してくる。獲物を競いあう鳥たちの叫びが鋭い。

猛禽たちの騒ぎをよそに、赤い体液の残る器が、無憂樹の根元に置かれ、大量に酒が注がれる。

脇に控えていた荒ぶる神が、再び登場すると、体液と酒の器を根元から持ち上げて頭上にかざす。その格好で護摩の炎のまわりを舞いながら、やがて太い木の根方に少し液体を注ぎ、器を元の位置に戻した。

女性生理を司る木の霊に、生命の象徴である体液を注ぎ、生きとし生けるものの種の保存と繁栄を祈るのである。

そんな儀式の間に、野猿は皮をはがされて棒にしばられ、護摩の炎で丸焼きにされる。

間もなくシツダツタが正気に戻る。すかさず、ラインガラ賢者が耳打ちして、

「当地では、失神は、霊が集結した証とされます。きょうの祭りの霊は、王子に一番多く集まったのです。吉兆です」

しかし、シツダツタは、血と内臓を見て失神した自分が不甲斐なくて仕方ない。いいよつのない劣等感に陥る。師やシーターの望む「大王」の資質に欠けると思われてならない。

そうこうするうち肉が焼けて香ばしい香りがあたりに満ちてきた。一瞬、鉦、太鼓がかき鳴らされると、丸焼きの肉を司祭と助手が運び、赤い体液の器をもう一人の助手が高くささげ、シツダツタの前に進みでる。

「血を一口飲み、肉をかじって、一言、何か話してください」

ラインガラ賢者にいわれた通り、血をゆっくり一口飲み、猿の丸焼きをかじってから、シツダツタは立ちあがり、

「きょう、皆さんを守る狩猟民族の霊があまりに強すぎ、私を守る農耕民族の霊が眠らされました。それは、チャンドラを中心に、ここに集まった皆さんの結束が、この世の何にも増して最高に堅い証であります」

ラインガラ賢者がすぐに立ちあがって通訳した。

祭り広場の隅々から歓声の渦がわき起こった。

その後、人々は、一人残らず、来賓や部族長が飲んだ器から次々と血を飲み、かじったあとから順に肉をほおばった。

こうして野猿三匹を平らげたのだった。



チャンドラからの返礼の儀式が始まるうとしてしている。

「この部族は、小さくてもかならず、いつか優れた指導者を出すと思います。結束が堅く勇猛で武術が優っているからではありません。森の住民に似合わず、ほかの人々と心広く交わるうえに、とても敬虔だからです。武術に果敢な面が、野蛮で残忍と誤解されがちですが、真に恐るべきものをよくわきまえ、それを忘れないために、祭りを大変重んじるのです…」。

まわりの国々では、生き物を殺す彼らを、チャンダラ、穢れた民とさげすみます。しかし、どんなことばをもつても、彼らの敬虔な本質が曲げられることはありません…」

そんな解説をラインガラ賢者から受けるうちにも、返礼の準備が整っていた。

シッタッタは、心中で、出発まえのシーターの話を思いながら、やはりここでも、民族に宿るダルマを知ることが大切なのだと考えている…。

チャンドラは、弓矢百丁、槍百本を贈るといふ。

いずれも小型軽量だが、工夫があつて、携行に便利で威力があり、弓は一矢でトラを射、槍は一刺でサイを仕留めるといふのだつた。

ついでに、シッタッタ自らその性能を試みてほしいが、きょうのところは、トラの代わりにサル、サイの代わりに牡牛を用いたいというのであつた。

ウパナヤナの儀式以来、シッタッタは、毎日、武道にも打ちこんできたので、堂々と試してみようと思つている。

準備が整つと、また、祭りがはじまつた。護摩が焚かれ、無憂樹が清められ、鉦と太鼓と謡で荒ぶる神が踊り狂つた。

やがて、再び、楽隊が最高潮に達すると、助手が飛び出してきて、無憂樹に野猿をつないだ。

今度は片手を縛つただけ、ひも二メートルくらいの自由度で逃げるまわるサルを、およそ二〇メートル先から射るのだつた。

先ほどは、司祭の一刀がサルの腹を割いた。今度はシッタッタの一矢が命を奪つた。だが、彼は、弓矢を試しても野猿を犠牲にしなくてはなかつた。

シッタッタは立ちあがつて弓矢を構えると、

「皆さん、先ほどは、私を守る霊が、皆さんの霊に眠らされました。今度こそ、私は、農耕民族の霊に守られて弓を引きたいと思ひます。

どうか、的を農作物にかえることをお許しただけでないでしょうか」

ラインガラ賢者が通訳すると、祭りの広場が歓声に埋まる。
「ありがとうございます。これは、わたしたちの祖先が、昔、主食とした貴重な食べ物なのです。さらに、もうひとつ、無事、的を射ましたら、皆さんの、あのりっぱなサルを森に帰してやっていただけないでしょうか」

再び、大きい歓声が巻き起こった。

早速、両手の長さくらのひもを準備させ、先にサツマイモをし
ばり無憂樹の枝からぶら下げさせる。シッダッタの合図で、少しは
なれた位置からイモをもつ手を放すと、振り子のように弧を描くの
で、それを矢で射るといのである。

シッダッタは、三度、弓の空引きを許してもらい、無憂樹の幹の
中心点に的をしぼった。その的へ、手を放れたイモが通過するタイ
ミングを厳密に測る。その一瞬を狙って矢を射るのである。

イモを放すのは、もっとも信頼する師、ランガラ賢者である。

空引きを終えたシッダッタが弓を構える。

祭りの広場は咳払いひとつしない。ただ、護摩の火炎のゆらめき
だけが聞こえる。

「ヨイ、イ、ニイ、三、ハイ」

ランガラ賢者の手からイモが放れるのに一呼吸おくれ、矢が飛
んだ。一直線に無憂樹の幹の中心点を目指した。

一瞬、広場で大歓声がはじけた。

標的が粉々に散った。彼らの誇りにたがわす弓の威力が強く、矢
は刺さるのでなく、小さな的を粉碎してしまった。

サルが放たれた。生きものが一目散に森の奥へと姿を消した。

野猿の姿が見えなくなっても、しばらく王子への賞賛の歓声が止

まない。チャンドラはそんな会衆を静かに見つめる。

やがて、次、槍の試しがはじまる。

槍投げ器が開発されていた。

槍投げ器は、槍の柄ほどの長さで、後尾には爪が立っている。

その爪に槍の柄をあてがい、投げ器ごと槍をもって構える。こ
のとき、投げ器にとりつけた革ひもを手首に巻く。握りは少し太い
が、そのまま投げると、投げ器だけが手元に残る。

こうすると、槍が手から放たれる一瞬、投げ器の爪にテコの原理
が働いて槍の初速が倍加され、的も狙いやすい。

小型軽量でも、サイを一刺で仕留める威力のしかけである……。

シッダッタは、やはり農耕民族を理由に、標的を、牡牛から先ほ
ど贈呈した米袋にかえてもらった。稲わらで作ったそれを、無憂樹
にしばらせた。そうして、的を無事に射たら、牡牛は、会衆の誰か
に贈呈したいと申しでる。

「成功すれば、私が広場を駆けまわります。皆で、ぜひ、私を、捕
まえてください。三五七番目に捕らえた人が、きょうの栄光の人と
なるのです……」

ランガラ賢者の通訳で、その日、最大の歓声が爆発した。

やがて彼らの新鋭機が、無憂樹にしばった米袋を破って粉末を
噴出させると、広場は、たちまち、老若男女の大鬼ごっここのるつば

と化した。

もうへとへとに疲れたシッダッタが、一人の少女に、やすやすと抱きつかれて、大団円は幕となったのだった。



師弟の旅は、その後、アンナプルナの雄姿を映す美しい湖を過ぎるころには、土産の牛車も半ば尽きようとしている。

さまざまな国の王を訪ね、土産物を牛車ごと渡すうち、その国のようすがわかるようになっていた。人それぞれ顔や性格が異なるように、国も違いがよく見えた。多種の暮らしと多様な祭りがあった。多くの修行者にも出会った。裸形のひと、着衣のひと、さまざまだったが、皆、頭陀袋ひとつで、十年、二十年と人生を旅して天に生まれることを願っていた。

高齢や病気で行き倒れたのであろう、白骨がいくつも、頭陀袋を脇にして野ざらしとなっていた。倒れた直後らしく、肉食獣や猛禽にあらかた肉を食われた後、異臭の中で、真っ黒に八工の群がる屍もあった。大抵は、頭陀袋も転がっている。そうした遺体は、隊商を小休止させ、茶毘にふしたのだった。

川辺の藪の側を通過したとき、姿がないのにトラの咆哮が聞こえ、

発情期なので危険だと隊列を速めると、はるか下に、悠々と水遊びする黄縞獣の家族らしい数頭が見おろせた。草原を行くと、前方を象の群れが地響き立てて横切ったりもした。イナゴの大群が空を真っ黒にして平原を砂嵐のように吹きぬけるのも見た。

森の入り口で夜営のとき、数名の馬賊が襲ってきたりもした。牛車を囲んだ隊商の男たちが、見事な円陣で剣を構えると、恐れをなしたのか、戦わずに、すぐに立ち去ったのだった。

そんな危険だらけのなかを、独り浮浪する修行者の命がけを思いながら、シッダッタは歩き、旅した。

チャンドラ率いる民族の森の街道だけは、猛獣の難所と呼ばれ、トラ、オオカミ、クマなどが出没して危険と、牛車に乗っての移動となった以外は歩き通した。足は、象のように、いばらを踏んでも応えなくなった。頭陀袋も、もう前肩や額に食いこんだりしない。

深窓の王子もいつか、インド大地の子の風貌であった。胸と腰が厚く見えはじめた。態度もどこか重々しく感じられる。

重厚な印象が加わったのは、身体上の印象ばかりでなく、見聞の広まりが人物を大きく見せはじめたにちがいがなかった。

今回、いくつかの国々の歴訪でシッダッタがとくに感じたのは、国は、王を映す鏡そのものだということだった。

「王は太陽であり、月であり、北極星であるのです。民のすべてが

希望と豊饒ほうじょうの源として仰ぎ見、農耕や狩猟、漁労にはげみ、陸や川、海の旅の安心をえるのです。王はあるべきところにあつて動かず、明快、かつ、大いなる道標しるべでなければなりません」

シッダッタは、ラーンガラ賢者から、いつも、そう教わっている。

今回、歴訪した王たちの顔を浮かべ、これをあてはめると、王の不動の姿勢の大切さが理解できるのだった。

ことばをかえれば、「真に恐るべきものをよく知っている」、「自分のうちにダルマ（天の法）が宿るのを知って、それに、耳を傾けて行動している」ということかもしれない。

野営や移動のとき、マカデーヴァ隊長から諸国の話も聞くことができた。

商工業で繁栄するコーサラ王国やマガダ王国の話に、シッダッタの胸は躍った。

大王たちは、どちらかといえば、私腹をこやすために民を利用する面が強く、税金の取り立てもきわめて厳しいという。

「昼は、戸を閉めて森にひそんで集税人の難を逃れる一方、夜は、盗賊の難を逃れて、再び、戸を締めきつて家中で息を殺さねばならない……」

そんな嘆きが人々にある一方で、これらの国々では、市場が大きいく治安もまず安定しているので、商工業が活発で、貿易や隊商で財

を築く商人、富豪も多いという。仕事にたずさわって豊かになるとを願い、人々がよく働く分、街は活気にあふれ、次第に、暮らしも豊かになり、家々は大きくなって美しく、街行く人々も服装が晴れやかというのだった。

「商売にもダルマがあります。それがわからない人は、一攫千金いっかくせんぎんの夢を追い、結局、文無しになってしまいます。」

このことを知って、王子も、きつと大きい王国を築いてください。私も、及ばずながら、お手伝いをさせていただきます」

マカデーヴァ隊長の口癖であったが、そのなかに彼の夢と、王子への期待がこもるのだった。



諸国歴訪も終わろうとするころ、急遽きゅうじゆ、レブラの集落を訪ねた。

複数の修行者から情報がもたらされた。噂では知っているが、見たことがないと、ラーンガラ賢者が訪問を提案した。

隊長が、ヒマラヤ山麓のある大きな街で、王朝の高級官僚相手に最後の商いをする間、隊商から離れて数人の男を引き連れ、土産を数頭の牛にしぼり、師弟は、未開の山道をたどった。

最初は、ランタンという白嶺が行くたびにそびえていたが、やがて

深い山懐へ入って半日、牛一頭がやっとの険しい岩道を一步一步登ると、広い台地が開けた。目的の集落だった。

村の入口らしい大きな樹の根元に着くと、荒々しい歓迎が待っていた。十数名の男が、突然、槍や弓を持ってとり囲んだかと思うと、ほかの数名が、背後から縄を投げてきた。

隊商の男たちが、すぐに剣の鞘をはらって応戦しようと思つて殺氣立つのを、ランガラ賢者が制し、

「怪しい者ではない。土産をもって挨拶にきた。村長に会いたい」
ことばのわかる者がいた。

彼らが仲間うちで相談をすませると、結局、隊商の男たちの剣は抜きとられ、全員、後手にしばられ、頑丈な柵をめぐらした家の前まで引き立てられた。

五頭の牛は柵につながれた。皆を思わせる柵の向こうには、木造の建物があった。村長の家なのだろうか。

だが、いくら待っても、柵の向こうにはだれも姿を見せない。集落の男たちは、急ぐ素振りも見せず、慣れたようすで師弟一行の見張りに当たっている。

よく見ると、二十人あまりの男のうち、三分の一くらいにレブラの後遺が見られた。眉毛や鼻、耳、指、手などに変異があった。しかし、ほかの男たちはごく普通の人である。

レブラの集落といつても、皆が皆、罹患者ではないらしかった。もう陽が西に沈みかけたころ、柵の向こうに、ようやくみすばらしい男が姿を見せる。ほんとうに村長だろうかと思われた。

だが、男は、太い柵から垣間見えるだけ、こちらの広場へは一步も出てこない。

ちようど、柵越しに、こちらを見下ろす岩があった。男は、その岩に四苦八苦してよじ登った。

男は病痕がきわだっていた。

痩せて骨が透け、両腕には手がなかった。目と口の周囲の肉が溶け、顔は髑髏という印象だった。手の欠けた両腕も、細い両脚も湾曲し、歩く姿はまるで蜘蛛に見えるのだった。

だが、シツダッタには、あの満月祭のときの瞑想のお陰で、この男も普通の人だった。

岩の上から、柵越しに、もったいぶった叫びが飛ぶ。

しわがれ声だった。

「わしは神聖なバラモンである。おまえたちは穢れた民である。賤民である。糞尿のように不浄で、人の世に住むことは許されない。しかも、おまえたちは、悪魔に呪われ、やがて骨まで溶けていくのである……」

一方的な決めつけだった。彼は、一行を、レブラの集落への逃亡

者と勘違いしているのではないだろうか。

つづけ大声で经文を唱えはじめた。

「…チャンドーラに触れたとき、ことばを交わしたとき、見たときは穢れを受ける。その時は浄化儀礼をせねばならない。触れたときは全身の沐浴、ことばを交わしたときはバラモンに話しかけ、見たときは太陽や月などの光を見なければならぬ…」

声は濁っていた。

唱え終わると、再び、難儀して岩を降り、それから柄杓で脇の甕から水をすくって八方を清めるやいなや、もう建物へ土蜘蛛のように消えていた。

すると、見張り番がゆっくり腰をあげ、一行を別の建物へ引き立てた。後手にしぼられたままである。

隊商の男たちが、隙あれば騒ぎを起こそうとする素振りを見せて、ラインガラ賢者を仰いだ。賢者はそれを目で制した。

師は、何を考えているだろうとシッダッタがようすをうかがうと、これからはじまるうとする事柄に興味が尽きないらしく、生き生きとした表情である。

少しも不安がらない変な人だと不思議でならない。こういう人の側にいると、なぜか、怖気づかないものである。

連行されたのは、別の建物で、やはり砦のように太い柵で囲まれ

ていた。二、三人の番人とともに、一行を中へ押しこむと、柵は、早速、外から頑丈に閉ざされた。

囚人が獣の扱いだった。

建物のなかでようやく手が自由にされる。



そう広くない建物は、土間を掃除しないせいか、異臭が立ちこめ、薄暗かった。入っていくと、すでに先客が二組あった。あちらこちらに食器だらう、鉢が置かれ、八エが真っ黒にたかり、近づくと、うなりを立てて飛びあがる。

片隅の土間に、男ばかりの一组が寝そべっていた。薄暗いなかにも、一見して、全員、病の痕が顕著だった。

ラインガラ賢者が声をかけると、全員、ぼんやりこちらを見ていたが、一人が大儀そうに返事した。ことばは通じるようだった。

その反対の角には、女二人を守るようにして男三人が坐っていた。変異の残るのは、女一人、残り四人は、普通の人に見えるのだった。

声をかけると、やはり、ものぐさそうに返事が返ってくる。こちらには、どうやら、ことばは通じない。

師第一行は、残った入口近くの隅に陣取った。屈強な隊商の男五

人が、師弟を囲んでどっかり坐ると、その威力いりよくに押されてか、先客たちの陣取りが、少し縮んだようだった。

一行は、その朝、陽が昇るまえ、村を発つときに食事をとったきりである。もう十二時間、何も口にしていない。

シッターは空腹だった。しかし、師は、汚い土間に足を組んで坐り、超然ちやうぜんと瞑想めいそうしている。隊商の男たちも、師弟を包んで外向きに坐り、膝にこぶしを握って無駄口は一言もきかない。

シッターも、瞑想の格好かっこうをせざるをえない雰囲気であった。

しばらく鎮座ちんざしたが、顔には、ハエが音を立てて群がってくる。

その肌ざわりが気味悪く、思い切り顔を振るか、手で払うなどせずにはられない。だが、同じようにハエが群がるのに、師も男たちも微動びどうすらしない。

薄気味悪い建物に押し込まれたのに、少しの怖気おしげも隙すまも見せず、

ハエもうるさがらず、ゆったり構えている師を目の当たりにすると、シッターは、さすがに賢者の振る舞いだと、自分の心の浅さが急に恥ずかしくなる。

彼は心を落ち着け、再び坐り直す。

「うまそうだ」

しばらくして男たちの呟く声が聞えた。

シッターが目を開いた。

太いへびが、食欲を煽あおるように身をくねらせ、入口からはつてくる。毒へびではない。皮をむいてかぶりつけば、その白身は、空腹の足しにちがいがなかった。ランガラ賢者の了解りょうかいさえあれば、男たちは、いまにも飛びかかるうとする。ランガラ賢者は眉ひとつ動かさない。だが、シッターは、蛇を料理するさなか、白い身にハエが、ヤギの糞ふんのように真っ黒に群がるさまを連想し、思わず身震みふるいする。

へびは、ことなきをえて土間の片隅へと消えていった。



結局、夜が明けるまで放置された。

平地よりは、かなり早い感じで陽が昇ると、頑丈がんじょうな柵さくが外から開けられ、全員、再び、昨日の広場に集められる。

先客の方は、男だけの方も女の混ざった方も、広場まで、自由に歩くのに、シッター一行は、また縄で後ろ手にされた。それに、牛五頭は、前日つな繋がれた柵から姿を消していた。

しばらくすると、昨日と同じように、蜘蛛くも男が姿を見せ、

「わしは神聖なバラモンである。おまえたちは穢けがれた民である。賤民せんみんである。糞尿ふんじょうのように不浄ふじょうで、人の世に住むことは許されない……」

と宣言したあと、しわがれた声で経文を唱え、曲がった腕で清めの水を撒くと、ぎこちない足どりでさっさと建物に消える。

先客たちを見ていると、こうした儀式を毎朝受けているらしく、ごく慣れたようすで、蜘蛛男の宣言にうなずいていた。

儀式のあと、再び土間の建物に戻されると、縄がとかれ、ようやく食事が出た。

あたりに転がった鉢に、見張りの男たちが乳粥を注いでまわる。

甘酸っぱい匂いに、シッダッタの腹が思わず鳴る。

先客たちが、早速、音を立てうまそうにすすった。

用心して手をつけなかった師も男たちも、それを見て、鉢に手をおかず。シッダッタも、待ちかね、鉢の一つを両手ですくいあげた。

美味そうな重さと匂いで、五感がしびれさせられる。

早速、口をもっていくと、白い乳粥のうえに、何か、黒い粒が二、

三個浮いている。粥をすすると鉢を傾け、汁が唇に届いた一瞬、

八エの屍骸だとわかる。黒い一粒が、まさに口のなかに流しこまれようとしていた。

「ウハッー」

シッダッタは飛びあがった。キヤーという悲鳴こそあげなかったが、口から飛び出した破裂音は、同じ性質のものだった。

同時に、背中に悪寒が走った。嘔吐も催した。胃袋が空っぽだが

ら酸いものがこみあげたが、それを飲みこんだ。

師はと見ると、やはり、静かに鬼霊への供儀の経文を唱えたあと、乳粥の米粒を指でつまんで投げ、さっさとすすりはじめた。日常の食事のときと、少しも変わるところがない。

師の鉢にも八エは浮いているらしいが、指先で縁に導いたあと、指を丸め、せつせと弾き飛ばしている。

シッダッタは、嘔吐をこらえるのに精一杯、すするところか、鉢さえ持つていられない。

中を見れば、再び、嘔吐を催してしまいそうなのである。

そんなシッダッタを師は黙って見つめた。

それから丸一日、何も口に入らずに翌朝を迎えると、再び、広場で儀式が行われたあと、やはり乳粥が出た。

シッダッタは、見るだけで嘔吐を催し、鉢に口さえよせられない。衰弱するのはわかっている。だが、八エの屍骸の乳粥は、猛毒のように、ともかく気持ち拒絶し、どうにもならない。

そんなシッダッタをランガラ賢者が静かにみつめる。その眼差しを、シッダッタは痛いもののように避ける。

失神のときと同じく、師やシーターが求めるものが、自分には欠けていると思えてならない。深い愛情で育てようとしてくれている

期待の方向に、なぜか、そえない感じだった。師の心中を思うと暗

い気分には陥ってしまう。

師は、八工の屍骸を指弾しながら食事を終えると、

「王子、今夜、ここから出ましょう。ほんとうは、あのバラモンと自称する男と話をしたいのですが、このようすは、先客たちからおよそ聞き、大体、わかりました。これ以上、長居は無用です……」

シツダツタは、こみあげるものを懸命にこらえた。

そのとき、師が説明してくれた内容はこうだった。男だけのグループは南からやってきたらしい。皆、血のつながりのないものばかり、少年時代に悪魔の呪いにかかって捨てられ、放浪するうち、仲間となった。もの乞いをしながら転々としているとき、親切な修行者から、この村のことを教えられ、一年がかりでたどり着いたという。一カ月まえだった。

女を含むグループも似た経緯だった。

皆家族で、両親に男兄弟二人と長男の妻だという。長男の妻が悪魔に呪われたことがわかると、近所の親戚から家に火が放たれ、命からがら放浪の旅に出たらしい。放火された家と土地は、その親戚が、悪魔を祓ってやったといっって自分のものにしたという噂を、流れていく先で旅人から聞いたという。

やはり、修行者から噂を聞いて三年かけてたどり着き、まだ二週間程度らしい……。

修行者のいうには、一カ月ばかり拘束され、毎日、悪魔除けの儀式のあと、乳粥ちちがゆを与えられて異常が発生しなければ、山林開墾かいとんの道具と農具を貸し与えられ、細々とはあるが、自分の小屋を建てるなど、自給自足の生活が可能だという。

ただ、収穫しゆくの半分は、村のために納めねばならないが、人里はなれた山奥では悪魔に呪われた者への迫害はくがいもないし、貧しいもの乞いの生活からも開放されるといった。だ。

チャンダーラといわれようが、賤民と呼ばれようが、悪魔に呪われた身でありながら、迫害もなく生活ができるのは、最高に幸せで希望がもてるという。

不幸にして、拘束中に異常が見つかる、山奥に小さな小屋を建てて閉じ込められ、悪魔の供儀きぎにされるらしい。食事も与えられず、やがて死ぬと、小屋ごと火を放ち、魔除けまよの儀式が行なわれるというのだった。

後代でいうハンセン病は、感染性は非情に弱く、大人なら側にもまったく心配なく、また短期に重い症状が現れることもないが、この物語の当時は、類似症状の皮膚疾患などで、短期に異常が見られる事態があったのかもしれない……。

いわば、こうしたテスト期間を経て生き残る人は、年々増え、いまでは、開墾地かいとんも山頂近くまでのび、八十余戸あまりを数えると

いう。噂を聞いて逃げてくる人は後を絶たないらしい。

師の説明を聞きながら、シツダッタは、みすばらしい姿の蜘蛛男くもこのなかにも、堂々としたダルマの宿るのを見た。

シーターの象の話のお蔭で、さまざまな人に、それぞれのかたちでダルマの宿るのを発見できたと感謝の気持ちでいっぱいである。

とくに、ここの蜘蛛男などは、アドバイスを受けていなければ、本質を見抜けなかったにちがいない。

説明を終えると、師が、

「ここは立派な王国です。バラモンと自称するあの男、なかなかの人物にちがいません。彼こそ、バラモンと呼ぶにふさわしい行いの人です。土産の品々は牛ごと置いて帰りましょう。われわれが、たった二日で下山することを知れば、きつと、あの牛を返すでしょうが、この国なら、土産を残しても惜しくはありません。よい勉強をさせてもらいました…」

その夜、ランガラ賢者が、番人を呼んで隠し持った金貨一枚を与え、剣五本を返し、一行を自由にしてくれと頼んだ。

すると、病痕の残る番人は、金貨を押し戻し、

「どうぞ、夜が明けてから安全な道をお帰りください。村長からはこうお伝えするよういわれています…」。

『レプラの集落と聞けば、怖がってだれも寄りつかないところを、

ようこそ訪ねていただきました。盗賊ではないかと用心してご無礼なまねをしたにかかわらず、立派な兵士に、剣ひとつさえ抜かせないご一行は、相当な人物の方々と拝察します。牛、五頭と荷物はそのままお返しします。悪魔の呪いは十分被はらってありますから、ご心配は無用です』

シツダッタは、話を聞きながら、いまさらながら、真の賢者とは、単なる風采ふうさいやことば、態度によるのではなく、真実の行い、ダルマの実践によるのだと悟り、ここの蜘蛛男は立派な賢者だと思う。

同時に、たったいままで隊商の男たちを、シャカ国の近衛兵の変身姿とは気づかない自分を大いに恥じた。



王子の帰国を待ちわびるシーターの気持ちは複雑だった…。

シツダッタ王子は、当初予定の一カ月では帰らなかった。さらに、次の一カ月も過ぎようとしていた。見聞を広める旅だけに延びるのはわかっていた。だが、待つ身には、予定外の一日は十日にも二十日にも感じられた。

カピラ城を訪れる商人や修行者たちの口からは、直接間接に、日々、シツダッタの元気な旅の情報がもたらされていた。主あしが留守の侍

女たちは、毎日、王子の噂話に華やかに仕えていた。

猛獣難所の森の部族を訪れたとき、彼らの誇る弓や槍を、見事に使いこなした武勇も伝わっていた。弓や槍を試す標的のサルや牡牛の命を助けるため、サツマイモや米袋を用いたと、王子の慈悲深さに、侍女たちは黄色い声で賞賛を惜しまなかった。

王子を一目見た部族の長たちの多くが、不思議な魅力の虜となり、シツダツタが大王として立つときは、配下となって覇権に参じたいと口々に誓ったという噂は、弱小のシャカ国に明るい未来を感じさせていた。

王子は、日焼けして背丈も伸び、ランガラ賢者と見まちがうほどだという情報も、前日、もたらされたばかりだった。

しかし、噂話を聞かされたとき、シーターの心は、王子との再会を恐れはじめた。ここ一、二年、急に大人びて、見た目にすっかり男らしくなったシツダツタの姿をよるこぶ反面で、男としての心身の急成長が怖かった。

会いたいという切実な気持ちと、会うのが不安だという感情の間で、シーターの心は微妙にゆれていた。

いまも、北の旅前日の光景が忘れられない。

あのときは、いきとし生けるものにダルマの宿る話をしながら、王子に香料を塗るシーターの手が、次第に、裸身の中心部へと移っ

ていったのだった。この手順は、裸のまま、無邪気に胸に飛び込んで来た幼児のころから、毎日、欠かしたことはなかった。

だが、あの一瞬、王子の身体は、男の兆候をしめしたのだった。とたんに、シーター自身にも、女の反応があらわれた。未知の心の帳がひらかれた。そう感じたのだった。

王子は、もちろん、無自覚にちがいがなかった。男の兆候など意にも介さず、関心のすべては、シーターの象の話に注がれていたはずである。それにまちがいがなかった。

にもかかわらず、目の前の男の兆候が怖くて、彼女は、思わず手を引いたのだった。すると、今度は、シツダツタ自身が、驚いたように、その兆候に気づいたらしかった。

好ましい事態ではなかった。あつてはならない禁断の状況だった。王子と侍従頭が特別の關係に陥れば、侍従頭は自ら毒をあおる、というのが、シャカ国伝来の掟なのである。

あの一瞬のことを思うと、会いたいと待ちながらも、シーターの胸には一抹の寂しさがよぎる。

今回の旅で、日一日と成長をとげている王子の情報を聞くたびに、最早、シーターの役目は終わったと感じられてならないのだ。

彼女が仕えるのは、思春期にさしかかった王子でなく、幼児期、せいぜい少年期までと自覚していた。

シーターが得手とするのは、心のしつけというが、王子に、人間として基本の精神態度を教えることだった。一個の人間としての自覚に目覚めさせ、独り立ちさせることだった。

それは、男子に恵まれなかった父のバラモンから、彼女自身が、男子同様に厳しく伝授されたもので、いまも、折に触れ、父の元へ教えを請いに通っている。

といつても、ごく平凡な一般常識にすぎないのだが、それが王子にかかる、抜群の洞察力によって詩のかたちへと巧みにまとめられるのだった。

『小さな感情で侍女を叱ってはならないというと、

象百頭に勝つより一人のわれに勝て。これぞ真の勝者…』

こうした分野なら、王子に、まだ教える内容は残っているだろうと思う。だが、それ以外では、シーター自身、あまりにも経験が乏しすぎるし、未熟だと自覚していた。

侍従頭といつても、たかだか十九歳、とくに思春期の常として、もし王子に男と女の問題が起こった場合など、その方面にはまったく経験がないので、判断もつかないと不安だった。

彼女自身、十代の半ばから、ただひたすら、小さな母のような愛情をよせて王子に仕え、好きな男性はあるか、恋の経験すらもたない。恋ということばに心をときめかしても、所詮、対象のない異性

感情の高ぶりにすぎなかった。

いろいろと思索した拳句、今回の帰国を機に、自分が果たすべき役割は終わったとして、シーター自身、王子の教育係から身を引こうと考えていた。ランガラ賢者に相談のうえ、王に申し出ようと心に決めていた。

それに、シツダツタがシーターを慕うのを知るランガラ賢者の許可もえて、万々に備え、彼女と瓜二つの侍女も、ひそかに育てあつた。

ひたすら会いたい気持ちでいながら、シーターは、そんな離別の覚悟をきめて王子の帰国を待つのであつた。



師弟がカピラ城に着いたとき、満月が中空に昇っていた。

最後の行程は、安全な区間なので村々の人目をさげ、夜の行脚が選ばれたのだった。

夜更けだが、先に伝令が届いていたので、シーターと少数の侍女たちが城門まで迎えに出た。

王子の春秋用の居城には、絹の着替え、香料、簡単な装身具など沐浴後の品々が調えられ、ベッドにも絹の羽根マット、香、花など、

旅の疲れを癒す心遣いが施された。

王への挨拶や帰国のレセプションは、翌日、城あげて盛大に行われる手筈だった。王の関係者の出迎えは、ラーンガラ賢者の要請で控えられた。

シーターたちが城門でしばらく待つと、櫓の見張り兵士が師弟の到着を告げる。重い軋みを立てて頑丈な扉が開かれる。

月光にぬれる城門の板目に、糞掃衣に頭陀袋、裸足姿の男二人の短い影が一瞬伸びて流れ、再び、扉はゆっくり閉じられた。

シーターと侍女たちが並んで最敬礼する目の下を、月明かりの舗装路に落ちた影二つ、無言のまま、並んで通りすぎる。

その一瞬、シーターは、王子の心の構えの急成長を直観する。最敬礼を受ける態度が、雲にそびえる秀嶺、アンナプルナのよう

に気高かったのだ。侍女たちも思わず深く息を呑む…。

その夜、王子の沐浴は長かった。シツダッタは居城に入ると、シーターには、ほとんど口も利かず、すぐに沐浴池に身を沈めたのだった。

脱衣のとき、シーターが手を出しかけたが王子は許さなかった。二カ月の旅ですっかり自立的な態度が身についたらしかった。

帰国を待ちわびた身には寂しい出来事だった。だが、身の世話を拒むのは成長の証と思えば、やはり、いまが、身の引きどきかと

も思われる。

それにまた、久しぶりに顔をあわしたのに、王子からは、一言のこともかけてもらえなかった。幼いころから、何かあれば、すぐ裸で胸に飛び込んでくるほどに甘えてくれたのに、今回は、急に、無視されたようではない。

これとて、大人になるほどに、また、思慮深くなるほどに口数が減ると思えば、よろこぶべき事態にはちがいがなかった。だが、なぜか、心に空洞が感じられてならない。

王子が自立していくとき、教育係は、所詮、無用の長物とならざるをえないのだろう…。

そんなことを思いつつ、シーターは月影の沐浴池を眺める。

王子は、音も立てず、月に向かって瞑想するようだった。長く伸びた黒髪が月にぬれる。頭部がやけに大きく見える。上半身の黒いシルエットが水面に影を落としている。そこに月の輪が浮かぶ。

そんな光の盆が、かき乱れることなく二、三時間は経っただろうか。月は、中天を過ぎ、やや西に傾きはじめた。

それでもシツダッタは動こうとしない。旅の全貌を最初から思い出し、一つ一つ分析して考察を加え、新たな体験として頭と身体に染み込ませるにちがいがなかった。

ものごとの真実、教訓といった事柄を詩にあらわすのを得意とす

る王子の頭脳では、膨大な新しい詩集が編纂へんさんされているのだろう。

瞑想めいそうの妨げさまたにならないよう、シーターが侍女たちを下がらせる。一瞬、衣擦きぬすれの音がした以外、あたりは、静寂と月明かりに包まれたままであった。

シッダッタから、シーターは片時も目をそらさない。

やがて、月光に王子の影が少し動いた。次の瞬間、シッダッタの肉体は、もうシーターの待つ台座に腰掛けていた。

居眠っていたのだろうか、シーターの目に、王子の姿は宙を飛んだように見えた。

ふと見れば、台座には青年シッダッタが腰掛けている。元来、長身で美しい少年である。それが、遅たくましく日焼けすると、そう見えるのだろうか。

彼女は、思わず、足元にひれ伏した。目前のぬれた足が月の光に輝く。反射的に、その足を拭い、水濡れの腰布こしぎれをとり去らねばと思うが、足が立たないし、手が思うにまかせない。どうしてか、一瞬、台座の王子を見あげることもできない。

太陽の光で目がつぶれそうになるように、モンsoonに向かつて立つと顔が痛いように、どうしても直視できない。

それでも、全身の力をしぼって腰布をとり去る。布の下からは、二カ月間歩きつづけた筋肉質の下半身があらわれた。遅しく成長し、

もつすつかり大人の肉づきであった。

しかも、そこには生命あふれる男の兆候があった。

シーターは、一瞬、激しいめまいを覚える。幼児や少年でない、未知の大きいシッダッタが、彼女を求めていると直観する。



王子を台座に腰掛けさせたまま、身体は拭き終わった。

次、シーターは、台座の下にひざまずき、その手が中心部を拭おうとしている。

男の兆候が月光に光る。

幼児のころから、こつした事態にシーターは平然と対処してきた。だから、王子も格別のことでなく、くしゃみや咳などと同じ現象ととらえていたにちがいがなかった。

だが、その夜、シーターはそれができなかった。そこに重大な何かを感じてしまうのであった。

シッダッタも同じだった。

二カ月間こらえつづけた望郷の思いが、一気に噴出したのだろう。城門で、シーターの姿を一目見た途端とたん、稲妻のような感情が全身を貫いたのだった。久しぶりに、彼女の胸や腰を一瞥いちめつしただけで、

野性の思いがこみあげた。幼児のころから慣れ親しんだはずなのに、その夜にかぎって、それらは格別の怪しい光を放った。しかし、なぜ、そうなのか、見当もつかないのだった。

そんな未知の感情が、男の兆候に凝縮するのを、シッダッタは直観していた。

やがて、シーターの手は、静かに動き、幼いときと同じやりかたで、柔らかに中心部を拭った。

その瞬間、シッダッタの野生の感覚が、ふと、高まる。

同時に、それが、シーターの手中で鮮やかな反応をしめす。

と、呼応して彼女の感情も不意に高まる。とたんに、扱う手に、深い感情がこもりはじめた。

シッダッタは、その瞬間、シーターに固い結びを感じる。彼女も

また、王子に深い心の縫代ぬいしろを意識していた。

一瞬、身体の一部が触れあつたにすぎないのに、ふたりの心は、にわかに関結くわんけつ目めを固くする。突然、ふたりの間に吹きこぼれた心の縫合感ほうごうかんをどうすればいいのか、シッダッタもシーターも、ただ立ちつくすばかりだった。

中心部をシーターの手に委ねたまま、シッダッタの両手が、彼女の頬に伸び、恐る恐る、そつと、はさみつける。

シッダッタは、そうした振る舞いの底に、この二カ月、裸足はだしで炎

天下を歩きながら、酷暑こしよや肉刺にくせの痛み、空腹に耐えつづけたと同じ生々しい肉体と心の軋きみを感じている。生きることの原点に立つ思いだった。

王宮にとどまっては永遠に感じる事がなかったような、生命のほとぼしりというべきかもしれない。

頬に手を許したまま、シーターが、王子の目を見つめ、

「シーターに、肉をお求めになつてはなりません。どうか、精神の範囲でおとどめください」

声は小さかった。説得力もなかった。最早、自身さえ、肉の求めに勝てそうもないと悟るかに思われた。

シッダッタからは、意外に静かな答えが返ってくる。

「いいえ。肉だけを求めているわけではありません。今回の旅では、ふたつの大きな発見がありました。」

ひとつは、森羅万象しんらばんしょう、すべてがダルマによって成り立っていると
いう発見です。シーターの象の警話たしなばなしのおかげです。

いまひとつは、あなたこそ、最高の女性だったという発見です
「ありがたくも、もつたいないおことはです。でも、侍従頭に女性をお感じになつてはなりません」

シッダッタが、やはり冷静に答える。シーターは、いつか、拭う手も忘れている。

「あなたは、母を求める幼いわたしに、慈母以上に慈母でした。真実に無知だったわたしに、バラモン以上にバラモンでした。傷つきやすい心のわたしに、大樹の陰以上に憩いの木陰でした。今回は、それを、はっきりと教えてくれた旅でした。これが、いましがた、長い沐浴で得た結論だったのです…」

「聡明な王子さまが、お国の戒めをお忘れになつてはなりません。ただいまのおことは、死刑の宣告でございます。王子さまとねんごろになれば、侍従頭には毒が待っています。それが、お国の定めです…」

「いいえ、わたしのダルマの声を伝えたいにすぎません」

「王子さまに捧げたこの身、命が惜しいではありません。名を惜しんでいただきたいのです。御名を辱められてはなりません。」

スッドーダナ王は幼いとき侍従頭と結ばれ、愛する人の毒死から立ちあがれず、一年近くも森に身を隠し、狩猟に明け暮れなされた結果、ご無礼ながら、王子時代の評判は芳しくなかったと聞きおよびます。

どうか、聡明な王子としての名声を忘れないでください」

ふと気づくと、王子は台座から手を差し伸べ、シーターは、下からふり仰ぎ、ふたりは、かたく身体を寄せあっている。

そのうえに深夜の月光が澄みわたる。

不

王子の沐浴後、一旦、自室に引きあげシーターは、いよいよ、時が到来したと覚悟を決める。

そうして、自分の最後の夢は何だったかと省みる。

シッダッタに究極の教育を行うこと。

シーターには、それがただひとつの夢だった。若くして侍従頭に抜擢されたときから、それだけを真剣に考えつづけた。

王子の教育係を仰せつかるといっても、ただか五、六年、二十歳までである。その間に、ちよつど、心臓が生涯、新鮮な血液を送りつづけるように、豊かな心の糧を、脈々と供給できる精神の心臓を植えることはできないか。

いろいろ考えた結果、それは、正しい智恵と豊かな情操の教育ではなからうか、という結論に到着する…。

では、どうすることが、正しい智恵であり、豊かな情操なのであろうか。

シーター自身が、不滅の師、永久の母、永遠の恋人になることではないだろうか…。

たとえば先ず、不滅の師…。

僭越せんえつかもしれないが、父から伝授でんじゆされたヴェーダ古来の豊富な智慧がある。折に触れ、シツダッタ王子に伝えると、それらは見事な詩となつて返つてきたのだつた。それは、王子の精神の成長に大きな結実を見たと思われる…。

永久の母…。

幼いシツダッタに、暖かな肌を惜しみなく与つづけた。王子自身を、宿すことも、母乳を吸わせることもなかつたけれど、常に、裸と裸で抱き合う工夫をこらし、ふたつの乳房の間に王子の頬を埋めさせ、裸の膝で抱擁してやることを忘れなかつた。

裸身の暖かく柔らかな揺りかごがあつたればこそ、王子の温和で、凛りんとした静かな性格は形成されたにちがいない。

僭越せんえつながら、王子の情操教育には、節度ある裸のふれあいこそ、絶対に不可欠であると確信してきたのだつた…。

そうして永遠の恋人…。

何という贅沢ぜいたくだろう。いや、何という傲慢ごうまんだろう。女の身ひとつに、母と恋人、そんな贅沢な、いや、傲慢な兼備がゆるされてよいのだろうか。だが、シーターは、いつのころからか、シツダッタに異性を感じはじめていた…。

シャカ国伝来の掟おきてのあるなかで、侍従頭に、そのような機会は

滅多めったに訪れない。お側仕えの侍女たち、傘蓋さんがい、私子ほっす係の八人の侍女たちにも見咎みとがめられず、王子と睦むつむチャンスなど、そう簡単にあるものではない。

ただ、もし天に心があるなら、一生に一度は、かならずそうした機会を設けてくれるにちがいない。そう思いつづけた。

そのきわめて稀な好機は、シツダッタが北の旅から帰国し、侍女業務が再開される時、と思われた。とりわけ、ベッドを護る業務は、再開時刻を少し遅らせて告げるだけで、人払いをしたのも同じである…。

もし、王子が、ほんとうに求めてくれるなら、生涯に一度、最初にして最後の衣を脱ぐのはこの機会しかない、と思ひ定めていた。

ただ、シツダッタの名声を汚さず、永遠の恋人でありつづけるには、完全犯罪でなければならぬ、と思つたのだつた。

発覚すれば醜態しゆうたいにすぎない。豊かな情操とは縁遠い。完璧かんぺきに秘してこそ、ただ一度きりの秘事は、王子の心で、日々新たに、豊かな情操へと育ちつづけるにちがいない。

しかも慎重な性質の王子は、秘事を口外するようなまねは決してしない。それだけに、すぐに発覚するような方法を選べば、王子自身に、かえつて軽蔑されるだけであろう…。

しかも一度きりという誓いも立てた。天の法（ダルマ）を犯すこ

とは一度はゆるされても、二度、三度あつてはならない、と思う。
王子に思いをとげさせれば、あとはいつ幕を引くかだけである。
ときを選び、仕方を吟味して、最高の幕引きをし、王子の前から姿
を消すだけである…。

こうして、シーターは、シッダッタの寢室へ出立する。



曙あけぼののころ、ベッドでシッダッタがまどろみから目覚める。

シーターの姿はもうなかった。シーツには、ただ西の月の斜光しゃくわうが
射しこむばかり、薄闇うすやみに愛しい人のまぼろしが、一瞬、坐っていた。
身を起こし、頭をめぐらして目を配る。

壁や床には、シーターが生命の色だと好む赤い壁飾りやカーテン、
絨毯じゅうたんなどが重厚なシルエットを描いている。そこへ月光が斜めに射
し、豪華な織物が冷たい光沢を見せる。

なぜか、いつもより広く感じる羽根マットのわずかなくぼみが、
愛しい人の名残をとどめる。絹布きぬぬれを手にとれば、かすかにその人の
移り香うつかが漂う。思わずそれを、鼻先にもたげて愛しめば、たちま
ち、秘め事の端々はしはしがよみがえった。

足元を見れば、気の所為せいか、独り寝のシーツよりも寝乱れの幅が

広い。そこに、昨夜半、中天の月が射し、青い光に濡れたシーター
が美しいシルエットを見せて坐っていた。

国禁を破り、あえて衣を解くとき、月影に、乳房が弾み腰はすが撓たわん
であらわな線を描き、夥おびただしい黒髪がシーツに散ったのだった。

憤つっましく息を殺しながら、豊乳を恥らい与え、秘花を楚々そそと許し、
惜しむところがなかった。献身けんしんぶりは、哀しくさえあつた。

薄闇のなかで目を見つめあい、裸身をひとつに寄せあうと、その
人は、母のように気高く、僕しもへのように従順で、世に類たぐいもなく愛しく、
そして切ないのだった。その人の名を唇の端に乗せるだけで、胸は
高鳴り、心のままにいつまでも名を呼んだ。「はい」と応える従順な
ことは返るたび、その人の四肢ししに力がこもり、二人して切なさの
かぎりを尽くしたのだった…。

だが、シッダッタの胸には、一本の棘とげが刺さっていた。

快い疲れでまどろむ耳元に、
「さようなら、王子さま…」

と聞えたような気がしてならないのだ。

その、静かな叫びが脳裏に焼きついている。いつの時間帯だった
かわからない。母の乳房のように、あふれる蜜を与えてくれた直後
だったかもしれない。寝乱れた裾に手をそえ、風のように、ベッド
を去った際の一言だったかもわからない。

どちらにしても、シッダッタがまどろむ夢のなかだった。

さようなら、王子…。

ベッドに坐り、シッダッタは、そのことを唇に繰り返した。

そこには毒死の覚悟が秘められている。

そう悟った途端、シッダッタは、欲望のために愛する人を犠牲にした自分が許せないと思った。天界に咲く曼珠沙華を折って足の裏で踏み潰した感じだった。天上の至宝を淫らに汚してしまった思いであった。

シッダッタは、ベッドの縁で深い溜息をつく。

いたたまれず、沐浴のためベッドを後にする。夜明け前の清水に身を沈め、静かに心を落ち着けたかった。

シッダッタは、沐浴池で、次々と襲いかかる自己嫌悪と後悔の高潮をかぶりつづける。

王子と侍従頭が、一瞬のうちに、ひとつに溶けあう、この不思議な力とは何だろう。ひとつになりたいたけなのに、なぜ、相手を奪うのだろう。互いに奪いあった姿が、たまたま、ひとつと見えるにすぎないのだろうか。なぜ、愛ということばで、愛する人に犠牲を強いるのだろうか…。

そんなことを思いつつ、シッダッタは、天の至宝ともいうべき女性に、死刑宣告した自分が悔やまれてしかたない。シーターへの愛

を、どんなにことばで飾っても、所詮は、犠牲を強いたただけではなかったかと口惜しくてならない。

ようやく心を落ち着けて沐浴池の縁へあがると、台座のまわりには、もう彼を待ちうける侍女たちの姿があった。

すぐさま、シーターの姿が目飛び込む。

神々しくて切なく、すぐにも駆けよって思わず抱きしめずにいられない心境だが、台座にどっかりと腰を据えた。

シーターは、あえて視線を避けているが、堂々として人を寄せつけない威厳が漂う。毅然とした振る舞いを見せるなかに、華やかで、いつそう艶やかに光り輝く別人のシーターが見えている。

シーターが、伏目のまま、静かにいった。

「王子さま、今日からは、アンヴァバーシーがお世話をさせていただきます」

見れば、台座のまえのいつものシーターの位置に、若い侍女の豊かな黒髪がある。下を向いていて顔は見えない。

シッダッタの頭のどこかで、「さようなら、王子さま…」という叫びが聞こえている。

「アンヴァバーシー、顔をあげて、ご挨拶なさい」

そういわれてあげた笑顔を見て、シッダッタは腰を抜かしそうになる。シーターがもうひとり、そこに坐っていたのだ。

「どうか、よろしく願います」

ここまでそっくりの人がいるものだ、ことばも出ない。顔も姿も身ぶりも、愛する人そのままなのである。

やがて、シーターの指示を受けて、アンヴァバーシーの震える手が、恐る恐る、王子の腰布こしぎれを解きはじめた。

シーターは、シツダツタを黙って見つめる。



シツダツタの一番の気がかりは、シーターとの一件が、誰かに感づかれていないかということだった。

翌日、王への報告や城をあげての帰国レセプションのとき、用心深く周囲に探りを入れたが、心配ないようだった。侍女たちにも、前夜のシーターの行動を知るものがないか、そつと尋ねたが、大丈夫だった。ランガラ賢者にも、その後、ヴェーダ経典の学習の折など、そつと探ったが、われ関せずの反応だった。

万一、誰かの知るところとなれば、すぐにもシーターは職を解かれ、服毒の刑罰を受けなければならぬだろうが、目下、心配はなさそうだった。ともかく、ひと安心というところである。

それにしても、シーターの周到さに、シツダツタはあらためて舌

を巻く。

最近、シーターを愛してはじめて痛感したのだが、二人きりになりたくても、いまさらながらではあるが、王子に、プライベートな空間や時間などまったくなかつた。

眠る間さえベッドに侍女がつく。二人が毒蜘蛛どくぐもなどをよける傘蓋さんがいをさしかざし、さらに二人がサソリや毒虫を払う払子ほっすをもち、一匹の蟻にも監視の目を行き届かせる。つまりは、王子が四六時中監視されているのである。

沐浴前後の着替えも、侍女にとりかこまれている。これまでなら、シーターが腰布こしぎれをとり、侍女たちが手足や頭を拭くのだった。身体みの中心部も、やはりシーターの受け持ちで、もし、男の兆候があれば、それさえ、侍女たちの衆目にさらされる。手洗いも食事も居室のくつろぎも、すべて大同小異である。

そんな衆目監視のなか、誰にも見咎みとがめられず、二人さえ口を嚙くんでおれば、絶対に発覚しない奇跡のひとつときを、シーターは、よくも巧みに設定できたものだ。シツダツタは、改めて彼女の愛の深さと配慮の慎重さに痛み入る。

惜しみなくシーターへの思いを遂げさせ、しかも、発覚して毒死どくじという醜態しゅうたいもなかったことを思えば、シツダツタは、もうこれ以上、欲求を抱いてはならないと、自分に強くいい聞かせる。絶好の奇跡

など、再び求めて起こるものでないと思う。

代わりにその分、北への旅で、欠けていると痛感した知識、見聞などを勉強したいとランガラ賢者に申し出た。

早速、西方や東方貿易の隊商の大商人、コーサラ王国やマガダ王国の事情に詳しい学者、商人、修行者などが呼ばれ、王子の前で、講義が行われ始める。

好奇心が強く知識欲旺盛なシッタッタは、もっと話を聞かせてほしいと、三日も四日も講師を帰さないこともしばしばだった。

王子の意欲的な姿を見ながら、シーターは、掌てのひらから飛び立とうとするシッタッタの逞たくましい羽ばたきを聞いている。

何日か講義が続くと、シーターが、アンヴァバーシーなど侍女をひきつれて、特別の慰勞にやって来る。

早速、シーターが指示を下す。

「王子さまはお疲れです。ジャスミン油の熱いお湯でお身体を拭いて差しあげ、そのあと、ソーマ酒を少々お召しあがりいただき、全身に香油でマッサージをさせていただくのです。お部屋には、伽羅きゃらの香を焚たきなさい」

シーターは、王子が本心を抑え、無理して励む内心がわかるので、揺り戻しをかけているのである。特に、ソーマ酒など、理性を鈍らせるアルコール類を、シッタッタが好まないのを承知で、あえて与

えるのだった。

シッタッタも、シーターの無言の配慮がわかるので黙って従う。用意が整つと、早速、侍女たちの手でシッタッタの着衣が脱がされ、分担に従つて、ジャスミンの熱い湯で身体が拭かれる。

シッタッタは、シーターに変わる新人に対し、まだ半分は心に鎧よろいをかぶっているが、やがてアンヴァバーシーの手が、恐る恐る身体の中心部へと届いていくと、諦あきらめ半分で身を任せざるをえない。

任されたと感じると、アンヴァバーシーも心がこもり、ぎこちないながらも心遣こころづかいいの繊細さ、情感の豊かさを見せ始める。

シーターは、侍従頭という立場上、中心部に触れるときも一線を画さねばならなかったが、アンヴァバーシーは、ただの侍女にすぎない。まだまだ未熟ながら、気さくな雰囲気で、始終、屈託くつたくのない笑顔を見せ、王子をなごませようと努めている。

ジャスミンの熱湯ねつとう拭ふきが終わって、香のマッサージとなったとき、香油を塗ろうと、アンヴァバーシーが背伸びして手をかざすと、シッタッタの目前で、伸びやかな裸身が薄絹に透けて見えたりする。

姿容すがたがたちが瓜ふたつだったことも忘れ、シッタッタが、思わず目を瞠みはる。雰囲気を感じたアンヴァバーシーは、恥じらいつつも、肢体を王子の視線にそつと曝さらしつづける……。

そんなことが二度三度と重なるうちに、アンヴァバーシーへの

シツダツタの態度もうち解け始め、ときには、会話が弾んだりする。ほんとうは、二人がこうしてもっと親密になることを、シーターは願っている。王子と侍女の間なら、伝来の掟もないからである。「二人目のシーター」を紹介されたとき、シツダツタは、そんなシーターの魂胆を察していた。でも、同時に、シーターの真意をはかりかねると思うのだった。



それから三カ月、雨季をまえに、居城は雨季のそれに移っていた。石積みが高くして増水に備え、各所に、排水の工夫が凝らされている。焼きレンガの屋内貯水槽には、常に新鮮な地下水が貯えられ、飲料として、また沐浴用として慎重に使われる。この季節、城内で一番警戒の厳重なのは、この貯水槽かもしれない…。

この城に移って以来、シツダツタは寝不足がちだった。本心を抑えて平静を装うことの無理が、ここに来て頭をもたげ始めたらしい。三カ月間、連続して続いた特別講義が終わると、雨季の城中は、庭園に出ることもならず、暇をもてあました。

雨安居あめあんじといって、この季節、修行者たちも、一カ所に留まって外を歩かない。植物の芽、孵化ふかする小虫を踏みつけて殺さない配慮が

らだ。そのかわり、瞑想で自分を高める習なわしであった。

外界を知ったシツダツタに雨季の城は狭すぎた。

ほんとうなら、梵我一如ぼんがいちにょの瞑想で思いを深めなければならい筈であった。幼いころは、暇さえあれば、何時間でもそれができ、雨季でも時間をもてあますことはなかった。ところが、シーターと睦むつんでは、それができなくなった。なぜか、意欲いよくが湧かないし、仮に始めても集中力が欠け、持続しないのだった。

暇ができると、一夜の夢心地が忘れられず、無駄とわかりながらシーターのもとへ、たびたび、侍女を遣つかわす。不自然でない口実くじつを捻ひねりだす工夫は大変だった。

シーターは、早速、飛んで来るが、そこから先、もともと、別の展開があるわけではなかった。シツダツタは、人払いなどして二人きりになりたいのだが、そんな無理無体をいう方が悪いとわかっての、はかない願望であった。

求めにどう応じたものが、シーター自身、困り果てているのは、シツダツタも承知していた。掟おきてに触れない範囲で、何とかしようと焦あせっても、王子警護の厳しさや彼女の未経験さから、よい知恵も浮かばず、悔くやしがっているのもわかっていた。

どうにもならないから、王子との間に見事なくらいに一線を画し、公務の枠に逃げこんでいるにちがいがなかった。

侍従頭としてよそよそしく振舞うほか、名案もないのだった。

そうしたあと、かならずアンヴァバシーを送ってよこすのは、解決策がないままの、逃げの一手と思われた。シーターでは何もできないから、アンヴァバシーを代理に立てるほかに、よい手も見つからないのだろう。

最近、シーターはよく呟くのだった。

わたくしがお仕えできるのは幼い王子さまです。もうそれ以上は、ただ、足手まといになるだけです…。

そんなシーターをよそに、アンヴァバシーは、指示を受けると、何かいい含められているのか、嬉々として姿を見せ、楽しむようにシッダッタの世話を焼く。

大抵は、彼女を頭に五、六名でやってきて、公務というよりは、シッダッタが中心の人形遊びのように、わいわいと騒ぐのだった。

シッダッタを裸にし、美しい肌に触れながら、ジャスミンの熱湯で拭いたり、香油でマッサージしたりする時間を、侍女たち皆で、ゆっくり楽しむといえよいだらうか。

瞑想を好んだ少し前なら、騒々しくて耐えられなかったにちがいないが、心の靄もやが晴れない昨今は、結構、手ごろな慰めといえる。

ただ、アンヴァバシーは、少しセックスアピールが強く、どこか誘惑的なのを除けば、熱心さ、ぎこちない初々しさという点では、

好感がもてるのだった。でも、彼女の一途いちずな気性は、一生懸命という印象で感じはよいのだが、少し危なっかしい気がしてならない。

しかし、陽気なアンヴァバシーの献身も、所詮しよせん、一時の慰みにすぎず、彼女には悪いが、どんなに尽くされてもシッダッタの心が、芯しんから休まることはないのだった。

姿容すがたがたちが、シーターそっくりなのだから、シッダッタの心の持ち方次第では、もっと愉快で楽しい日々が送れると思われるのだが、どこかに無意識のこだわりがあるのかもしれない。

そのくせ、シッダッタ自身、自分は女性に不器用なのかもしれないと、考え込んだりする。

こうした事態では、シーターと親しく話できない日が、幾日か続いても不思議でなかった。毎日顔を見あわしながら、シーターとは心の交流もできず、伝えたい切ない思いが、ゴミの山のように、胸に詰まっていく。すると、不満が鬱積うっせきして寝つかれない。眠りについてても、睡眠が浅く、目が覚めやすい。

寝不足になると、次第に、バラモン經典の暗誦あんじゆなどが億劫おくくわとなる。記憶力が低下する。次第に、凡庸ぼんやうな王子に成りさがっていく。

すかさず、ランガラ賢者から、「悩みに吞まれるようでは大成しませんぞ」と注意され、例の一件までもが発覚したのではあるまいかと、別の

不安にもさらされる。と、余計に、シーターの身のうえが心配で眠れない…。



そんな八方塞りはつぱうさいりのある深夜、子供のころをまねて一計を案じ、突然行方をくらましてみた。

もう五年はそのような幼い奇行はしていないし、北への旅で急速に高まった大王への自覚からすれば、稚戯ちぎに等しいことはわかっていた。このような悪戯いたづらをまだ恥じないシッターに、ランガラ賢者もシーターも失望するのは、目に見えていた。でも、半分は悪戯、半分は自棄やけだった。心底では、志操堅固しそつけんこなシーターへの当てつけが、百パーセントだったかもしれない…。

城最上階の屋根裏部屋に身を潜めていると、案の定、シーターが、単身、真つ先に乗りこんできた。

その部屋はベッドもあるし門かどぬきも中からかけられる。シッターは、そこで目的を果たそうと待ちかまえた。

息せき切ったシーターに、突如、身を躍らせてシッターが襲いかかった。勢いある手を制し、シーターが厳しく立ちはだかる。

「あの夜は、王子さまのやさしいおことばに感動し、あえて国禁を侵

したので。一度きりの、決死の誠意とご理解ください。

それがお嫌なら、侍女たちの前で、堂々と国禁を侵せとお命じください。王子さまのご所望なら、シーターは、侍女たちを前にして、よるこんで衣を解きます。毒など少しも恐れはしません。そうなさつてこそ、大王さまの振る舞いというものです…」

「シッターには一言の弁解もできない。」

「王子さまは、まだ、どこか、ご自分に甘えていらつしやいます。」

どうか、あの折の誠意に免じ、この際、わたくしへの思いはお断ちください。聡明な王子として、毅然とした振る舞いをなさつてください…」

そういいながら、シーターは、王子を導き、ヒマラヤ山脈への眺望の開けたテラスの一角に出る。

雨季ながら、快晴の夜空はるかに、北壁の高い影が聳え立つ。

シッターの心を威嚇いかくするようでもあった。

その一角、アンナブルナの秀嶺を指し、二カ月ぶりに帰国した王子の姿は、あのように毅然として不動だったと、シーターが訴える。

「大きいえば国、小さいえばグループ、どのような組織でありまして、その組織はリーダーの影そのものです。リーダーの人間

性、つまり、どれだけ正しい智恵と豊かな情操をお持ちかで、その組織はきまるのです。争いが絶えないとしたら、リーダーの人間性がそうだからです。貧しいとしたら、これも、リーダーの思いが貧困だからといえます」

「実を申しあげますと、わたくしも苦しんでおるのでございます。心から王子さまをお慕いしているからです。あの二カ月、お姿を拝見できなくなつて、はじめてわかりました。もう、お妃をお迎えになつてもおかしくないお年ですから、わたくしは、仰せつかれば、永遠にお側にお仕えしたい気持ちでございます……」

「ご聡明で、感情豊かな王子さまは、王として最高の器をお持ちです。そのようなお方に、生涯お仕えできるのなら命も惜しみません」
聞きながら、シッダッタは、感きわまつている。

「しかし、よくお聞きください。わたくしには、大切な使命があるのです。わたくし個人の子王ではなく、シヤカ国の王子としてご成長していただき、まず、この国の王となり、次に、いま、ここから見渡すかぎり、四方八方、すべての国々を治める大王となつていただかねばなりません。」

それこそが、この国の民、いいえ、ここから見える大きい世界の

民の願いであり、幸せでもございます。

シーターは、微力ながら、そのお助けを仰せつかつていたのでございます」

シーターは、そついいながらテラスから手を伸ばし、星の美しい夜空に向かつて両手を広げてみせ、そこに横たわる大地が、間もなく大王の領地となり、ダルマに基づいた為政が行きわたるであろうと訴えた。

ただただ、シッダッタは、わが身のいたらなさに恥じ入るばかりだった。

「大王への道を歩まれるお方が、シーターなど、ひとりの女にこだわられるものではありません。」

ひとりの女としては、王子さまのお心はかけがえもなくうれしゅうございます。しかし、わたくしは、個人の立場に甘んじたくはございません。

シーターであれアンヴァバーシーであれ、ほかのどんな女性であれ、平気で飲み込んで悩みのもとを断ち、ダルマの上にしつかりとお立ちいただきたいのです。それこそが、大王への王道であります。

これは、シーターからの、唯一、最後のお願いでもございます」
シッダッタは、こなごなにうち砕かれた感じだった。

どこかで、「さようなら、王子さま……」という叫びが、再び、聞こ

えたようだった。シーターの凄さは、ただ、アンナプルナの霊峰を前にひざまずく思いである。

母として師として、また妻として最高の女性であり、もし、国禁さえなければ、将来のシヤカ国王妃は、このひとでなければならぬいと痛感する。



寝室に戻ると、とんでもない事態が待っていた。

アンヴァバーシーや侍女たちが、部屋の外で不安げに首を長くしている。王子の姿を発見するや、いっせいに歓声があがる。

わけを尋ねると、王子の姿が、突然、消えたが大騒ぎなのを聞き、どこかへシーターが飛び出したままなので、待っているという。

シーターなら、とつくに部屋に戻ったが、自分は最上階で夜風に吹かれていたというところ、

「よかった。ご準備してお待ちしておりました」

と、うれしそうに、アンヴァバーシーが侍女たちを振り返る。薄絹の侍女たちも大きくうなずく。

「王子さまを、皆で、元気づけようと約束したのです」

屈託ない態度で、アンヴァバーシーがたたみかける。

北の国々への旅で自由の味を知った王子に、城内は狭すぎ、いらだちがたまっているにちがいない。皆で、それを発散させて差しあげようと、今夜は、特別メニューを処方したという。

ジャスミン油の熱湯で身体を拭いたあと、麝香でマッサージし、部屋には、伽羅を焚くという。

「もう遅いから、今夜はよそうか…」
と、慎重に、軽くないすと、

「シーター様のことは、よくお受けなされるのに、アンヴァバーシーでは、だめなのでしょうか」

笑顔で、はぐらかすように迫るのを、黙殺したつもりが、相手は知ってか知らずか、

「王子さまのお許しが出たわよ」

と叫び、薄絹の大群が寝室になだれ込み、壁に燈明がともされる。シッダッタはこうしたときの判断にいつも苦慮する。

折角の申出であっても、気が向かねば、断固、ノーというべきなのか。大勢がそちらに向いているなら、気に入らなくとも、大局から見て問題ないと思えば、黙認して流されておけばいいのか。

王子を信頼しておればこそと思われるが、自分たちの発案が受け

入れられたのが余程うれしらしく、嬉々として準備する侍女たちを見ると、その夜は、黙認に流されざるをえなかった。

早速、王子が裸にされ、台座に腰掛けると、湯気とジャスミンの香りと甘い女の匂いが立ちこめる。億劫だった心も、ジャスミンの爽快感によって活力を帯びはじめ。

たち働く侍女たちの肉体が、燈明に照らされ、シルエツトとなって白壁を流れたり、一瞬、白絹から桃色に透け出たりする。

そんな乙女の妖気にさらされると、薬効も手伝い、若い男でなくとも、ふと目覚めるものを感じてしまふ。

「皆さんが、不思議がっているのです……」

情感こめて中心部に手を添えながら、アンヴァバーシーが、いつもの屈託ない笑顔で、ひとつの噂話を語りかけてきた。

もってまわっている婉曲に話したが、結論のあまりのリアルさに、シツダツタは、一瞬、肝を冷やす。

要は、アンヴァバーシーが王子の世話をするようになってからは、連日のように、男の兆候があらわれるのに、なぜ、彼女は召されないのであるかと、侍女たちが不思議がっているという。

これは、不味い。

と、思ったが、シツダツタの身体は、すでにその兆候にある。

幼いときから、いつも平気でシーターが通りすぎたので、くしゃ

みか咳の一種くらいにしか思っていないかった。どちらかといえば、いまも、あまり羞恥を覚えぬ。

無邪気な女だから、単なる世間話のつもりだったにちがいない。だが、シツダツタの胸にぐざりと来た。ただ、兆候はあっても、アンヴァバーシーを求めてとはかぎらず、生理現象一般でもあるわけだ。いまになれば、アンヴァバーシーのような理解も成り立つと教えなかったシーターを、責めたい気持ちでもある。

黙殺して微笑んでいると、やはり世間話だったらしく、彼女は、別に答えを求めなくてもなく、さつさと通りすぎた。ただ、両手足、頭、背中を拭う侍女たちの目には、笑顔のなかにも鋭く光るものがあつた。



ジャスミンの熱湯で身体を拭き終わると、次に、ソラー酒を飲んで麝香マッサージへと進んでいく。

マッサージは、香油などを使うので、普通、専用の革製ベッドを用いる。ところが、その夜は、麝香で汚れる心配も少ないからと、就寝ベッドが使われることになる。

少し危ないと思ったが、場の勢いというか、もともと侍女たちの

発意による行事なので、シッダッタも大勢に流されざるをえない。

マッサージのまえに、まず、ソーラ酒を飲まねばならなかった。

シッダッタは、元来、飲酒を好まない。いかなるときも目覚めたい気性だから、酒酔いで理性の曇るのを遠ざけたい。

神事のソーラ酒なら、祭事でもあり少量なので我慢して飲む。刺すような舌ざわりや幻覚に近い酔い心地は嫌いではない。

だが、素面では見えも聞こえない死霊の顔や声、彼らの暗躍する不思議な現象が、その神酒によってあらわれると説くのは、信じるわけにはいかないと考えていた。

飲酒を好まない理由のひとつは、ソーラ酒をがぶ飲みして放談放吟し、ことをみだりにもてあそぶのは、ことばに宿る真実への冒瀆だと考えるからだ。飲酒しても、もっとも慎みたいと、つねづね考えるのは、酔いに任せた放談駄弁だった。

「さあ、王子さま、お召しあがりください」

マッサージの直前、裸身の腰に絹布一枚のシッダッタへ、声がかかった。声をかけたアンヴァパーシーは、膝を接するようにして、その真ん前に坐る。ベッドで王子と対座した格好である。

ベッド横に運ばれたテーブルには酒器が並べられ、そこから陶製の大きい盃が鼻先へささげられた。酒がなみなみとゆれる。

飲まねばならない。だが、飲めば、その一杯で、飲酒経験の乏し

い身が酔っ払う確率は高い。断つて、雰囲気もこわしたくない。

「毒見だ。アンヴァパーシーから、まず、毒見だな……」

咄嗟の思いつきで、シッダッタが笑顔で盃を押し返す。

「はい。畏まりました」

一気に乾して、空盃を脇の侍女に返し、見栄をきった。

「王子さまのご命令とあれば、毒でも剣でも大蛇でもお吞みます」シッダッタはアンヴァパーシーの誠意を見たと思う。心の芯が少し熱くなる。すると、ベッド下でひざまずいていたほかの侍女たちが、次々に反応をしめした。

「わたくしとて、毒でも剣でも……」

いうが早いか、五人の侍女たちが、次々、大きい盃を見事に空にしていった。

シッダッタは、背いてはならない何かを感じる。

輪番の毒見のお陰で、場が一気に盛りあがる。次、シッダッタが盃を乾さないことには、最高潮にある雰囲気もたない。意を決して手を伸ばし、盃を求める。

「さあ、アンヴァパーシー、わたしにも……」

いそいそと差し出された酒いっぱい盃を手にし、シッダッタが、今度は、

「まず、少し漱ぎがしたいのだが……」

と、少し大仰に、吐き壺をさがすまねをしてみせた。他意はない。場もたせの単なるアドリブだった。

「ただかせていただきます。よろしければ、このわたしが…」

思いもかけず、ベッド下でひざまずいた一番端から声がかかった。

一瞬、その場が静まりかえった。

「ありがとうございます。さすがにシッダッタの侍女です…」

その回答で、再び、雰囲気盛り上がり、大歓声が弾けたところで、シッダッタが、覚悟をきめて志願した侍女を招いた。

いま尻込みすれば、何もかもおしまいである。

侍女を立たせたまま、ベッドのうえから腕を薄絹の肩にまわし、接吻の要領で唇と唇を密着させ、口に含んだものを注ぎ込む。

侍女は、直立し、音を立てて王子の口から酒を飲んだ。

シッダッタの唇に女の唇の青い果実の感触が鮮やかだった。

「光荣でございます…」

飲み終わるや、彼女は抱擁から逃げるようにして土下座し、涙しながら何度も礼を述べる。一番下座に戻っても感激に震えている。

大騒動だった。そのあと、下に控える侍女一人一人に、手抜きなくしっかりと唇をあわせ、平等に、酒を口移ししたのだった。突然の

王子との接吻、抱擁で侍女たちは色めき立った。

次々に、五人の女の肩に腕をまわし、唇を密着させると、ふと、

霧散していくものがある。意外にも、女たちの抱き心地や唇の味が、千差万別なのを感じ、いつか、それを甘受する気持ちが芽生える。

シッダッタは、心の変化を感じるが、止めるすがわがわからない。

最後にベッドのアンヴァバーシーが残った。新しい盃になみなみと酒を注がせると、シッダッタが微笑んだ。

「さあ、アンヴァバーシー、こちらへ…」

そつと身を寄せてくる瞬間を片腕で抱きとめると、彼女も、肩に手をまわす。抱擁そのもののかたちだった。

侍女たちが見守るなか、シッダッタは、盃からゆっくり酒を含み、

唇に唇を寄せていく。口は屈託ない侍女なのに小刻みに震える。そのようすが可憐で、真心が伝わる感じだった。

唇に唇を密着させると、しっかりと抱き寄せ、口のをやさしく注ぐ。それを受けながら、アンヴァバーシーもシッダッタを情感込めて抱くのがあった。終わっても、腕を解こうとしない。惜しむように、逆に唇を押しあてた。

直後、アンヴァバーシーはわれに返ると、驚いて抱擁から逃れ、シッダッタの膝もとにひれ伏し、震える涙声で、

「光荣でございます。誤解でございました。わたくしは、シーター様と同じ姿かたちでも、王子さまからは、到底、ご関心をお寄せいただけないものと、苦しんでいたのでございます。いま、王子さま

のお心を感じさせていただきました…」

侍女たちが笑顔で見つめている。

アンヴァバーシーへ注がれる侍女たちの視線がかわるのを確かめながら、シッダッタ自身、少し酔いがまわったのを感じている。



頭痛を覚え、シッダッタが目を覚ました。

あたりはもう明るい。スコールが降るらしく、豪雨の響きが城を包んでいる。

ベッドの横を見れば、女が、向こう向きに寝そべっている。長い黒髪がベッドに広がっている。不味いことになってしまったと思うが、もう遅い。ベッドの下に目をやれば、侍女たちが、ぐったりした格好で、壁に身をもたせかけ思い思いに眠りこけている。長い髪が顔をおおい、誰かがはつきりしない。

脇のテーブルには酒器が散乱している。

ベッド脇で傘をかざした二人の侍女、扨子をもった、やはり二人の侍女に目をやると、そっと視線を避けた。

シッダッタの記憶は、あるとき以降、ぷつりと切れている。

この四人は、夜来、どのような光景を見たのだろうと思うと、恐ろしくてならない。

燻らせていたはずの伽羅の香りが消え、部屋中に酒の匂いが充満し、しかも、ベッドで侍女が眠るといふ事実で、いかに常軌を逸した光景が展開したかわかるうというものだ。

恐る恐る、記憶を手繰りよせる。

侍女といつても、バラモンや高級官僚、富豪など良家の娘ばかり、飲酒の経験もないのに、いきなり、大きい盃で毒見がはじまった。

そこへ王子からの口移しの酒も加わり、麝香のマッサージがはじまるころには、かなりの酔いだっただ。

それに、酒の口移しの際、王子との接吻や抱擁が繰り返されたので、男女が肉体を接するとき、だれもが抱く羞恥や抵抗感、警戒心などが、最初から吹っ飛んでいた。

おまけに、この催しは、シッダッタを元気づけようと侍女たちが発意したものだけに、統制を欠きやすく、また、彼女らがまだ十代の若さゆえ、男女の乱れにつながるの、やむをえないかもしれない。あった。

最初は、侍女たちのやさしい手が、麝香を含んで、王子の裸身の肌を静かに撫でていたのだった。

王子をうつ伏せにし、各人が分担をきめ、首、肩、背中、腕、尻などとマッサージしながら、酔いも手伝って小声で雑談するうち、だれかが、王子を元気づけようと麝香を塗っているが、ほんとうは、媚薬だといいだした。

それなら、侍女自身にも薬効があるはずだし、こうしているうちにも全員に麝香が効いてきて、尊いお一人の方の争奪戦そうたっせんになったらどうしようと、騒ぎがもちあがった。

他愛ない黄色い騒動を、シッターは、酔いのまわるのを感じながら、伏せた頭のうえに聞いた。すずんで飲んではいないが、口移しなどで、大量の喉越しがあつたにちがいない。

争奪になった場合、だれが一番かという話題になり、それはとうぜん、アンヴァバリーだと思見の一致を見た。

「王子様が、愛していらっしゃるのは、もちろんシッター様だわ。でも、それが許されないのです、王子様を悲しませないよう、身代わりに推薦されたのが、瓜二つのアンヴァバリーさんだもの……」

だれかがそういうと、当のアンヴァバリーが、屈託なく

「でも、この麝香じやくかう、わたくしには、少しも効かないみたい」と、とぼけると、別の誰かが、少し面白がっていった。

「じゃ、少し、舐めてみたら？」

「いや、お酒に混ぜて、呑むのがいいわ」

「その混ぜたお酒、いつそのこと、王子様から口移ししていただいたらどうかしら」

真剣な議論の結果、シッターに、その役目が奏上そうじやうされたのまで記憶がよみがえる。

いよいよ麝香じやくかうの準備ができたというので、裸身のシッターが、むっくり起きあがり、アンヴァバリーを抱いたのだった。

肩に腕をまわすと、驚いたことに、なぜか、上半身に着衣はなく胸はあらわだった。豊かな乳房を真下に唇に唇を密着させ、ゆっくり口移しを終えたが、アンヴァバリーは、唇を、どうあつても離さないと抱きついたままである。

それを見た侍女たちが、アンヴァバリーを押しつけ、

「どうか、わたくしにも……」

と、われ先に次々と麝香酒の接吻を求めてきたのだった。

一度口移しが済んでも、だれも、すぐに離れようとしなない。王子の首にまわした腕に力をこめ、乳房を潰つぶして抱擁をつづけ、唇を死守しようとする。

激しくせがむので、二度、媚薬酒を含ませた侍女もいた。

一巡して、再び、アンヴァバリーに順がまわったとき、だれかが、腰から下の衣を剥はいだのだった。

やがて、薄絹に透けていた裸身が伸びやかに横たわり、くびれた

腰が両手にあまり、濃い体毛が迫って乳房がつぶれ、豊かな肉に、そつと、シッダッタの裸身が埋没したのまでは思い出せる。

その先は、もうまったく覚えがない…。

城を包む豪雨の音は、いつそう強まるようだった。気温は少し下がっただろうか。

侍女たちはひとりとして目を覚まさずに眠る。

シッダッタは、横で向こう向きになった侍女の寝姿を眺めながら、自分を恥じた。

子供が戯れに蝶の羽根をむしるように、さまざま酒戯や淫戯の果てに、ひとりの女を心ない交歓で犯してしまった。

ベッドに広がる長い黒髪、美しくくびれた腰が不憫に思えてならなかった。むしられた美しい羽根が、二度と蝶に戻らないように、奪われた美しい何かも、最早、彼女のもとへは返らないだろう…。

しかも、このベッドは、死を覚悟して、シーターが、あえて衣を解き真心を捧げてくれた神聖な祭壇であった。互いが、強い絆で結ばれたことを実感した誓いの祭壇でもあった。梵我一如の瞑想を目標に、天の法を実践する努力を重ねてきたが、彼女と結ばれた瞬間、まさに、そのダルマを見た思いだった。それなのに、戯れの果てに、淫行でその祭壇を汚してしまった…。

あの朝、目覚めると、神聖な祭壇に、シーターの姿はなかった。

寂しかったが清々しかった。空ろだったが余韻が残った。しかし、いま、ここに侍女たちの眠る姿は、あまりに生々しく、現実味があまりすぎる…。

シッダッタは、横で眠る侍女に近づいて肩に手をかけ、こちらへそつと寝返りをうたせた。黒髪が顔にまとわりついたまま、侍女が上向きになったとき、シッダッタは、まったく予期しない出来事に気を失いかける。

横で眠っていたのは、アンヴァバーシーではなかったのだ。

黒髪の顔をよく見ると、横で眠るのは、漱ぎの酒を志願したあの下座の侍女で、口移しのとき、唇から青い果実の味が染み、ふと、手離したくなかった記憶がある…。

いざというとき、アンヴァバーシーでなく、あの侍女を呼んでしまったのだろうか。いや、確かに、アンヴァバーシーが最初だった記憶がある。では、この侍女はその次だったのだろうか。

いや、常に最後尾に控えた彼女は、シッダッタがとくに所望でもしないかぎり、二番目ということはないだろう。だが、そんな所望の記憶は持ちあわせない。

とすると、アンヴァバーシーからはじまって侍女たちを一巡し、最後が、彼女だったのだろうか…。

信じられなかった。いや、信じたくなかった。真実を知るのが怖

く、侍女たちには永遠に眠りつづけてほしいと思うのだった。

仮に、もし、乱痴気騒ぎらんちきさわぎを起こしたのだったら、いまも少しも変わらぬシーターへの真実の心は、果たして、どうすれば穢けがれから被はらい清められるのだろう…。



アンヴァバーシーは、胸に暗雲が湧くような不快感で目を覚ます。すっかり明るい。王子の寝室は、朝というよりも昼に近い豊かな光であふれる。

しまった。

と思ったが、ベッドに、シッダッタ王子の姿はもうない。

規則正しい暮らしの王子は、早や、沐浴と瞑想めいそうに起きたにちがいない。

かわりに、ベッドには、侍女の寝姿が一つ横たわる。お側仕えを許されたばかりの新人、ジャスミンの白い花のようなマリカである。恥らうように小さく咲き、甘くほのかな香りをただよわす。

マリカがいけなかったのだわ。そもそも、漱すすぎのお酒を、けなげなまねして口移していただくから、皆が、競まさって痴戯ちぎに走ってしまっただけ…。

アンヴァバーシーは、ひそかな羨望せんぼうの痛みをひりひりと感じながら、寝台の下の壁にもたれ、王子のベッドで熟睡じゅくすいの美しい半裸体に目を光らせる。

最後、マリカが、一番深い愛に浸ひたったようだわ…

最初シッダッタの肉がほとぼしかったのは、アヴァバーシーだったが、睦むつみの後先あひさき、侍女たちは、女同士、もう着衣も捨てて抱きあい、ソラー酒を互いに口移しなどする。まだの者は番を待ち、終えた者は余韻に浸りながら、次々くり広げられる目前こっかんの合歓光景に目をこらす。

そうして、王子から呼ばれるやいなや一気に花合歓はなあむがほころび、奔流ほんりゅうの渦に身を投げて喘あえぎ、初散華せんげと舞い散る。乙女の初心うつごな憧れと感性ゆえに、侍女たちは、たちまち新蕊にいしへへシッダッタを呑みこみ、悦楽えつらくの灌壺たきつぼへ真つ逆さまに落ちるのだった。

やがてマリカの番のとき、シッダッタの仰ぐばかりの積乱雲せきらんぐもは、一気に、可憐な白い花を豪雨であふれさせたのだった…。

「さあ、皆、目を覚ますのよ」

アンヴァバーシーの半ばなげやりの声に、木の葉のようにベッドから転げ落ちたのは、マリカだった。白い裾がはためいた。光沢の体毛がきらめく。

「申し訳ありません。どうか、無作法をお許しく下さい…」

土下座して床に額を押しつけ、動こうとしない。

やっと目覚めて状況を知った侍女たちに、重い緊張と暗雲が垂れこめる。だれもが、昨夜からの乱痴気騒ぎを胸に、深い後悔とお咎めの不安に襲われるが、さて、どうしようもない。

重厚の沈黙が横たわる。

「覚えていない、つてことにすれば、どうかしら…」

誰かが、荒野から一匹のイナゴの飛び立つように呟く。

「それがいいわ。お酒に酔って記憶を失ったのよ、わたしたち…」

「近ごろ、沈みがちの王子さまを元気づけようと、ただ、お役目を果たしただけだった。わたしたち。そうだったわよね…」

イナゴは、黒い群れとなって次第に空へ舞いあがり始める。

「いいわね、皆。わたしたち、そういうことだったのよ…」

アンヴァパーシーが、傘蓋係、私子係の侍女たちにも目くばせをする。八つの黒い瞳がそつと伏せられる。

考えてみると、昨夜からの出来事は、夢そのもの、憧れそのもので、誰も、シッターとの間に玉宝の輝きに似た絆を感じ、

ここ、寝室からは、一步も立ち去りがたい思っている。だが、お咎めが不安で、そうした不謹慎は、口の端にも乗せられない。そこへ、侍女同士の嫉妬と競争心も手伝い、個人としてのよろこびの感情を示すのは、いつそう抑えられ、話題は、暗い方へとつき進む。

「わたしたちより、シーター様が、怪しいのじゃないかしら」

また、誰かが呟く。

「そうだわ。王子さまのお姿が消えたとき、真つ先に、お独りで飛び出されたシーター様のその後の行動を、誰も、知らない」

「昨夜、王子さまは『シーターなら、とつくに部屋に戻った。自分は、最上階で、夜風に吹かれていた』とおっしゃったけれど、あの

王子さまが、そのようなこと、お許しなさるかしら…」

「お二人きりだったかもしれない…」

アンヴァパーシーは、空ろにそう呟き、瓜二つでありながら、

シッターの関心が、常にシーターにあると思いつめたことを辛く思いだす。

「そうだわ。きっと、お二人きりだったのよ」

アンヴァパーシーが悔しそうに、少し大きく叫ぶ。

「そのとき、何が起こったか、誰も、知らない」

再び、一匹のイナゴが羽根を広げ、別方向へ飛ぶのを、傘蓋係の侍女がじつと見つめる。

集団心理が巻き起こした乱痴気騒ぎの責任の重さに耐えかねたのか、イナゴの大群は、逃避の風に乗って、思いもかけない方向へ黒い影を旋回させはじめていた。



その朝、シッターは、侍女たちの眠る寢室をこっそり抜け出すと、すぐさま、ランガラ賢者を訪れる。

シッターとの関係には触れず、前夜からの一切をありのまま告白し、侍女たちの顔を見たくないから、旅に出たいと申し出た。

即座に、ランガラ賢者は否定する。

「それは、国法レベルの問題ではありません。つまり、王子は法律上の悪事を働いたわけではないのです。それなのに、悪事から逃れるような行動をなさってはなりません。その懺悔は、王子個人の良識にすぎません。リーダーが個人的な価値観で動く、政治に混乱を招きかねません。」

酒のうへの戯れと鷹揚に構え、それぞれ侍女たちの面子を保つてやる方が、よく治まるものです。

大王になろうとする者は、些細なことで動いてはならないのです。泰然とした不動の、表の姿を見せることこそ肝要です。大王が罪を犯して懺悔する姿など滑稽です。大王が、裏の姿を見せることなど、決してあつてはならないのです。」

シッターは、師の説くところをその通りだと思う。

だが、自分が許せなかった。シッターと純愛を結んだ同じベッド

で、酒のうえとはいえ、侍女たちに次々と乱交した自分が赦せないのだった。

それに、シッターが、もう二度と、肉体を許さないだろうことを思えば、寂しさを紛らそうと、再び、同じ蛮行に走るのではないかと不安でならなかった。

「師の仰せは、その通りと 생각합니다。しかし、わたくしは、大王がダルマ（法）に則った政を行おうとするなら、まず、大王自身が、人間としてダルマに則っていなければならないと思います。次の旅は、悪事を懺悔する旅でなく、いながらにして悪事を超える旅にしたいと 思います……」

ランガラ賢者が、何度異論を唱えても、王子は、主張を変えようとしなかった。

素直な性格なのに、あえて師のことばを呑もうとしない王子を見、ランガラ賢者は、別の動機があるにちがいないと直観する。

「賢明な王子が、あえておっしゃるなら、反対はしません。侍女の扱いなどあとの対処は、私とシッターに任せ、ご随意になさってください……。王のご許可は、責任をもってわたくしがいただきます。」

と約束し、雨季にかかわらず、あえて旅立つという王子に、師は、前回の旅での急成長を見、頼もしいかぎりと感じている。

決断力にすぐれたランガラ賢者は、早速、シッターに旅の諸

注意を与える。

「急の旅立ちでは、準備が整わないので、まず少人数で出発されるのがよろしいでしょう。後続の部隊は追って送りましょう。」

牛二十頭、兵士三十名くらいを隊商と装って隊長をつけ、毎日、兵士二人を当番で、糞掃衣ふんぞうえに頭陀袋ずだぶくろ、裸足姿はだしとさせるのです。先の旅で、王子の糞掃衣が近隣の国々の話題をさらったので、万一の災いを避ける偽装工作です。

毎日、かならず斥候せうこうを出し、行く先々の部落を探らせ、雨季は危険ですから、野営を避けて部落の長者に宿を借り、道案内を乞うのです。雨季は、また、病災の情報にも細心の注意が欠かせません。長者のまえでは、王子はあくまで糞掃衣の修行者です。あえて、名は名乗らないほうがよいでしょう。隊商の責任者は、隊長であるという偽装工作を、あくまで貫くのです。

兵士に戦わせてなりません。剣を抜けば剣を呼び、結局は、大部隊でも不足します。三十名の兵士は、戦わないための備えです。

雨季の病災を避けるには元を正すことが肝要です。口に入れるものは、持参の水、食料以外を避け、毎日、持参の水で身体を拭くのです。水・食料・体力・兵力がなくなれば、かならずその部落の長者から購入してください。それが困難になれば、帰国の時機と判断され、かならず帰途についてください……」

大人数で雨季の旅に出るなど、言語道断ごんごうだんたんというべきなのに、気後れしたようすもなく、沈着な表情で耳を傾ける王子を見ながら、師は、シッダッタに大王の片鱗へんりんを感じている。



王子の乱行は、その朝、ラインガラ賢者からスッドーダナ王に告げられる。師の制止も聞かず、シッダッタが逃げるように、雨季の旅に出たい意向なので、ご裁可さいかをいただきたいと申し出る。

また、乱行のお膳立ては、近ごろ王子に元気がないのを心配した侍女たちの善意が少し脱線したもので、侍従頭のシーターは、まったくあずかり知らなかった。しかし、監督不行届きだったと反省し、沙汰を待っている、とも報告された。

王子と若い侍女たちの一夜の馬鹿騒ぎを聞かされ、スッドーダナ王は、微笑んだ。

生後間もなく生母を失った不憫ふびんさもあり、母の愛を不足させまいと、女ばかりの深窓で育てたシッダッタからは、「乱交」など想像すらできなかつたし、そのようなエネルギーがどこに眠っていたのかと、舌を巻いた。まして、生来、慎重で思慮深く、瞑想を好む知的な性格からは、そんな艶事えんじなど、ありえないことと想ってきたもの

である。

これでいよいよシツタツタも大人の仲間入りだと、むしろ父王の目には、頼もしいかぎりと映ったのだった。

そんな急成長には、たった二カ月とはいえ、諸国歴訪の成果が大きかったと、ランガラ賢者の教育法が高く評価された。

「王として功德を積むのは、バラモンへの貢物だけでなく、まず、自らがダルマに従えと教える、そなたの実践的な新しい教育のお陰だ。厚く礼をいいたい……」

報告に参上したランガラ賢者は、かえって恐縮する。

もちろん、雨季だけに、今回の出立が心配ないわけではないのだが、ランガラ賢者が、精鋭の近衛部隊と隊長をつけて護衛に当たらせるといので、スッドーダナ王としては、むしろ、王子のいっその成長を期待するのだった。

ただ、侍女たちの好意をどう評価するかの話題のとき、一夜の不謹慎を詫び、沙汰を待っていると聞き、王は、むしろ褒美をつかわしてはどうかと提案する。

しかし、ランガラ賢者は、いかに善意であれ、侍従頭の許可なしでは組織を乱す行為といわざるをえず、今後あってはならないが、今回にかぎり、王の寛大なお心によってお咎めなしとし、たまたま、王子は二度目の諸国歴訪の旅に出たが、帰国後にはこのたびの志を

忘れず、また、よく仕えてほしい、と伝えることにしてはいかがかと、奏上する。

不安いっぱい沙汰を待っていた侍女たちは躍りあがった。お咎めがないばかりか、善意が認められたのだと、一気に、彼女たちの心に閨房の近衛師団といった強い忠誠心が芽生える。

そうして、乙女たちは、初花を献上したのが王子だったという喜びと誇りを、そと、心の奥深くに秘蔵するのだった。

その後、侍従頭シーターには、一応のけじめとして、ランガラ賢者から、王の口頭訓戒のことが伝えられた。

直後、スッドーダナ王は、シーターを呼び、直々に、王子をよくここまで遅く育ててくれたと、労をねぎらう。

シーターは、王の言葉の前にひれ伏し、顔をあげることもできないでいた。

ただ、シーターには、今回の措置で危惧するところがあった。

各方面への配慮によって、誰もが、お咎めを免れ、いっそう士気が高まったのはよかったが、反面、乱痴気騒ぎを梃子に、王子の精神を、いっそう厳しく鍛えあげることには失敗したのではないかと危ぶむのである。

仮の話、乱痴気騒ぎの侍女たち全員が処刑されたなら、王子に、何か、不退転の決意といったものが生まれたにちがいないと思われ

る。今回、程度の差はあっても、そういう効果を狙ってもよかつたのでないか……。王子には、ただ甘いだけの結果となつたのではないかと思われる。

このうへは、早期に、自分自身の幕引きを華々しくやり、王子に、強いインパクトを与えねばと、シーターは決意するのだった。

二 雨季、北への旅

ある日の正午すぎ、スコールが一段落の晴れ間に、昼休みもとらず、北の城門を出て行く一行があつた。

二人は糞掃衣ふんそうえに頭陀袋ずた、裸足姿はだしすがた。あと三人は隊商姿で、牛一頭に大きい水囊みづかめ二個、食料袋数個を担わせ、警護を固めていた。

隊商姿のシツダッタが、兵士たちと旅立つのだった。

一行の前方には、暗雲が払われたヒマラヤの嶺々が輝き、その頭ひとつ上、秀嶺アンナプルナすびが聳え立つ。

見渡すかぎり平原のなか、一本の街道が、秀嶺に導かれるように、北へ伸びる。朝からの豪雨で、低地はもう冠水し、あちらこちらに

巨大な湖が広がる。そんな湖面を、街道は、所々、水に浸かりながら一筋の点線を見せて渡つていく。

前回は見聞を広げる旅だった。今回は逃避とうひの旅とも呼ぼうか。

乱痴気騒らんちきさわぎの侍女たちも遠ざけたいし、その原因であるシーターへの思慕からも逃げたかつた。何よりも、意志薄弱いしはくじやくで決断力の乏しい城中の自分自身からも抜け出したいのだった……。

そんな思いで飛び出した旅であるが、二日経って後続部隊も合流し、三、四日も過ぎると、シツダッタの目が輝きはじめる。

毎日、信じられないほどに雨が降り、旅行く身は困難だけれど、大地が、見わたすかぎり、新しい生命に満ち満ちるのである。

前回は、灼熱しゃくねつの太陽が照りつけて、牛馬糞ごうばふんの埃ほこが舞いあがつた。焼けた鉄板の道を、肉刺まめで痛む足を引きずつた。道端のそこかしこに、行き倒れた修行者の屍かばね、動物の白骨が転がっていた。

いま、その道は水を含んで黒い沃土よくととかわり、路傍のやわらかな若草は、運ぶ足を慰める。豪雨は、屍も白骨も流しさり、あとに、木々が緑豊かに芽を吹いた。

村人は、夜明けとともに起きだして野に急ぎ、牛に犁すきを引かせて次々と田を耕して稲を植えわたす。一時、豪雨が止み、晴れ間がのぞくと、水田は天空を映し、どこまでも青い水面を広げる。

乾季、ただ、大石小石の転がる石の砂漠だった川瀬には、あふれ

る濁流が渦を巻く。豪雨が、一気に大地を洗い、木片や大木、人や動物の遺骸など、地表の堆積物が怒涛となつて流れる。雨季の河では、濁流も動植物も人間も、格別の区分がないかと思われる…。シッダッタの心からは、いつか、一夜の乱痴気騒ぎなど消え失せていた。シーターへの思慕は変わらないが、何か、緊急のことでもいいように思われた。

旅に出てからは、雨季の自然からの刺激が強くて、城中の出来事など、遠い過去の一点にすぎないように見え出していた。

代わりに、この季節、人々はどのように生き、何を考えているのだろうか、新たな関心が芽生えはじめる。もちまへの好奇心が頭をもたげた。

早速、隊長に相談すると、彼がいうには、いま、ひとつの森を通りつつあり、牛と兵士は、幸い、この森で豪雨をしのぎ待機させることができる。王子は、修行者の姿を借り、屈強な兵士一人に糞掃衣を着せて護衛とし、二人で近くの村へ托鉢に出てはどうか。このあたりは、まだシャカ国領内なので安全だという。

記憶をたどると、ここは、前回の旅で、はじめて隊商と落合い、野猿にサツマイモをせしめられた森のあたりであるうか。

それにしても、出水箇所では筏を組み、ときには迂回するうえ、牛も、無理させずによく休ませるので、乾季とは比較にならないほ

ど、移動に時間を要する。

夕暮れ近いが、早速、急いで着替えて森を出ると、密林がまばらな灌木へと変わり、その向こうに水田が広がる。しばらく行くと、小高い丘に三、四十戸ばかりの集落が、稲田を見下ろしていた。

水田に一番近い、みすぼらしい一軒のわら葺屋を訪ねた。豪雨が続けはすぐにも水浸しだろうと思われる低い位置に、似たような伏せ屋が群がっている。

村に一歩足を入れると、家々の前はぬかるみだった。

豚とアヒルが放し飼いされ、糞と尿の異臭が立ちこめる。乾季の旅の経験では、子どもは家の近くで用をたすので、人糞の臭いも少なくなりにちがいない。家畜の横では、素っ裸の女の子が泥にまみれて遊んでいる。口元には、真っ黒に蠅が群がる。

臭いだけで嘔吐しそうなのに、豚やアヒル、子どもの糞便を混ぜ返したぬかるみは、裸足を入れるだけで、全身、鳥肌が立つ。

歪んだ板戸を叩くと、人の良さそうな白髭の老人が顔を出す。

「おお、お若い方、おまえさまも、シッダッタ王子さまに、あやかりたいのだな…」

と、王子の糞掃衣が有名になってからは、最近、ヒマラヤに向かう少年修行者の顔が増えたと笑つた。

雨をしのぐのに、一夜、軒を貸してほしいというと、

「尊いお方が、伏せ屋をお訪ねくださることなど滅多にない。家に入ってくださいるだけで悪霊も退散いたしましょう。軒先などおっしゃらず、さあ、どうぞ中へ、中へ……」

中といつても、大人子供あわせて十人くらいの家族が、やっと入れる空間と、向かい合わせに、同じくらいの広さで牛一頭の部屋があるにすぎなかった。狭い部屋は煎じつめたように猛烈な牛の糞便の異臭、人間の体臭が充満し、鼻からは息も吸えない。シッダッタは思わず嘔吐しそうになったが、辛うじてこらえた。

好意はありがたいが、この臭い攻めなら、軒先の方がよほど清々しく、開放的にちがいはなかった。

糞掃衣姿を見て、家族の人たちが一斉に両手をあわせ、最敬礼をする。シッダッタに緊張が走る。

家とはいえ、板の上にわらむしろを敷いただけの部屋一つ、城中のシッダッタのベッドほどの広さもない。上がるときは、片隅の水甕で裸足の泥を落とし、わら屑で拭うのだった。

シッダッタが、早速、バラモンの教えが説く五大供儀の一つ、鬼霊供儀の経文をうやうやしく唱え、やがて終わって、

「ただいまは、生きた人間、死んで霊となった人間（鬼霊）、そして生きとし生けるものが、争つことなく共に暮らし、恵みを分かちあうことを誓い、あわせ、五穀豊穡、安穏息災を祈らせていただきま

した。皆さん方も、どうぞ、そのようにお勤めください」というと、老人が涙を浮かべ、

「尊いお方、ありがとございます。朝起きるとかならず、家族の平穏無事と豊作を願い、外に出てお日様の方位、次に、村の大樹の方角に手をあわせます。またこの季節は、下痢・高熱の悪霊が暴れます。でも、もう安心です。尊いお方の経文なら、これで悪魔も寄りつきますまい」

そのあと、貧しくて何も無いが、せめてもの供養に、家族が夕食とした豆スープを差しあげたいという。

シッダッタが、ラインガフ賢者の「病魔のこの季節は元から正せ」の注意を守り、「修行者は鉢鉢で得た昼食を一食しかとりません」と丁重に断ると、老人は哀しそうな笑みを浮かべた。



その夕べ老人は口が軽かった。

「お国が栄えるほど、農民の暮らしは苦しくなるばかりです」と、暗い声で話しはじめ。闇に、顔の深い皺が浮かぶ。

話では、このあたりの村は、祖父の時代、つまり約百年まえまでは自給自足の村だったらしい。物々交換でのんびりと暮らしていた

という。

「ところが、ご城下に人が増えると、農作物の売買がはじまったのです。それで、村のようすが一変したのです」

せつせと働いた者、うまく立ちまわった者などが、農作物をより多く手に入れて城下へ売りに行き、金持ちになる。彼らは財力にものをいわせ、病災や天災、借金などで困窮（こんきゆう）のとき、または無知につけこみ、次々と土地を買い占める。農地を失ったものは、賃金などで働くほか、生きていく道が閉ざされてしまった。

「そうして大成功なされたのが、村長さまです。お国は、村長さまから、ごつそり税をもつていきなされる。その代わりに、村のまとめを任せ、収入を増やしやすしい便宜をお与えなされる。そのしわ寄せが農民に来るのです。わたくしなど、一家がようやく食べられる田畑を持っていますが、税に苦しめられています。」

昔から、『昼は国土の難、夜は盗賊の難』と申しまして、庶民は、昼は集税人、夜は盗賊の暴力に悩まされたものです」

それでも、少しずつ農器具や農作業の改良が進み、収穫も徐々に増えてきたが、めざましい生活の向上はないという。

「村のほとんどはそんな農民で、環境のよくないこのあたりで伏せ屋に住まいしております。前世のお勤めが悪かったので、ま、自業自得（じごうじとく）といったところですかね…」

シッターは、見わたすかぎり広がる稲田の美しい光景を心に描きながら、目前の、灯火（ともしび）さえない伏せ屋の暮らしぶりを思う。

老人は、自業自得（じごうじとく）といいながら、狭い間にひしめく家人の顔を、ひとわたり見まわし、ふと、口をつぐんだ。

老いた妻、息子二人とその妻たち、それぞれの夫婦に子供が二人ずつ、あわせて九人の顔が目を光らせ、家長の話に耳を傾けていた。愚痴（ぐち）めいた話を通じ、おのれの運命を納得しようとするように…。

「いくら貧しくとも、元気なうちはよろしい。老いて働けなくなれば、口減らしに家を出るのが、村の慣わしです。若い者に対する、最後の、せめてもの功德（く徳）です…」

近くには、「菩提樹（ぼだいじゆ）の聖地」という場所があり、そこに赴き、ひたすら死を待つという。生前の功德（く徳）によって今生（うぶな）より少しでもよい境涯（きやうがい）に生まれ変わることを、ひたすら願ひながら…。

「その点、前世で徳を積まれたバラモン様はお幸せです…」

最近、カピラ城下から隣村に、在郷地主としてバラモン一家が移り住んできたが、豊かで、もちろん口減らしの必要などないと羨ましいがって見える。

村の広大な農地が、重要な祭儀を滞りなく司祭したバラモンへ、礼として布施されたという。こつした土地は優遇されて無税なばかりか、そのバラモンが、近隣の村長や富農の祭儀までも受け持つこ

とになっているという。

暗闇が、狭苦しい空間を埋めつくすころ、家族と客二人が、折り重なるように身体を横たえる。

シッダッタの隣に横たわった老人が、小声で、

「お越しいただき、思いもかけず幸せが飛びこんだ気持ちでございます。ありがとうございます。差しあげるものは何もございませんが、せめて、あなたさまの身ひとつ、雨露をしのぐだけのこの狭い板間をお布施と思し召し、どうぞ、こゆっくりお休みください。」

この爺も、少しは、功德を積んだことになりましたよ。」

「おやすみなさい。未永くご一家のお幸せをお祈りいたしてます」だが、シッダッタは、充滿する異臭でなかなか寝つかれない。それにしても、牛に劣らず人間も、ここまで臭いのかと不思議だった。やがて疲れも手伝って、いつかうとうとしたかと思うと、はやくも隣で老人の声がある。

「おい、時間だよ」

その声で戸口近くに身を横たえた老妻と嫁二人が起きあがる。牛も目覚めて動くのか、鈍く間延びした音が聞こえる。牛小屋の隙間から、朝がわずかに白むるのが見えた。

板戸が小さく軋んで、足音もなく人の出て行く気配があった。興味をもったシッダッタが起きだそうすると、老人が、手を握って

制し、

「奴っこさんらは、森へ行く…」

家々の女たちは、その時刻になると、水を入れた小さな甕をもつて森へ入り、朝一番、用を足すという。次に男性が続き、最後に、子供らが家の横や道端で済ませる。放し飼いの豚は、子どもの暖かいやつを待ち、落ちるが早いから、すぐに食べてしまう。そんな話も聞いたことがあった…。

納得して夜明けを待つと、今度は、ゴロゴロと軒で何か音がする。

何だろうと起きだして行くと、むしろを敷いて坐り、嫁二人が、代わるがわる碾臼をまわしている。穀物をひくのだが、これが朝一番の女の仕事だという。

それから、約五〇〇メートル先、村長の家の前の共同井戸まで水を頭に水汲みに行く。次は、灌木地帯への柴拾い…。

朝、まだ暗いうちに、女たちはそのように雑多な家事を済ませ、やがて用を足し終えた男たちが戻ると、彼らと一緒に農作業に出かけるというのだった。

シッダッタといっしょに起きだした衛兵の糞掃衣が近づくと、白ひきの女たちは、身を固くして口をつぐんだ。だが、シッダッタには、まだ少年と心を許すらしく、こと細かな質問にも気さくに答えてくれるのだった。

大家族で住む場合、女は、家長や大人の男性に、みだりに顔を見せたり話しかけたりしないのが、最高の敬意の表現だという。



朝早く彼らが農作業に出るのを見送ると、シッダッタは、従者をつれ、村長の家に托鉢に向かう。

伏せ屋の密集する低地から五〇〇メートルほど登ると、小高い台地が開け、見晴らしがよくなる。自然の城砦といえようか。

丘のうえに高い塀をめぐらした白壁の屋敷があつた。

盗賊を避けるらしく、頑丈な門構えで、化粧レンガ造りの城という感じである。高い塀のうえ高く、緑の大木が生い茂る。

門を入つていくと、道の両脇に作業場らしい建物が軒をつらね、早朝にかかわらず、使用人たちが群がって働いている。屋敷内を多くの人が出入りし、作業や運搬の騒音が響く。

カピラ城へ納める米、麦、大豆、ゴマ類の脱穀、製粉など、一切の加工納入を一手引き受けしているという。

ほかに農機具も製作し、近隣の富農、中農など農業労働者を多数かかえる農家へ手広く販売しているというのだった。

シッダッタは少し困惑する。托鉢を受けるにしても、どこに立て

ばいものやら、見当もつかない。城には慣れているので、大きい建物に怖じけるわけではないが、この建物は勝手がわかりづらい。

「長者様は、どこにいらつしやいますか？」

と、屋敷内を行き交う人に尋ねても相手にしてくれない。迷惑そうにその場から立ち去つてしまつ。

仕方なく奥へと進んで行く。普通なら、無断侵入者として怪しまれかねないのだが、糞掃衣姿であるから、通行証を背中に貼つたも同然であつた。

町一つ歩いたほど探し求めると、大きな建物のテラスで、恰幅のよい老人が椅子に坐り、使用人の働くようすを監視していた。

ふたりの糞掃衣姿が近づくと、不機嫌な表情をあからさまにする。

「またまた、シッダッタさまのお出ましかい」

というなり、立ちあがると、テラスの一角に用意した箱から、面倒そうに包み二個を、両手にぶら下げて来た。そうして、ふたりの鉢にばいと投げ入れた。

蒸した雑穀を袋に詰め、召使などに与える食事として準備しているのだろうか。振る舞いは、早く立ち去れといわんばかりであつた。

布施を投げ与えると、くるりと一回転、シッダッタには、顔ではなくて巨大な尻を向け、先ほどの椅子に向かいながら、

「シッタッタ王子様にも困ったものだ。糞掃衣などで旅をなさるから、真似する輩やかいが増えて困る。まったく亡国ぼくこくの兆候ちせうしうだ」

糞掃衣の二人が、椅子の前に進み出、ていねいに礼をする。

その頭から水を浴びせるように、

「いま緊急なのは、糞掃衣ではない。軍備だ。糞掃衣を着て下々のようすなど知っても糞くその役にも立たぬ。まず強い軍隊を育てることだ。軍事力を背景にもっと農地を拡大して、特産の米、豆を増産し、交易を盛んにせねばならない。そうすれば、武器や農機具など、わが国特産の鉄製品市場もさらに拡大する。糞掃衣など一万枚着ても、国力など少しの増強にもならない。亡国の行為と知るべきだ」

シャカ国の裕福でエネルギーシユな支配階級は、このように考えるのかと、シッタッタは新鮮な気持ちで熱心に聞き入る。

「どうだ。むさ苦しい衣など脱ぎ捨て、働いてみる気持ちはないかね。もっとも、こちらは見るからに強そうで、使いがあろうだが、そちらは華奢かしゃで繊細で、水も運べそうにない。お前さんなど、こちらから願い下げだがね」

彼は、もう糞掃衣には目もくれず、椅子に坐るとすぐ使用人の監視に移ってしまう。

シッタッタは、もと来た道を、一つの町ほども歩いて戻りながら、両側で忙しく立ち働く人々の姿やざわめきを見聞きし、これが繁栄

というものであるうかと、ふと、立ち止まる。



シッタッタが、雨季の旅に出てまもなく、シャカ国では、大事件がまき起こっていた。

先にも語られたように、北からシャカ国、コーサラ王国、マガダ王国とならぶ三国の関係はシャカ国が一番弱小で、コーサラ王国はシャカ国を朝貢させて、北からマガダ王国に対し、連合の脅威きょういを見せつけていた。一方、マガダ王国は、何かとシャカ国を支援し、コーサラ王国を挟撃きやくげきするぞと威嚇いかくするのだった。

シャカ国は、この強大な二国に、政治の道具としていいようにあしらわれているありさまだった。

シャカ国の城内には、当然、この両大国の諜報ちやうほうのネットワークが張り巡らされ、一見、何の値打ちもなさそうな侍女たちの噂話さえ、三国間の力のバランスをつき崩す武器に利用されるのだった。

とくに、マガダ王国は、土地柄、鉄資源や農作物が豊富なおうえに、近年、先進・闊達かつたつな政策が功を奏して、商工業が大いに栄え、首都ラージャグリハ（王舎城おうしゃじょう）は、新興都市ながら、北インド経済の

中心の地となりつつあり、一儲けたくらむ野心家ばかりか、政治や文化に関心の深い人々まで、活躍と研鑽の場を求めて諸国から集つたのだつた。

コーサラ王国は、シュラーヴァステイー（舎衛城）を首都とする伝統国で、後に、二大叙事詩として編纂される吟遊詩『ラーマヤナ』の英雄ラーマ王以来繁栄を誇つたが、次第に、マガダの隆盛の後塵を押しつつあつた。

折しも、シャカ国では、王子の教育係ランガラ賢者を中心に、十年、二十年先をにらんで、北へ版図を広げようとする動きがあり、最近、シッダッタ王子が、幼少ながら友好の諸国歴訪に出たところ、各国・各部族から大歓迎の成果だつたといふので、コーサラ王国では、あらためて北の小国をあなどつてはならないと警戒を強めていたのだつた。

当時、シャカ国では、先取的なバラモンや商人たちが、早くからマガダ諸都市のめざましい発展に刺激され、外国貿易の隊商を組んで、米・豆を中心とした自国の農作物や鉄製農機具の輸出に励み、財を貯えつつあつた。彼らは、旧秩序から脱して版図拡大をはかるなど、新シャカ国への脱皮を待望んでいた。先進層を中心に国力が膨張の機運にあるのだつた。

そんな矢先、運わるく、コーサラ王国の諜報ネットに、「王子と

侍従頭シーターが深い関係にあると、城中で侍女たちが噂している」という情報がひつかつた。一見なんでもない情報のように見えるのに、それが、政治の凶器と化けて内部攪乱が画されることになる。

早速、例によつてコーサラ王国からスッドーダナ王のもとへ、ことさらに威嚇的な使者が乗り込んで来た。

王子と侍従頭が特別の関係に陥れば、侍従頭は自ら毒をあおらなければならぬ、というシャカ国伝来の掟を知つての使者派遣であることは、もちろんだつた。

王は、一行を丁重にもてなし、後刻、コーサラ国大王のもとに使者をつかわすと約束する。貢物の約束である。

コーサラ王国の使者は、城から立ち去るとき、「かくなる事実が発覚したからは、侍従頭が毒をあおるといふのもはやいたしかたありませんまい……」

と、王を頭から噛みでもするように威嚇するのだつた。

スッドーダナ王は、使者を見送つた後、考え込んでしまふ。

今回、王子の乱行は、委細承知だつたが、コーサラの使者が「王子とシーターの関係」は、まさに、寝耳に水であつた。

王は、早速、ランガラ賢者を呼んで深刻に耳打ちをする。

シーターが、王子の成長、とりわけ精神の成長にとつて、侍従頭という役柄には納まらないほどに影響が大きいことを、王は、知り

ぬいていたからだった。

ラインガラ賢者も、その思いに変わるところはなく、現場の感覚では、王以上かもしれない。

王子と侍従頭にそんな事実があつたかどうかの真相究明はさておき、万一にも、シーターを失う事態になれば、王子の教育が挫折するばかりか、シッター自身、人生の路頭に迷うことは、王も師も、よくわかつているし、最大の恐怖であつた。シャカ国の後継が絶えることを意味する一大事ともいえた。

どうして城中の噂がコーサラ王国へ流れるのか、その真相究明の前に、どうすればシーターを失わないですむか、そちらの方が国家的な一大関心事といえるのだつた。

「少しお時間をください。真相を解明いたします。シーターへのご沙汰は、その後にお願ひします。ただ、解明に、少し王のお名前を拝借いたしますが、ご承知おきください」

ラインガラ賢者が顔色一つ変えず奏上する。

「頼んだぞ。しかし、シーターだけは殺したくないものだが…」

ラインガラ賢者はすぐに動いた。

早速、「閨房の近衛師団」の侍女たちの実家へ、特上のベナレス産の絹と高価な沈香を携え、王からの使者が遣わされる。

「この度、ご息女におかれては、お側仕えに格別のご功績があり、

王の覚えがめでたい。ついては、王から、褒美をくだされたのち、十日間、慰労の休暇が与えられるので、貴家では、功績をたたえてよく労をねぎらつてほしい。雨季のことゆえ、護衛をつけてご息女をお届けし、また、お迎えにあがる。なお、このことは、貴家だけの内密事にしていただきたい…」

使者が遣わされたのは、子女を城中に出仕させている名家、名門、つまり城下の高級官僚宅、村の長者、在郷地主のバラモン屋敷などであつた。

ラーガラの秘策は、使者を遣わすと同時に、密かに屋敷内に諜報員を潜ませ、怪しい動きがないかも見張らせるのである。

いよいよ休暇のまえになると、侍女たちがラインガラ賢者のもとに呼ばれ、王子への忠誠に報いる王からの褒美だと、牛の目玉ほどもあるトルコ石をはめた黄金の首飾りが授与される。

「この褒章を身につけ、ゆっくりと手柄を味わつてほしい」

ラインガラ賢者は、一人ひとりの首に、重い黄金の輪をかけてやり、帰途につかせた。ただ、護衛としてつき従つたのは、最精鋭の諜報員であつた。到着すると、早速、屋敷の主に、丁寧に休暇の意味が申し伝えられる。

そうしておき、再び、同じ顔ぶれの護衛たちが迎えに赴く。そのとき、休暇中、屋敷内で侍女との間にどんな会話が行われたか、何

気ない素振りで確認する。どの屋敷でも、王からの褒章で有頂天になっているので、話は筒抜けとなっている。

それらをつなぎあわせ、一夜の乱痴気騒ぎのようすに見当をつけるのである。若い女性であるから、集団での肉体関係の話などはうち明けないだろうが、事件の大きな流れの推測に支障はない。

一方、怪しい動きがないかを見張った各屋敷の諜報員の情報を、そこへ重ねあわせ、乱交騒ぎの顛末やコーサラ王国と密通がないかを浮かびあがらせるというのが、今回の作戦だった。

半月を経ないで、ラインガラ賢者の情報解析は終わっていた。

予測した通り、事件の主導者はアンヴァバーシーであった。

シーターに代わって、身辺の世話の中心に抜擢されたが、王子の寵愛をなかなかえられないと思ひ込み、関心を向けさせたい一心で、王子への特別慰勞を企画したのだった。

しかし、彼女も含め、侍女たちのなかには、誰ひとりとして、王子とシーターの重大な関係を直接見た者はないし、そういう事実を聞いたこともないのだった。

ただ、乱痴気騒ぎの朝、お咎めを逃れたい一心でだれかが口走った「むしろ王子とシーター様が怪しいわ」という一言が、いつか、まことしやかに伝わったばかりか、アンヴァバーシーのそれを肯定するような発言が、噂話にいつそう真実味を帯びさせる結果となっ

たと結論づけられた。

一方、コーサラ王国への怪しい動きは、諜報員を忍ばせた各屋敷からは全然認められず、むしろ、乱痴気騒ぎの朝当番の傘蓋係、扨子係が怪しいという結論になり、すぐさま、身辺を洗う作業に手が打たれる。

早速、コーサラ王国の威嚇情報はデマにすぎないと、ラインガラ賢者から王に報告がなされた。

シーターを毒殺せねばならない事実のなかったことは、国家的な安堵であったばかりでなく、王自身、幼少のとき、侍従頭を失った苦い経験をもつだけに、ラインガラ賢者の報告に踊りあがった。

不

シッダッタと従者は、一旦森に帰って糞掃衣を脱ぐ。

しかし、王子は、カピラ城穀類ご用達村長の「糞掃衣無用論」が気がかりでならず、翌日、別の隣村のバラモンを訪問し、いま一度、意見を聞きたいと隊長に願ひ出る。

この旅は、いわばシッダッタの気ままが発端で、定まった目的があるわけではないから、もちろん、隊長は了解する。

でも、さすがに、ラインガラ賢者の薰陶を受けた隊長だけに、そ

の村長の話を聞くと、足下に、その通りだと断言し、シッダッタにその考えを重用するよう建言する。

出立しようとする、朝からの豪雨が止まないもので、半日遅れた。北インドでは、ヒマラヤを源流としてガンジスに注ぐ支流が何本も南北に走り、やがてガンジス平原へくだと、ガンジス河となつて東へ流れる。だから、南北の移動は比較的容易だが、東西のそれは、橋もなくきわめて困難である。

雨季ともなれば、その支流が氾濫するばかりでなく、平地にも水が溜まり、東西の移動は絶望的である。今回、隣村のパラモンの家に行くとは、その絶望への挑戦でもあった。

幸い、この地方出身の兵士がいたので、彼に糞掃衣を着せて道案内とした。今回の移動は長引くかもしれないので、牛一頭に水甕と食料袋をくくりつける。さらに一頭に、筏の材料を曳かせ、兵士二人を御者とする。森で切りとつた大量の蔦、何本もの木材、応急加工の櫂などが筏の材料で、必要なとき、現地を組み立てる。

小隊は、森を出てから、水浸しで土など見えない道を伝つて、膝まで浸かりながら、小高い窪木地帯に着く。窪木の陸をくだつて水田をいくつか過ぎると、向こうに巨大な湖があった。低い水田が冠水したものらしく、あちらこちらに、村の境界を示すらしい大木が幹の根元まで浸かり、銀色の水面に深い影を落としている。やはり膝

に水を受けて行進を続ける。だが、いかに水浸しても、その土地の高みが島のように水面近くに背を見せているので、それを頼りに島伝いに前進できる。島が頼りの行進だった。

しかし、やがて川の岸に近づいたらしく、目前の水面が、大きな渦を巻きながら早い濁流を見せはじめた。手前に、幹半分まで浸かる大木が数本並ぶが、そこから向こうが、河原であるらしい。

いままで、島が頼りだった道が、急に深くなって腰まで浸かり、もう進めない。牛も歩行が困難となった。

そこで、牛に運ばせた木材と蔦で筏を組み、水甕や食料袋を積みかえ、二頭の牛もこれにつなぐ。本隊の移動では、何度か、隊長が指揮するのは見たが、シッダッタ自身が行うのは初めてだった。

竿をさして漕ぎ出すと、最初、歩いてきた牛が、やがて泳ぎはじめる。川の堤であろう、大木の幹が半分浸かつて並ぶあたりまでくると、流れも激しくなり、四人が全力で櫂を操り、ようやく流れに逆らう。はるかかなたの対岸らしい大木の並木は幹がほとんど沈んでいる。そこへ向かつて、四人が力をあわせ激流に抗った。牛も目を白黒させて必死で泳ぐ。

彼岸につくと、その向こうは小高い土地らしく、青々と草原が広がっていた。水田ではなかった。彼岸の向こうでは、もう筏は用を足さないで、帰途のため岸辺の菩提樹に係留しておく。

あたりには、菩提樹の古木が幾本も茂り、いかにも神秘的な雰囲気が漂っている。再び陸用に牛の荷造りを終えて、ふと気づくと、一番向こうの菩提樹が一番の太木で、その根元に、みすばらしいわら葺小屋があった。しかも、人影らしいものさえ見える。

案内兵士の推察では、どうやらその一帯、昔から樹神の宿る菩提樹の聖地と呼ばれ、あの世への入口と伝わる難所中の難所で、滅相もない所に漂着してしまったらしいという。なかでも、わら葺小屋の側の大樹は、夜叉（ヤクシャ）という名で、北インドでもっとも恐れられる樹のひとつだと蒼くなる。

そこに死者を置くと黄泉の国から祖霊が迎えにくるといい伝えられ、生きた人間は、呼吸があるまま呼ばれるのを恐れ、決して近づかないというのであった。

わら葺小屋は、祖霊を待ったためのもので、乾季には、川のはるか上に見えるという。

偶然とはいえ、不吉な土地へたどり着いたものだとな案内兵士は蒼ざめ、遅いからだの震えがとまらない。

どう説得しても兵士たちが動こうとしないので、シッダッタは、ひとりで小屋まで足を運ぶ。

少し行くと、まだ距離があるのに、そちらから死臭が漂ってきた。嘔吐しそつなのをやつとこらえる。

小屋に着くと屋根わらはくずれ落ち、老人が四人、祖霊を待っていた。生死も性も区別できないほどに痩せこけている。

足を組んで坐る一人は生きた老婆とわかる。その側に転がる三人は、一見、性別はおるか呼吸があるかさえわからない。

よく見ると、一体には、蠅の大群が群がる。シッダッタの近づくと、気配に羽音高く飛び散る。そのあとには、蛆虫が、うごめいていた。異臭はそこからだった。

シッダッタは、思わず大声で、バラモンの教えの鬼霊供儀の経文を唱えていた。

せめて水くらいを与えようと牛の待つところまで引き返す。

シッダッタが近づくと、待機の兵士たちは悪鬼の顔にでも出会ったように、一目散に逃げだした。死体を運ぶのを手伝わせようと

思ったが、遠くで身構えて戻ってこない。仕方なく、水を満たした小さな甕と小鉢を持ち、単独で小屋へ戻る。

小鉢で水を与えても、自力で飲めたのは坐った老婆だけ、傍らで横たわる二人は、唇をぬらしてやつただけである。

その後、死体を川まで運ぶ。そのまま放置して、朽ち果てさせるわけにはいかなと思う。

枯木のような両足に手をかけ、引きずるうと力を入れると、腐敗した皮が剥け、直にくるぶしの骨に達した。不気味だが、やむなく

一人で川まで曳きずり、流れに横たえさせた。ガンジスへと注ぐ激流が難なく度す。

息詰まるような死臭を放つのに、素手で移動させられるのが不思議だった。シッダッタは、自分の何かが、確実に変わりつつあるのを感じていた。

小屋に戻って老婆に声をかけて、輪廻転生の経文を唱え、

「ただいまは、来世のよき転生を願ひ、経文を唱えさせていただきますました……」

というと、老婆は涙し、力ない声で口をきく。

彼女は、口減らしのため、息子たちに頼んで三日まえ、ここへ運んでもらったという。断食して三日である。先ほどの死人は、彼女が運ばれた日、すでに亡くなっていた。ほかの横になった二人は、まだ口がきけたとき、一週間以上は飲まず食わずとっていたので、もう先は長くないだろうという。

彼女は、六十歳。十五歳で結婚して三十歳代ころまで、毎年のように出産して十五人の子をもうけ、いま生き残っているのは、三人という。七人は食べるものも乏しくて幼児期に死んだ。あと二人はレプラで、あと三人は高熱・下痢の病災で失ったという。

生き残った三人の子には、伴侶もできて孫も生まれたので、彼女の役目は、もう終わったというのだった。

食べ物をさしあげようかと聞くと、生きながらえるための糧はいらない。喉が渴くので水がほしいという。老婆には、生への執着を乗り越えた安らぎが漂うように思われた。

そうこうするうち、あたりが急に騒がしくなった。老人と子供の遺体が、次々と五体、枯れ木を組んだだけの粗末な担架に乗せられ、運びこまれた。

ただならないようすなので、わけを聞くと、隣村で、悪鬼が暴れて高熱・下痢の病災が発生し、次々と死人が出ている。いま運んだのは、その最初の犠牲者で、一日かけてやって来たという。

担架を担いできた男たちが、シッダッタの姿を見るや、読経を熱望してきたので、祖霊を待つ小屋に遺体を並べて応じてやる。

読経が終わると、彼らは、シッダッタにうやうやしく最敬礼し、次々と死体を濁流へ乗せた。

なぜ茶毘に付さないのかと聞くと、貧しくて薪が準備できない。煙になることができなければ、天へ昇れないといけないので、ここまで運び、祖霊に迎えに来てもらうことにしたというのだった。

流れ行く屍に手をあわせながらよく見ると、ここは、火葬場でもあるらしく、小屋のさらに向こうの岸边近くに、茶毘の火の跡が点々とつづいていた。

その夕方、バラモンの家を訪ねようとする、糞掃衣ふんそうえの案内兵士が、急に、いやだといいだした。

二人で訪問すれば、もし質問を受けた場合、年長の彼が答えねばならない。それには自信がないという。

どうやら、それは表むきの話で、真実はシツダッタを怖れているらしかった。黄泉よみの国の入口で死体を扱ったので、シツダッタには悪霊がとりついていて、彼にまで、招きの手が伸びてきはしないか怖がっているのだった。

それに、王子ともあるうものが死体を扱うなど、とんでもない話だった。チャンダーラなど非人間のやることで、世の中のそうした慣習を承知している者の目には、シツダッタが、不気味な魔物が、死骸に群がる秃鷹はげたか、狼の化身けしんとさえ見えたにちがいがなかった。

シツダッタ自身にそんな自覚がないのは、上流階級ゆえの無知と善意によるのかもしれない。

ともかく、兵士たちは、不浄感と気味悪さで、一定の間隔以上にはシツダッタに接近しようとしなない。

間隔を絶対に縮めない案内兵士に、無理強いしてうしろから案内させ、草原の向こうに再び広がった水田の端、遠方からでもよく見

通せる巨樹までたどり着く。その森のような木陰に一行を残すと、シツダッタは、単身、バラモンの屋敷に向かった。

ところが、水田を過ぎたあたりで、夕方のスコールに見舞われたので、一旦、巨樹まで引き返して一行とともに雨宿りし、止むのを待つて再出発したのだった。

その間、兵士三人は、シツダッタの横で蒼あおくなって震えていた。本来、不浄を被はう筈の糞掃衣ふんそうえが、兵士たちから不浄視されているのだから、彼らは、いわば、閻魔様えんまと雨宿りの格好なのだ。

やがて、バラモン屋敷に辿り着いたが、前日の長者屋敷ほどではなかった。しかし、村人の粗末なわら葺小屋に比べると、ここも、白い城と呼ぶに値する大きな建物だった。ただ、屋敷内では、使用人の立ち働く姿は少なく活気に乏しい。

集税人を数名雇っているだけで、屋敷のなかで生業を営んだりしてはいないのである。

門に立つと、老いた門番が、すぐに伝令を走らせる。そんなようすだけでも、主が、修行者に好意的であることが見てとれる。

伝令はすぐに戻ってくると、シツダッタの先に立ち、蓮池のある庭園を抜け、大きな建物の階段をあがって玄関まで案内し、立派な扉のなかに消える。

額で頭陀袋ずたの手を支え、糞掃衣ふんそうえで立つシツダッタの前に、長身の

男がゆっくりと現れる。髭をたくわえ眼光は鋭いが、温厚そうだった。

「一夜の宿をお貸ししましょう。どうぞお入りなさい」

そのことはを毅然として聞き、もの怖じもせず堂々と扉を入ってくる少年を見て、バラモンは少なからず驚く。

「雨のなか殊勝なことです。ところで、一言、お伺いしますが、あなたは、なぜ、髪を結われませんか」

客間の椅子をすすめる長身から、静かな瀧のように質問が落ちてきた。

このバラモンは、ラインガラ賢者のような格式ばらないやり方は、少なくとも贅同しないにちがいないと思われた。生真面目で、保守的なのである。

「長者さまは、何をもって、ご自分をバラモンと称せられますか」

天井に近い顔が、不思議そうに答える。

「神との仲立ちをもって、バラモンと称します」

「わたくしは、ダルマとの一体化をもって修行者と心得ます」

一瞬、天井の聲が答えに窮し、やがて静かに、

「よくわかりました。髪のことなど、あなたさまには、瑣末なことでした」

その一瞬間でバラモンの態度が一変する。温厚さに丁寧さが加わ

るのだった。

夕食を馳走したいとバラモンがいうので、シッターは、

「托鉢でいただいた昼食一食で足りております」

と答えたが、さらに勧めるので、あえて固辞しない。

カピラ城下から、在郷の地主として最近移り住んだというだけに、田舎住まいをもてあますのか、彼は、召使に食事の準備をさせながら、しきりと話しかけてくる。

「失礼ながら、お国はどちらですか」

「シヤカ国です。しかし、主に北の国々を遍歴しております」

「相当な身分のお方と拝察しますが…」

「名もないクシャトリアに過ぎません。幸い、幼いころ師事した先生に恵まれました。無名の方でしたが…」

そう答えると、もう詮索しようがないらしくった。その代わりに、全国行脚の話聞かせてほしいという。



豆スープに麦粉を焦がした硬いパン、無加工のチーズなど、粗末な農村料理の馳走にあずかりながら、シッターが旅の体験を話す。

バラモンは、誠実そうに、静かに耳を傾ける。

狩猟部族やレブラの集落を例にあげ、シッタッタは、ただ垣間見ただけの印象にすぎないが…と前置きし、国のありようを語る。

狩猟部族は、生きものを殺すだけに、生の根源への畏敬の気持ち、また、殺生したものを皆で、鳥獣もふくめて分ちあう考えが強かった。それが 政の根本だった。

レブラの集落は、流れ落ちてきた者が自然発生的に作ったと思われるが、そこでも、政の基本姿勢は明確だった。悪霊の呪いを除くことに絞られていた。呪いが解けないと、食事も与えられず死んでいく代わり、解ければ、農機具を与えられて村の一員として森の開墾が許され、生活の道が開けるのだった。

「国に宿るダルマと政の根本が一致するとき、国は栄え、民も幸せになる、といえるのではないでしょうが」

狩猟部族やレブラの集落のことは、これまで何度も反芻してきた旅の体験だけに、シッタッタには確信めいたものがあつた。

ただ、シッタッタは、失神したこと、嘔吐したことを苦々しく思い浮かべながら、いまならもう失態は演じないのに、と考えている。「はつきりいいますと、こつした国々に比べ、シャカ国の政の基本はよく見えません。」

コーサラ王国に朝貢するかと思えば、マガダ王国にも使者を遣わします。それなら、平和路線を選び、例えば、中立的な宗教立国を

唱えるのかといえば、それもしません。だから、人々の思い、とくに支配階級の方々の思想はバラバラで中心の柱がありません。

王ばかりでなくこの国のだれもが、国に宿るダルマを見抜けていないのではないでしょうが…」

シッタッタが、生まれて初めて国の批判をした瞬間だった。相手を見て、このバラモンなら、彼の考えるところを理解してくれるだろうと思つたのだった。

「先日、隣村の長者さまのお屋敷に托鉢にまいりますと、私の姿をご覧になり、

『糞掃衣など一万枚着ても、国力の増強には何の役にも立たない。大切なのは、軍事力だ、それによつて領地と市場を増やすことだ』と申されました…」

少年修行者の堂々とした発言にバラモンは驚く。隣村の長者の発言にも驚き、

「とんでもないことです。軍事力をもつてことを構えれば、弱小のシャカ国など、ひとたまりもありません。コーサラやマガダの大軍に蹴散らされます。軍事力は、さらに強大な軍事力を呼ぶだけではないでしょうが。軍事は、怨恨と報復の連鎖の発端となるだけと信じられています。」

糞掃衣姿を増やすことこそ、わが国が生き長らえる道です。理性

や精神の力の優れた若者を育てなければなりません。それでこそ、平和的な繁栄が訪れます。軍事力などもつてのほかです」

「はい、そのように隣村同士の長者さまでさえ、意見が正反対になるのは、シヤカ国に柱となる理想がない証拠ではないでしょうか。」

そうかと思えば、ご存知と思いますが、この村の南東のはずれの菩提樹ぼだいじゆの聖地では、貧しいゆえに、老人が捨てられています。いや、老人たちは、自ら口減らしすることを家族への最後の功德と心得、そこで死を待ちます。先ほど、偶然、通りかかりました……」

「捨てに行く以外、決して人は寄りつかないと聞き及びますが、よく行って来られました」

ことばとは裏腹に、天井に近いバラモンの顔にも、一瞬、兵士たちと共通する何かがあるのを、シッダッタは見抜く。

そこで見たものを明らかにしないと、兵士たちと同じように、悪霊にとりつかれたと誤解されかねないと思い、

「以前、師から教えられたのですが、象は、自分に大自然のダルマが宿るのを知っていて、木々が枯れるように、自らの生命の果てる瞬間を察知し、象の墓場に向かうのだそうです。」

聖地で死を待つ老婆にも、それに似た姿がありました。貧しい者の目には、大自然のダルマは特別によく見えるのでしょうか。普通の人間、特に、権力あるひと、富めるひとには、それが、なかなか

見えないのは、なぜでしょうか……」

たちまち、バラモンから恐怖の色が消え、一瞬、別の明るい光が射しはじめた。

「老婆だけではありません。昨夜、貧しい農家に一夜の宿をお借りしましたが、皆さん、豚やアヒルとともに、大自然のダルマに溶け込んで生活されていました……」

感動したバラモンが、ついに、

「一体、あなたさまは、どなたですか。御名をお教えてください」

しかし、シッダッタは、ただ黙ってやり過ごす。バラモンはつづける。

「実は、わたくしには、娘がおりまして、いま、お城で王子さまの侍女としてお支えしております。まだ日も浅いのですが、先日、お側仕えに功績があつたと王様から特別のご褒美ほうびを頂戴ちやうたいし、十日ばかり里帰りいたしました。雨季が明けましたら、また、里帰りさせていただく予定になっております。」

その日まで、ここに、どうぞお留まりいただき、一目、娘に会ってやってください。お若いにかかわらず、旅をしながら立派に学んでいらつしやるお姿を一目拝見させて鑑かがみとさせ、王子さまの侍女として恥ずかしくない教養を身につけさせたいと存じます……」

そのことばにも、シッダッタは、ただ笑顔でやり過ごし、寢室へ

さがって行った。



シツダツタは、バラモンの家を訪ねたときから、単身、糞掃衣姿で隣村へ向かうことを心に決めていた。悪霊が暴れて高熱・下痢の病災が発生し、次々と死者が出ていると聞けば、じっとしていられない気持ちだった。

夜明けまえ、シツダツタの長期滞在を懇願するバラモンに、無理やり別れを告げた。それから一旦、おびえた兵士三人が待つ巨樹へ戻って決意を告げる。少なくとも三日後には帰る約束で、再び牛二頭と一行を巨樹の下に待たせることにした。

兵士に案内や従者を頼むつもりはなかった。どんなにからだは屈強でも、一旦怖気づけば、子山羊にも勝てないと思うのだ。それに、物騒なところへ連れ出し、悪霊の病災に罹るような危険は冒させたくないのだった。

出発まえに兵士から説明を聞き、あらかた道順を頭に叩きこんだ。だが、その必要はなかった。一旦、夜叉（ヤクシャ）の大樹のある菩提樹の聖地まで行くと、そこからは、村の水田を巧みに迂回しながら小高い荒地を踏みわけ、けもの道のように、屍道路が、一

筋に、隣村まで伸びていた。

シツダツタは、ここにも村人のダルマを感じていた。

この道は、無意識のうちに、人気のない荒地を選び、悪霊の病災の拡大を避けていると思われた。

シツダツタが、焦る気持ちをおさえながら道をたどると、枯枝の担架を手に黙々と聖地へ急ぐ裸足の列が、絶えないのだった。夕暮れまでに、二十も半ばを越える担架とすれちがった。その度、声高らかに鬼霊供犠の経文を唱えた。

おしまいには、道すがら雨空に顔を仰向け、大声で読経しながら歩いた。すると、なぜか、涙がこみあげてきた。

薄暗いあの夜叉（ヤクシャ）の菩提樹の陰の岸辺から、次々にガンジス河へと旅立つ屍にも、シツダツタと共通のダルマが宿ると思えば、彼自身、激流に吞まれ、大河へと流れ行く心地がしてならないのだった…。

村の情景は、ほかの農村と変わらなかった。

ぬかるみの小道の脇にわらと土の小屋が点々と連なっていた。泥んこになって、豚、アヒル、子供たちが、にぎやかに騒いでいた。悪霊に侵されない元気な子供がまだいるらしい。

小道の両脇には、その朝、子供たちが落としたのであろう、小さな人糞の渦が雨にぬれていた。なかには、明らかに悪霊の祟りと思

われる下痢便も随所に散っている。

豚、アヒル、子供たちが駆け抜けるたび、そんな人糞、豚の糞尿、アヒルの糞が、足で泥と攪拌され、異臭の泥沼と化していく。

もう慣れてしまったが、そんな泥たまりに、くるぶしまで裸足で浸かるのは、心地よいものではない。まして、目の前で、豚が糞尿をたれ、それを子供たちの裸足が、人糞とともに踏んづけて駆けて行くのを見ると、身のすくむ思いである。

村の小道を抜けると、幸い、共同井戸があつた。女たちが夕餉のこしらえのため、甕に水を汲んでいた。井戸端では、おしゃべりが盛んかと思われたが、誰も口を利こうとしない。シッダッタの姿を見ると、一斉に両手をあわせて拝み、井戸を空けてくれる。

一礼して水を汲んだが、黄色く濁っている。渴きを癒したい気もしたが、思いとどまり、少しの水で手と足を清めると、静かに頭をさげる。女たちは、遠巻きに、シッダッタを眺める。

悪霊の祟りを避けるには、口から清めなければならぬ。

ラーンガラ賢者が、そう教えてくれた注意をシッダッタはずっと守りつづけ、一度も破っていない。頭陀袋に携えた水と食糧以外は、よほどのことがないかぎり、口にしようとしなかった…。

「そうだわ。それがいいわ…」

女たちの間で、そんなささやきが交わされると、誰いうとなく、

脇の奇妙な形の石を指し、シッダッタに経をあげてほしいと頼んだ。

彼女らによると、村の人口は六〇〇人くらいだが、悪霊の猛威で、すでに五、六〇人は死に、高熱と下痢にあえぐ者が各家庭にまだ二、三人はいるので、少なくとも、これから一〇〇人は死ぬだろうと怯える。昨日まで一緒に水を汲んだ女の何人かは、もう今日は倒れて顔を見せないと、ただ涙を流す。

悪霊は、稲植えの手伝いに西の村へ行った老人にとりついてやってきたので、村の東の家々は怖がってどこかへ逃げてしまい、空家ばかりという。

それなのに、長者は、祈祷をして悪霊を祓おうともせず、村人の死ぬのを待っているだけと罵った。

ただ不思議なことに、女たちは、悲しみの表情を忘れているようだった。人間は、一人の死には嘆き悲しむが、屍の山には、生への執着も忘れ、ただ無気力になるだけなのだろうか。

シッダッタに祈祷をあげてほしいという石には、こんないわれがあると聞かされた。

昔、この村が、悪霊の祟りの黒い発疹で全滅したとき、この石の下に、生きたまま捨てられた子供の何人かが奇跡的に生き残り、成人してこの村を再興したらしい。悪霊の病災が流行ると、村人は、この石のいわれにあやかうと、祈祷をあげてきたという。

そんな村の守護の石なのであった。シッタータは、石への読経を請われ、真剣だった。

といつても、それで、悪霊を追い払えるなどは考えていない。

悪霊といえどもダルマの支配下にあり、雨季が、洪水や悪霊の崇りを引き起こす半面、緑の恵みをもたらして乾季にそれが実るように、吉兆両面の顔をもって、移り行くにちがいない。

いくら経をあげても、西の太陽を引き戻せないように、悪霊もその独自の振る舞いは制止できないだろう。ダルマとは、そういうものである。ただ、太陽の振る舞いをよく知ることによって、より恩恵が得られるように、悪霊も、振る舞いを知れば、何らかの恵みをもたらされるにちがいない。

必死の思いで梵我一如の瞑想をすれば、悪霊のダルマの振る舞いが見えてきて、人々を益するにちがいない…と思うのだった。

そのような意味で真剣だった。



シッタータは、はじめて王になった気持ちだった。

村人たちを悪霊の崇りから救わねばならない。自身もいつ悪霊に

侵されるかもしれないと怯えつつ、黙々と屍街道を行進するあの長い行列を、一刻も早く断ち切ってしまいたい…。

そのような救世主になるには、どうすればいいのかわからないが、シッタータの胸には、使命感が、積乱雲のようにふくらんでいた。

このような場合の対処を、ラーンガラ賢者から教わったわけではなかった。だが、師の教えのなかに、その鍵はあるにちがいない。

先の旅で、師が、食事のときは、いつも鬼霊供儀の経文を唱え、生きとし生けるものに食べ物を分け与えていた光景が思い出される。師は、それに拘りつづけた。きっと、この単純な儀式にこそ、ダルマの原点があると見ていたにちがいない…。

シッタータは、石の前に坐ると足を組み、頭陀袋を置く。かなりぬかるんでいる。尻へすぐに泥土が滲みしてきた。

女たちの輪ができる。豚、アヒル、子供たちも、その外を囲んだ。家々からも、夕餉を待つ男たちが顔を出しはじめる。

シッタータは、糞掃衣の右肩を脱ぐと立ちあがり、石の周囲を右まわりに三度まわって最敬礼をする。再び坐ると、頭陀袋から水瓶と皮袋をおもむろにとり出した。彼自身の、残り二日分の水と食料である。

やがて、シッタータの口から経文が流れ出る。

「…願わくは、呼吸ある人々、霊となって月にある人々、そして生

きとし生けるものすべてが、相争うことなく共に暮らせますように。天地、山川海の恵みを互いに分かちあい、飢えるものの出ませんように。これこそが、この世の真実であり、その真実のみが勝つと信じます。天地の神々、鬼霊に、これをお誓い申しあげ、あわせ五穀豊穰、安穩息災を願ひ奉ります…」

唱えながら、水瓶の水を少しづつ撒ぎ、皮袋の食物もちぎっては投げる。早速、豚やアヒルが群がる。カラスの群れまでが井戸端に舞い降り、トビも天空に舞いはじめる。

シッダッタは真剣だった。二日分の水、食料を供物とし、自身の退路を断つたのである。待ちあわせの巨樹まで、師の教えを守るなら、最低で一日、飲まず食わずを覚悟していた。

次いでシッダッタの口を突いて出たのは、輪廻転生の経文だった。「…人の靈魂は荼毘の煙に乗って月に到る。永い月日を経て、雨となつて地上に降り、地中に滲みて米、麦、草、木、豆となる。これらは男に食されて子種となり、やがて母胎に入つて再生する…」

ここまで唱えたとき、シッダッタの胸にひらめくものがあった。そこまで雨だ。地の穢れをしらない天の水を飲むのだ。生きものの源は天から降る水だった…。

長い読経を終えると、シッダッタは立ちあがつて村人に向き直り、「悪霊の祟りを断つには、口から清めることが大切です。雨水を貯

えて飲むのです。煮炊き、碗洗いに、雨水を使うのです。井戸水は、地の穢れが移らないよう手足、からだを洗うにとどめるのです。悪霊が暴れている間、井戸水を口にしてはなりません」

下半身ずぶぬれで警告を発するシッダッタに、村人たちは、清らかな霊の乗り移るのを見たようだった。彼らの間からどよめきが起こつた。批判ではなく、そのようなことなら、わけではない。すぐにやろうじゃないか、という安堵のざわめきだった。

村人たちは、一斉に、シッダッタに向かつて両手をあわせた。

シッダッタの胸には、一瞬、梵我一如の瞑想に、生まれてはじめて到達できたという確信がひらめいた。

そのときだった。会衆の後ろの方から女の絶叫が聞こえてきた。



村の小道の向こうから、糞尿のぬかるみを蹴って、全裸の女が泣き叫びながら駆けてくる。両脇に何やら白い包みを抱えている。

「大切なわたしの…」

絶叫の甲高い声は聞こえるが、意味が通じない。男女の子の名を叫ぶらしい。人の声とは思えない。モンスーンが、大樹の梢を脅かす咆哮のようだった。

泣き叫ぶ声は、すぐに人垣まで走りきった。

暴走のまえに、幾重もの人の列がちぎれた。その隙間を、全裸が突進してきた。シッダッタの糞掃衣を見るや、少し向きを変え、何者からか一目散に逃げるように、迫ってきた。

公衆の面前を全裸で飛び込んでくること自体、精神状態は明らかだった。駆けてくる勢いでなびく髪、絶叫する顔や全身の表情は、もう、彼女が、わずかの理性も宿していないことを語っていた。

だが、シッダッタの目に、女の裸身は輝いて見えた。乳房は豊かに揺れ、腰は豊穰のかたち（はつじょう）に田弧を描いて弾み、体毛は緑深い稲田のように密だった。

彼は、一瞬、夜叉だと思った。

夜叉は、シッダッタの目前まで迫ると、

「修行者さま……」

と叫んで絶句し、それから全身の力をふり絞って訴える。

「この子らを、生き返らせてください。どうか、お慈悲をお与えください……」

叫びながら、女は、両腕で白布の包みをいつそう絞る。金輪際、この子らを渡しはしないという強い愛情を示すようだった。

「二人とも、激しい下痢と嘔吐を繰り返し、たったいままで、わたしを呼んで泣いていたのです……」

息絶える瞬間を思い出したように、女は、再び、子の名を叫ぶ。

「無闇にしがみついたら痛いだけです。手を放しましょう、さあ、そっと……」

シッダッタが、女の目を見つめながら語りかけた。

ようやく泣きやむと、女は、白い二つの包みを、シッダッタの足元に、蓮の花でも供えるようにうやうやしく並べ、自身は、糞尿の泥土（でいと）にひれ伏した。折って坐った長い脚は半分ぬかるみの中だった。額が泥に届くまでひれ伏したので、毛髪が家畜の糞尿にまみれ、頭をあげたとき、泥まみれの髪が頬にまとわりついていた。

シッダッタが、しゃがみこんで二つの包みを解く。

白布は、男児と女児の亡骸を包んでいた。兄妹だろうか、小さな骸は、天を翔るハトが地に落ちたように静かだった。

白い布は、遺骸の下半身から噴出した液体の色に染まり、病状の激しさをとどめる。脱水でひからび、しわくちゃの皮膚は、弱々しい未熟な骨を浮かべる。

女児のぐしょ濡れの髪に赤いリボンがあった。男児の短い腕に手から抜け落ちそうな銀色の腕輪があった。

相次いで旅立った子らに、大急ぎで、真心の旅仕度をしてやったのだろうか。病床の装身具にしては、赤いリボンも銀の腕輪も、過剰すぎると思われた。

いつの間にか小さな二つの遺体いたいに、八工の大群が押し寄せ、黒豆を撒まいたように群がる。井戸端に、カラスが鳴き叫びながら、再び、次々と舞い降り始める。ブタがまわりを嗅ぎまわる。

「お慈悲によって、この子らを、もう一度、お返してください。夫は、盗賊に拉致らちされ、この子らだけが生きがいたったのです。どうか、お助けください。わたしから、すべてが奪われないように……」

女は、子らを引き戻そうとするようにその上に伏せ、再び、両腕で包んだ。白布が女の泥にまみれた。

シッターがしゃがみこんで、女の顔にことばを告げる。

「母さま、お顔をおあげなさい。この可愛い子らの靈魂は、終わったではありません。いま、新しい命へと旅立ったのです。母さまのその涙で、きつと、由緒正しいバラモンか、心豊かな長者さまの子として生まれかわりましょう。嘆くのはよしましょう。お祝いをするのです。まず、からだを洗って衣服を整えるのです」

シッター自身、かならずしも、そう信じているわけではなかったが、咄嗟とつさの機転てんだろうか、女を癒いすことばが、それしか見つからなかったのだ。

「ありがとうございます。修行者さま」

女は、そう叫ぶと、ようやく子供を両脇から放し、泥まみれの手を伸ばしてシッターの足をとらえ、静かに口づけする。

シッターは、女に、むしろ現実から目をそらさないでほしいと願った。だが、彼女の心の傷には、いまは、現実を忘れさせることばが最適かと心得ていた。

「さあ、お立ちなさい」

そういつて、シッターは、女の髪にそつと手をやった。性愛の経験から、緊張の場面では、どんなに雄弁なことばより、思いやりのひと触れが、万感の愛を伝えることがあると知っていた。

「修行者さま。お慈悲をありがとうございます。この子らにも、どうか、お経をいただき、バラモンさま、長者さまへの道を間違えないうちにお導きください」

シッターは、改めて糞尿ふんうりの泥土でいどの中に坐りなおし、足を組んで読経をはじめ。一部始終を目撃した会衆が、誰からともなく一人ずつぬかるみの中に坐って足を組み、合掌がっしょうをはじめていた。

シッターは、輪廻りんね転生てんじやうの経を唱えながら、女のダルマとも梵我ぼんが一如いごとの瞑想めいそうに達しえたと感じる。同時に、女というものについても思いをめぐらす。

今回の旅のきつかけとなった侍女たちも女である。シッターの記憶はおぼつかないが、彼女らは、好奇心のままに、飲酒と媚薬をもてあそび、乱交に走ったのだった。

シッターも女である。死を覚悟して、シッターに衣を解いてく

れた。師として、また、魂の母として尊く、しかも女として、これほどに愛しく切ない人は、この世にないと思う。

そして、いま愛児の死に発狂したのも、女である。菩提樹の聖地で食を断ち、ただ死を待つのも、女であった…。

そのとき、空に、にわか暗雲がたれ込め、豪雨が、清らかな天の瀧となつて降り注ぎはじめる。

「さあ、水だ、水を貯えるのだ……」

そう口々に叫びながら、村人たちは一斉にわが家へ駆け出す。

シッタッタは、小さな亡骸を濡らすまいと、箕掃衣を脱いで覆いかぶせた。衣をとつた青年の裸身が、見る見る瀧に洗われる。

それを見た女の裸身が、半身を起こしてシッタッタにすがり寄る。

「修行者さま、ご慈悲をありがとございます……」

天の瀧に洗われ、女の裸身が清らかに輝きはじめた…。



その夜、わが家で、ぜひ一夜のお宿をと懇願する女をふり切り、シッタッタは、村長の家の軒先に宿をとる。

亡骸は、とうてい菩提樹の聖地まで運べないというので、住まいとは反対の、田んぼの外れの無憂樹の下に埋葬してやった。そうし

て、その樹にふたりの子からとつた名をつけ、以降、これをわが子と思い、その名で呼ぶように諭したのだった…。

埋葬は簡単には承知しないと思われたが、シッタッタのことは信じきっているらしく、由緒正しいバラモンや心豊かな長者の家に生まれ変わるなら、一刻も早いに越したことはない、てこずらせなかった…。

陽も落ちたので、埋葬を済ませると、シッタッタは先を急いだ。

この村は貧しいのか、長者の家は、先に訪ねた城ほどもある豪邸などに比べると、かなりみすばらしい。といつても、レンガづくりの堂々とした屋敷である。

何度、門を叩いても、誰も出てこない。やっと、顔を出した老婆に用件を伝えたが、黙って消え、またもや、長い間、待たされる。

ようやく姿を見せた老婆は、

「どこか、そのあたりの軒下で、ごろ寝でもしておいき」

と、そつげなく主の意向を伝える。門を入れれば、確かに軒下はどこにでもあり、雨露はしのげる。

「一夜の宿をお貸しくださいさる功德に対し、ぜひ、拝顔のうえ、両手をあわせたく存じます」

シッタッタは、そういつて老婆に、主と直接会いたい旨を伝えるが、わかったのかわからないのか、黙って姿を消す。

あたりはまだ薄明るいが、シッタータは、一日の疲れからうつとしていた。

持参の水瓶と皮袋を側に置いてあるが、空っぽ。胃袋も空。喉もカラカラ。だが、ただ、耐えるほかない。蕙むしひさえない土の上に、飢えて渴いた身体を、静かに横たえている。蚊が、群がってくるので、草むらから摘つんだ草の束を払子はっす代わりに、追い払う。

旅の経験から、空腹時は、横たわるほかないことを学んでいた。ふと、忍ぶような足音がするので目を覚ますと、痩せた男が立っていた。

先の旅で出会ったレブラの集落くもあとしの蜘蛛男くもおとこを思わせる。だが、向こうは、悪魔の崇たりゆえの昆虫的な容貌だったが、こちらは、普通の顔でありながら、猛毒の昆虫類を思わせる。

シッタータは、黙って上半身を起こし、超然ちようぜんと両手をあわせる。「旅のお方、悪く思わないでください。いま、この村には、悪霊たの崇たりの下痢が暴れまわっているのです。いくら修行者でも、そんなもの、家の中へ持ち込まれては、それこそ、一大事ですからな……」シッタータは無言で男を見つめる。

「ご存知なかったのでしょうか、よくもまあ、こんな悪霊たの崇たりの真っ只中を、のこのこ、やって来られたものだ」立ったままの男に向かい、シッタータが訴える。

「その悪霊たの崇たりを被ほいもせず、長者さまは、村人が次々と倒れていくのを待っていないさる、と、もつばらの評判です」

そのことばで、男の表情が険けわしくなる。

「何か悪いことでもしているように聞こえますが……」

すかさず、シッタータが、

「では、善行ぜんぎょうでもしていないさるおつもりですか」

男が、

「善行とはいわないが、あえていえば、悪行ではない」

シッタータが、

「と申されますと……」

答えて、男が話したのは、この村は、貧しいということだった。

耕作地は少ないし、痩やせている。したがって収穫量も少ない。しかし、税は、土質の豊かな耕地と変わらない。つまり、収穫量に対する税の比率が高いのだ。その分、農民に負担がかかる。

だが、最近、この村の人口が、どんどん増え、血税をとりあげられると餓死がしすると、いつも、いざこざが絶えない。

ちようど、そんなところへ悪霊た騒さわぎである。

人口が零ぜろというのは困るが、食けい扶ぶ持ちは少ないに越したことはない。それに、一家全滅とか逃散たふさんとかになれば、その土地を、よく働き、しかも重税にも耐えてくれる農民に与えれば、八方が丸く治ま

る。いまは、そうした改革を行うのに、千載一遇の好機なのである。「悪行ではない、というのは、そういう意味です」

シッダッタは、闇に閉ざされて顔も見えない男を、ただ黙って見あげる。

どこかで、愛児を失って発狂した女の叫びが聞こえた…。



その夜、シッダッタは不思議な黄泉の国の夢を見た。

そこは、カピラ城のシッダッタの寝室であった。だが、西側の壁の向こうは黄泉の国だった。壁には鳥や花を刺繍した真紅の壁掛けがかかり、裏側から、黄泉の国の人々がドアもないのにカーテンをくぐるように、自由に入り出すのだった。

あたりは、夕闇が迫ったようにおぼろで、一日が終わる瞬間に似た、どこか哀しげで不安な雰囲気漂っていた。

王城の寝室の厚い壁をカーテンのように押し、先ず、姿を見せたのは女性だった。闇に包まれているので、最初、顔や手足など、細かいところはよく見えない。闇の向こうから、シッダッタの寝室へ入った一瞬、それがシーターだったとわかる。全裸だった。

なぜか、シーターは、そのとき、黄泉の国の人となって数年が経

過していた。荼毘のとき、シッダッタは、やむをえない事情で立ち会えなかったのだった。

シッダッタが、壁の闇に目をこらすと、シーターの美しい全裸がゆれながら迫ってくる。張りつめた乳房が弾む。体毛が黒く輝く。

荼毘の猛火によって失われたはずなのに、生前にかわらぬ肉体の艶かしさに、シッダッタは、思わず深呼吸をする。

「シーター、よく来たね。少しも変わらないじゃないか」
しかし、彼女は硬い表情をして一言も口を利かない。

それなのに、どこからか理知的で慈愛に満ちた声が聞こえてくる。森の曙とともに鳥がさえずるように、雨季が訪れ、草木が一斉に芽吹くように瑞々しい。それは、いかにもシーターの肉体に似つかわしい声だったが、生前のそれとはどこか異なる。

シッダッタは、ベッドから立ちあがって彼女を迎える。

真つ赤な厚い絨毯を踏んで、シーターの輝く全裸が、目前に迫ってくる。だが、肉感的ではなかった。冷やかな霊の輝きとでもいうのだろうか。

肉を求めようとするシッダッタの心を見透かして、それを拒み、あえて冷淡に振る舞うかのようだった。

「実母は、わたくしの肉体を産みました。シーターは、わたくしの靈魂を育みました…」

シッダッタが、そう呟いた瞬間、シーターの姿が、菩提樹の聖地で死を待つ老婆に変わっていく。痩せさらばえ、性別さえはつきりしない。

「肉体は、いつか朽ち果てます。朽ちることのない靈魂を育んでくれたあなたこそ、真の母と申すべきです……」

続いてシッダッタがそういうと、老婆の瘦身が、見る見る若い女のそれになる。死を覚悟し、はじめてシッダッタの前に衣を解いた、あのシーターの輝きである。

思わず、シッダッタが手を差し伸べる

しかし、もうそこには闇があるばかりだった。すると早や、その後ろに、壁を突き、黄泉の国からの次の訪問者が立っている。

誰だかわからない。脊の低い男性だった。しかし、よく見ると、同道を拒んだ案内の兵士にどこか似ているようだった。闇のなかに、怯えたように立っていた。

「いや、随分、久しぶりだね」

やはり、彼も黄泉へ旅立って数年は経っていた。シッダッタが、握手しようとして手を伸ばす。彼も、手をそつと差し出す。それを握ると、どうしたことが、腐敗した皮膚がめくれ、冷たい死肉を直に握ってしまう。驚いて手を放そうとするが、彼が、いつそう力をこめる。仕方なく、シッダッタが握りかえすと、その手は、いつか、

兵士の分厚い手と変わり、肌の温もりが伝わってくる……。

握手が終わるが早いか、もう、次の訪問者が立っている。闇の中で顔がわからない。だが、それは、シッダッタが知る人にちがいはなかった。手を出して握手を求める。握った感触は、女性で、握りの華奢な柔らかさがどこか艶かしい……。

次々に来訪者と会う間、なぜ背後からは、シーターの視線がこちらをとらえて放さない。先ほど闇に消えたはずのシーターから、暖かな光の輪が、シッダッタの背に太陽のように降り注ぐ。

光輪からは、澄み切った声が響いてくる。

梵我一如の境地に入ると、過去、あなたを生かしてくれた多くの人たちとの縁が見えてきます。いま、黄泉の国から、続々と王城を訪問しているのは、そうした方々です。訪問者の数をよく数えるのです。ご自分が生きて来た過去世の数なのです。いま、生かされているのは、その数と同じ数の過去世から功德を受けてきたお陰と知るので。ご自分のなかに宿る多くの人々のお陰を直視するので……。それが見えない為政者には、大王としての慈悲の心は、決して宿らないのです……。

慈愛の太陽を背に受けて黄泉の入口に立ち、向こうから続々と姿を見せる旅人を迎えながら、シッダッタは、ぐらつくことのない心の平安を感じている。



シッダッタが雨季の旅に出たあと、シーターは幕引きのチャンス
を待ち受けていた。

好機と思つた乱痴気騒ぎは、お咎めなしとされ、少し気抜けして
いた。そこへ、今度は、コーサラの使者が危ない情報をもたらした
というので、いよいよ、時が来たと決意も新たに後任の人選なども
慎重に考え、好機を待った。

アンヴァバーシーに代えてマリカを王子の身の世話係とするこ
と、侍従頭の候補として、アツダカーラーという二十二歳の最年長
の侍女が最適であること、そしてシーター自身は責任をとって身を
引くことであつた。

覚悟をきめて待つと、王に、コーサラへの漏洩問題の報告を終え
たランガラ賢者から、呼び出しが来た。シーターにも、この次
第を報告しておきたいという。

調査の結果、コーサラ王国が横槍を入れた「王子とシーターの特
別の関係」については、侍女たちは、だれも、そんな関係を直接見
た者も聞いた者もないというのだった。

ただ、乱痴気騒ぎの朝、お咎めを逃れたい一心でだれかが口走つ
た「むしろ王子とシーター様が怪しいわ」という一言が、いつか、

まことしやかに伝わったばかりか、アンヴァバーシーのそれを肯定
するような発言が、噂話にいつそう真実味を帯びさせた。これ
が噂の正体だといふのであつた。

シーターは、静かに話を聞いたあと、乱痴気騒ぎもコーサラへの
漏洩も、そうしてアンヴァバーシーの任命も、すべて責任は自分に
あるから、この際、身を引きたいと願ひ出る。

冷静に判断して潔く進退を伺うシーターの態度に、ランガラ
賢者は、これこそ教育者の鑑だと思つが、

「シッダッタ王子が、師として母として、また麗しの女性として敬
愛されているあなたを、いま、失うことは、王子の心身の成長が止
まることを意味します。今回のコーサラ問題で、そのことを一番心
配されたのは、王ご自身でした。わたくしも、まったく同感です」
と、慰留に努める。

「身を引けば、一番寂しがられるのは、王子さまご自身であること
は、わたくしが、もっともよく存じあげております。

それに、教育係として、先には王さま直々にお褒めのことばを頂
戴し、またいまは、尊者さまから身にあまるおことばをいただき、
望外の光栄と存じおります。

しかし、乳児に離乳の時、ひなに巣立ちの時というものがありま
す。子は、その試練を越えて独り立ちせねばなりません。早すぎれ

ば身体に栄養が不足してひ弱となり、遅すぎれば精神に独立の気概が失われ、やはり、ひ弱となります。

親にとつても子にとつても、その潮時を知ることこそ、まさに、ダルマを知ることかと存じます。いつの日にか、王子さまとの離別が避けられないものなら、いまこそ、その潮時かと心得ます。そうして、このことを、もっともご自覚いただかなければならないのは、王子さまご自身ではないでしょうか。

それに、いかに王子さまのご寵愛をいただいた者でありまして、ご城中の秩序を乱せば、お咎めを受けるのが道理でございます。

どうぞ、それ相当のお咎めのうえ、自宅蟄居などのご沙汰をいただきとう存じます……」

そんな攻防を経て、ラインガラ賢者が提出したシーターの自宅蟄居命令に、さすがの国王も涙を吞んで許可を与える。

コーサラ王国から遣わされた使者の責任問題は、シーターの自宅蟄居という形で、一応、内部的な決着を見たのだった。

不

シーターは、蟄居を命じられて自宅へ戻ると、早速、父にこれまでの経緯を告白し、国の掟を侵した罰として、服毒死を許可してほ

しいと申し出る。完全犯罪で誰も知らないが、王子のため、あえて毒を呑みたいという。

シーターの父は、北インド屈指の先進的バラモンで、学識と英知は並ぶものがないといわれ、ひとり娘に英才教育を施したのだった。その娘から、掟侵犯の事実を知らされ、少なからず驚くが、さすがに高名なバラモン、泰然と構えてあわてたようすも見せない。

シーターは正装姿で正座し、格式ばって話すのだった。話を聞きおえると、師でもある父が重々しく口を開く。

「お命をささげること、王子にお授けした大王の道が、いっそう強化され、実践されると信じているのだな」

シーターは、王にでも伺候したように固い表情だった。

「はい。お命をささげれば、王子は、一旦は、わたくしの死を悲しみ、生命のもろさ、死の非情さに打ちのめされるでしょうが、試練を乗り越え、大王への道の門前に立たれると信じます。しかし……」「しかし？」

「王子の心根の優しさが、不安です。何ごとも、『わが身にひき比べて……』とお考えになることが心配です」

「人間としては立派なことと思われるが……」

「はい。王子のその心根の優しさと、生来の英知をもってすれば、生命のはかなさ、死の冷酷さ、これこそが生命の真の姿、ダルマだ

と悟られ、生きとし生けるものへの慈しみ、生命への畏敬の思いが、さらに高まることはまちがいないと信じています」

「それで十分でないか」

「ただ、そう悟られたとき、心根の優しさが、個人の感情を超えて公の心境に変わり、政の英知として働けば、それこそ善政まちがいない大王におなりだと思えます」

「シャカ国の王子は、そうではないとでも…？」

「はい。心根の優しさが、個人の心境を超えられるかどうか、よくはわからないのです」

「では、大王には、おなりでない…？」

「大王におなりだとは思いますが、慈悲と英知を政で実践される大王であるかどうか…。殺戮や権謀術策は王子には似つかわしくないと思われてなりません」

「別の大王にでもおなりというのか…」

「はい…。何か、ダルマに則って慈悲と英知を実戦される、もっと別のお姿が浮かんでならないのです」

「ほお」

「どのようなお姿であれ、大王におなりなのはまちがいないと信じます。そのとき、僭越ながら、この拙い命と引き換えに、王子の心にお客様伝来の大王の道を不動のものとしたいのです。精神の心臓

を植えつけ、日々新鮮な心の糧を送りつづけたいのです。

それに、服毒死にこだわりますのは、いかに悪法でありましても法は法と理解され、ダルマを無視されることのないようお諫めしたいからでございます…」

そういいながら、心の底で、シーターは、この服毒死によってシッダッタが、もう二度と異性を愛することはないだろうと感じている。求めるわけではないが、結果としてそうなるにちがいないと思っていた…。

父は、顔を伏せ、しばらく考えこんだままだった。

シーターが願ひ出た服毒死とは、いわば表向きは理屈であつて、要は、王子への真剣な愛の告白が、彼女の場合、后となる栄達の道でなく、王子教育完成のための殉死だったのだ。父は、そんな娘の純粹で献身的な心理を知り、思いを叶えさせてやるほかあるまいと苦慮するのだった。

翌日、シーターは、王子に仕える正装に身を整えて密室にこもる。

部屋には、彼女の好んだ赤い壁飾りが飾られ、真紅の絨毯が敷き詰められた。

シーター自身は、かならずしも重視しないのだが、父がぜひにというので、密室には祭壇が設けられて護摩が焚かれ、父自身の呪文によって祖霊が祭られ、彼女の天界回帰の祈禱が行われた。

正装に身を包むまえ、シーターは、庭の蓮池にからだを沈め、沐浴で身を清めて最後の瞑想を行い、早速、十日間の断食に入る。

古来、シヤカ国の掟に定めた毒薬のトウゴマの種子とは、インド原産の灌木の実で、広くアジアに自生するが、リシンという猛毒を含んでおり、破傷風菌、ボツリヌス菌などと並び、後代、世界五大猛毒の一つとされ、四、五日の猛烈な下痢、激しい腹痛の後、下血や吐血を繰り返して悶死するという。

十日の断食を設けるのは、猛毒の効用を高めるのはもちろん、下痢や嘔吐を最小限にとどめるためでもあった。



最後の旅立ちの断食がはじまった。

毎朝早く、暗いうちに、召使によって密室に、最高級の硬焼きの甕一杯の水、黄金の水差しに満たした水、美しい色とりどりの花々、米やヒエなどの穀類がもちこまれる。

その冷水でシーターは、毎朝、頭と足先を濡らして象徴的な沐浴を行い、右手で片手一杯の水を口に含む。その後、祭壇に黄金の水差しの水、美しい花々、穀類を供えるのだった。

父の教えでは、神々への捧げ物は、伝統的なバラモンの凄惨な生贄

の血ではなく、清い水や美しい花々、穀類など流血をみない物でなければならぬとされた。法・真実(ダルマ)を尊ぶ神々は、山羊の血一滴すら流血の生贄を好まないというのだった。

シーターは、そうした思いをこめて祭壇に捧げ物を供えると、正座して、ひたすら経文を唱える。

「願わくは、呼吸ある人々、霊となって月にある人々、そして生きとし生けるものすべてが、相争つことなく共に暮らせませすように。天地、山川海の恵みを互に分かちあい、飢えるものが出ませんように。これこそが、この世の真実であり、その真実のみが勝つと信じます。天地の神々、鬼霊に、これをお誓い申しあげ、あわせ五穀豊穰、安穩息災を願ひ奉ります…」

これは、伝統的なバラモンの経文ではない。古来、長子へ口承されてきた秘伝のヴェーダ経文に、父が手を加え、新時代にふさわしい公開の請願として創作したのだった…。

こうして二日、三日と時が経つうち、空腹感が増してくるが、感覚はとぎすまされ、「お命をささげること、王子の心に王道をうち建てるのだ」という思いが強まってくる。

やがて、胃が空になるにつれ、身体に力がいらず、朝晩の寝起きに、少し不自由を感じ、ときどき意識がかすんだりする。昼間なら、気合を入れて正座の姿勢を立てなおし、声高らかに読経するが、

ふと、頭がふらつく感じはどうしようもない。

夜は眠りが浅くよく夢を見る。何かを食べている場面が多いが、目が覚めると、どんな夢だったか記憶がない。そんななかで、まれに見る王子の夢は、目が覚めてからも、鮮やかに印象が残り、現実にいまそのことがあったように感じられる。

五歳くらい王子だろうか。

風邪をひいて高熱を出し、うわ言で、シーターに添い寝をせがむので、スジャータ侍従頭の指示があり、お側仕え間なしの彼女が、王子のベッドにいる。経験が乏しいのに大役なので、シーターは、不眠不休で、無心に自分を投げだすほか、やり方をしらない。

添い寝の王子は火のように熱く呼吸が荒い。ときどき、うわ言で「シーター、シーター」と叫んでしがみつくと、乳房のあたりが火傷でもしそうに感じられる。王子は、すぐ、熱にうなされて眠りつつけるが、次、ふと目を開くと、今度は頭をまわし、母の面影を追うようにシーターを探す。やがて、その姿を確かめると、安心しきって目を閉じ、また静かに眠りつつける……。

シーターは、十四歳の身ながら母の愛を求められると、王子が不憫でならず、われしらず深い母性に目覚めるのだった……。

父の指示で、こつした日々の出来事は、就寝まえ密室にやってくる書記係の召使に、ことこまかに報告せねばならなかった。娘とは

いえ、王宮に出仕したからは公人なので、父は、王宮への報告を準備しているのだった。



断食して十日近くなると、なぜか空腹を感じない。

雨季だから空気は乾燥していないが、一日、片手一杯の水だけでは脱水症状も進み、脱力感が激しくなってきた。

内臓は、食物を渴望するらしく、朝、片手一杯の冷水を口に含むと、急に胃が動きだし、腹部で大蛇が暴れるかと思われる。

倦怠感も次第に強くなって、毎朝、祭壇に黄金の水差しや花々を供えるのさえ、重たく感じられるし、動くのが億劫で、すぐに動悸が高まり息苦しくなる。

心を強く保って読経しようとするが、長く正座できないし、読経の声もときれがちとなる。こんなことではいけないと心を鞭打つが、気力の衰えはどうしようもない。

そんなとき、空耳のように、魔神のささやきが聞こえてくる。

王子の忠実な下僕よ。なぜに、うら若い命を捧げようとするのか？ 王子は、そなたの死など望んではない。そなたの紅い唇、長い黒髪、豊満な乳房、甘美な谷、そして長く美しい脚、それこそ

が、王子への最上の捧げ物と知るべきである…。

朦朧とした意識のなかで誘惑の声を聞き、シーターは、正気に戻ろうとするが、心の働きが、意志に従わない。

これではいけない…と思うほど、なぜか、王子のまえに裸身をひらいた一夜の喜びが、誇らしい気持ちとともに下腹部からこみあげてくる。遠い夢のようで、ほんとうにあったかどうかさえおぼろだが、あの一瞬のときめきの感覚は、たった今のこのように鮮やかである。

胃腸が空になると、そこに神経が行かない分、針ほどの刺激が棒とも感じられるのだろうか。

シーターは、そのとき、腹部の小さな痛みで、月のものの生理が始まったのを知る。しかし、空しくて悲しく、それでいて、どこか誇らしいが、なぜか、手当ての気持ちが起こらない。

そのとき、再び、魔神のささやきが耳に届く。

忠実な下僕よ。早く断食を解き、健全な身体で王子の帰国を待つがよい。世継ぎを産むのだ。さもなければ、アンヴァバーシーに先を越され、彼女が、王子の子を産むことになるだろう…。

何という醜い妄想だろう…と思うが、意識は、ますます、そちらに引きつけられていく。勝手に動く心はどうしようもない。

シーターは、あの乱痴気騒ぎを知ったとき、アンヴァバーシーの

妊娠を直観したのだった。しかし、そんな嫌疑を抱くこと自体、不敬に思われ、それに、王子への一途な思いが穢れるのが怖く、心の奥深く疑いの扉を閉ざしてしまったのだった。

下僕よ。アンヴァバーシーが身ごもったのは事実だ。これを何とかしないと、そなたのせつかく死も、単なる犬死にすぎなくなるだろう…。

シーターは震えあがった。

足元から、魔神が、それこそ絶望と虚無感、嫉妬の三つの大軍団を率い、攻めてくるように思われた。

いや、人間の軍団でなく、象が五百頭、腹一杯に酒を飲まされて正気を奪われ、狂暴のかぎり尽くす野生の軍団といえるかもしれない。なかつた。

シーターは自分を恥じた。

しかし、大群の象軍団は、すべてを粉碎するほどに凶暴で、一度暴れたしたら、狂気の水が冷めるまで収まらないかと思われた。まったく思いもしない展開だった。

心のどこかに、妊娠をアンヴァバーシーに盗られたので、対抗手段として、命を捧げることで王子との一体感を求めようとしているのだろうか。

そんな思いが頭をよぎるが、意識が朦朧とし、深く追求する力が

なくなっている。理性は、断食の妄想のなかで、酒を飲ませた象軍団に蹂躪されるがままであった。

もっと格好よく有終の美を飾れるはずだった。自分でも納得のいく満足の最期を迎えられるはずだった…。

こんなにつまらない命など、シッタッタ王子に捧げるに値しない。われながら、なんとみすばらしい命だろう…。

そう思ったとき、シーターは、ついにトウゴマを食べるときがきたと直感する。朦朧とした意識のなかで、そう思う。

父とのかねての約束通り、早速、担当の召使を呼ぶ。

一人は、その日の出来事の聞き役、もう一人はトウゴマ十粒のすり役である。このあと最期まで、ふたりがシーターの面倒を見ることになっていた。

書記係に、その日のありさまをシーターが語り終えるころ、すり鉢には、トウゴマの油を浮かべた白い練り物がすりあがっている。

最上級の硬焼きの土器の皿に、それがヘラで移され、祭壇の上に置かれた。黄金の水差し、美しい花々、穀類を盛った大皿の前で、親指ほどの量の練り物はみすばらしくさえ思われた。

若い命を奪う薬草なら、もっと毒々しく華美であってもよいと思われた。

シーターは、皿の上の練り物の固まりを匙ですくうと、一口で唇

の奥へ滑らせた。その匙の運びは毅然としていた。

しかし、それは油が重く、象の地響きに似た異臭を放つ。下手すればそのまま嘔吐しかねないので、何杯も、水の力を借りる。

書記役の召使が、そんな苦悩のさまを、こと細かに脳裏に刻みこんでいく。

それから五日後、「王子に、国辱を負わせかねない噂の責任をとりせていただく」と、シーターが、静かに毒をあおったという訃報が、王宮に届けられる。

猛毒で苦しんだ五日間の様子は、召使によって父のもとに詳しく伝えられていた。トウゴマの苦痛に耐え、シーターがついに悶絶死するまでの経緯は、王にも報告された。

最期の瞬間、いい残すことはありませんかと召使が聞くと、「すべてにありがとう」といって果てたという。

かぐわしい二十歳の献身であった。

王宮では、早速、旅先の王子に知らせるかどうか検討されたが、絶望による不慮の事態を察するランガラ賢者の建言で、帰国まで伏せ置かれることになったのだった。



シーターの訃報は、すぐにアンヴァバーシーの屋敷にも届く。自宅蟄居の処罰は、アンヴァバーシーの場合、先に王から褒章が与えられていたのでお咎めなしとされ、シーターにだけ下されたのだった。

しかし、ランガラ賢者は、彼らしい洞察を働かせて抜かりなく対処していた。

どんなに諫めても、困難な雨季の旅に出るといい張るシッダッタと、誠意ある慰留にも宿下がりを曲げないシーターとの間には、重大な何かが起こったと読んでいた。

王子に雨季の旅を許したのも、シーターの自宅蟄居の決裁を王に求めたのも、その何かの後始末のつもりだった。

ただ、シーターには「侍女たちの乱痴気騒ぎ」の責任をとるといふ万一の事態が危惧された。そのとき、騒ぎに加わった侍女たちから後追者を出しては醜いので、シーターが、次の王子係として推薦するマリカと、現職のアンヴァバーシーを残し、あとは全員、重要なポストへ配置換えを行った。新しい部署でも誇りがもてるよう、いわば、昇進的な異動としたのだった。

それぞれ能力は高いし、王からの褒章で忠誠心が高まっている矢

先なので、思いきって王や后のお側係に任じた。すると、彼女らは、いつそう忠誠にはげむのだった。

あとは、騒ぎの首謀者アンヴァバーシーへの対処を残すだけだったが、しばらくすると、体調不良を理由に宿下がりにし、それから登城しなくなってしまった。

ランガラ賢者は、悪い予感がするので、見舞いと称して何度か変装の間諜も差し向けたが、詳しい情報はえられなかった。

それもそのはず、アンヴァバーシーは、乱痴気騒ぎのあとしばらくすると妊娠の兆候があらわれたので、王宮を辞して自宅にこもり、ただ独り悩み続けたのだった。

普通、王子の子を宿せば、最高の榮譽と躍りあがり、大声で国中にもふれ歩きたい心境になるものだろう。王妃といわれないまでも、側女としてなら王宮入りもまちがいないからである。

しかし、彼女は、逆に、大失態でもあるかのようにふさぎこんでしまった。シッダッタが、それを歓迎しないと考えるからだだった。

仮に、妊娠を告白したとしたら、誠実で優しい心根の王子は、不愉快な顔をしたり、怒ったりはしないに決まっている。しかし、本心では決して喜ばないと思われてならない…。

もし、シーターが妊娠したのだったら、王子は、最高の喜びを爆発させるだろう。慎重で思慮深い性格であるから、あからさまに、

態度に出しはしないけれど、心中では躍りあがるにちがいない。

シーターと比べ、シッダッタの態度に、こんなにも格差が予想されるのである。姿容はまったく変わらないのに、思われ方は、これほどに隔たっていると思う。

それに、もつと深刻なのは、妊娠の経過があまりに軽薄すぎることだった。王子に見初められたとか、愛しあったとか、真摯な経緯を経ていないのが致命傷である。

仮に、王子が、アンヴァバーシーの妊娠を渋々認めたとしても、乱痴気騒ぎの果ての子と世間にわかれれば、高德の王子の失態と、国内外の失笑をかうことはまちがいない。

そんな子を産んで構わないのだろうか。彼女自身も惨めだが、生まれてくる子はもつと悲惨で、招かれざる子が王族に加われれば、この国に不幸をもたらすにちがいない…。

そう考えると、衝動的な性質のアンヴァバーシーは、じつとしていられなかった。お腹の子の処理を焦るのだった。

ただ、彼女は、王宮での日々を思い出し、シッダッタ王子の肌に触れ、お側近くお世話できただけで、この世の最高の宝と考え、ほかに何もいらないと無欲でいるのだった…。

彼女が、シーター殉職の報に接したのはそんなときだった。訃報を聞いたとたん、「自分こそ、コーサラに漏れた噂の火種の責

任をとらねばならない」といつて震えあがった。それから、何か探し物をする、半狂乱となって自室を飛び出した。

アンヴァバーシーが、屋敷の片隅の古い無憂樹の幹から飛び降りたと、召使から家人へ急報が告げられたのは、それから間もなく後だった。

急を聞いて家人が現場に駆けつけると、スカートの陰で、秘所を刺した鋭い短剣の先が、下腹部の皮を貫き、血の色に濡れていた。

そこへ短剣を当てがい、高みから身を躍らせたものらしい。なぜ、そこまで残忍な自害を選んだのか、誰にも理解できなかった。家人にも心当たりはないし、遺書もなかった。

早速、訃報は王宮へもたらされたが、国王への報告には、あまりに残忍な部分が割愛されたのだった。



シッダッタは困難な雨季の旅をつづけた。

悪霊の祟りの高熱・下痢の村を空腹のまま離れると、飲まず食わずで一日かけ、牛と兵士が待つ巨樹にたどり着く。そこから、再び、筏を繫留した菩提樹の聖地へ戻り、そこで少し道草を食ったが、そのあと、激流に弄ばれる筏を操りながら逆巻く氾濫川を渡り、

ようやく本隊に合流した。

隊長は、シッダッタの元気な姿によるこんだ。もちろん、王子が冷静沈着に行動するのを知っているので、小隊を編成し、別行動を許したのだった。だが、不慮の事故という懸念も潜む雨季の旅、無事な姿に、ともかくも、ほっとしていた。

ラインガラ賢者からは、できるだけ王子に意思決定させ、責任ある行動をとらせるよう指示を受けているので、小隊を率いての別行動は、未経験な王子に、絶好の教材だったと考えていた。

ただ、北への移動を再開してしばらくすると、王子と小隊を編成し、再び、別行動をとるような場合には、自分を加えないでほしいと訴える兵士が増えているという噂が、隊長の耳に届く。

原因を調べると、別行動の供をした兵士三人から、王子の奇怪な行動が怖々ささやかれる結果、王子は、もしや悪霊の化身でないかという恐怖が、兵士の間に広がっているのだった。

こんな話が、兵士から兵士へ耳打ちされていた。

菩提樹の聖地は、昔から黄泉の国の入口と伝えられ、死体や口減らしの親を運ぶほかは、怖れて誰も寄りつかないのに、王子は、少しの恐怖も見せずに踏み込んだばかりか、そこにあった死体まで、平気な顔をして素手で川に流した。

これは、ただの人間のできることはない。悪霊の化身にちがいない。

そうでなかったら、そのあと単身、悪霊の崇りの高熱・下痢の病災が荒れ狂う村へなど、危なくて近づけないはずだ。

おまけに、帰途、筏を繋留したので、やむなく菩提樹の聖地へ戻ったとき、火葬場で瞑想の修行者に出会ったが、王子は、すたすたとそこへ赴き、しばらく話をすると、こともあろうに火葬場で丸一日、彼とともに瞑想に耽った。いつ、黄泉の国から祖霊が迎えにくるかわからない最悪の危険地帯で、一日中、死の恐怖に怯えながら瞑想のやむのを待つほど、怖いものはなかった…。

確かに、常識を超えた王子の行動は、兵士たちにとって恐怖の臨死体験と映っても不思議でなかった。

そこであるとき、隊長が、諫めのもりめで、隊商姿のシッダッタを同じ牛車に乗せて話しはじめた。

本隊に戻ってからは、ラインガラ賢者のアドバイス通り、かならず、シッダッタは隊商姿であった。

一行は、厚雲に閉ざされたアンナプルナの方向へと移動していた。

「大王になるお方が、死者などにお近づきになってはなりません。民は、光や、収穫をもたらす太陽を求めますが、死を忌み嫌います。太陽とよしみは結ばれても、死者や火葬場に親しむことがあつてはなりません」

話を聞き、シッダッタは、自分が描く大王像と世間のそれが相当

異なることを、再認識する。

「特別に死者や火葬場に親しんでいるわけではないのです。民の心の安らぎを思うとき、死者であるうとなかろうと、半分は慈悲の心で半分は探究心で、つい深入りしてしまうのです…」

シツダツタは、菩提樹の聖地で、子らへのせめてもの最後の功德と
いつて静かに死を待つ老婆が、生を永らえさせる食べ物を拒んだ姿
が脳裏から離れない。崇高な親の愛の結晶を見る思いだった。

同時に、火葬場で瞑想していた修行者も忘れられなかった。

彼は農業を営んでいたが、比較的裕福だったので、親に口減らしさせる必要はなかった。父は早く死んだが、母が長生きだったので、妻に、できるだけ美味しいものを食べさせるようにと、常々指示していたという。

ところが、老母は、食べても食べても飽き足らず、いま、食べたことも忘れ、嫁が食べ物をくれないと泣き叫ぶので、とうとう妻が発狂し、裏山で首をくくって自殺してしまった。

母には悪霊が祟ったのでないかと恐れた彼は、兄弟で相談のうえ、菩提樹の聖地へ象のように太って醜い母を捨てたという。

一カ月経つて来てみると、骨と皮だけの死体が転がっており、半分、鳥獣が食い荒らしていた。早速、茶毘に付し、ガンジス川へと葬送した。以来、彼は修行者となって全国を行脚し、ここに戻ってきて

は瞑想するが、いまだに、人の道を踏み外したのではないかと、悩んでいるというのだった……。

修行者は、自問自答のように、静かに話すのだった。

「昔から、老いた父母を大切にせよ、といいます。どの様な場合にも、それは常に守るべきなのでしょう。亡き妻が、わたしの母にしてくれた孝行の数々は、どのような意味があったのでしょうか」

親が親たらずとも、子は子たれ…。

そんなことがいえるのかどうか。母を早く亡くしたシツダツタには、そのあたりが、うまく呑みこめないうでいた…。

「孝行には、親が満足し喜んでくれるという大前提があると思うのです。ところが、尽くしても尽くしても、まだ孝行を求められたら、親が餓鬼に見え出し、わたしの妻でなくとも、発狂したと思うのです」

太陽は、ただ、光と熱を与えて草木を育み実らせ、月は、ただ、光をかがげて、夜、旅行く人々や船人たちを安らかに導く…

これは、無情の太陽や月だからできるのであり、有情の人間は、そんなわけにはいかないのだろうか…。

「孝行に、親の満足を前提とするのはまちがいのではないでしょうか」

親孝行であれ、子育てであれ、相手の満足を前提に行うもので

はない。必要とされるから、ただ、与えるだけである。与えることに対価を求めてはならないし、驕りがあってもならない。与えることが、人間としての幸せであり、功德である…

どの質問にも、シッダッタは、答えが見つからなかった。ともかく、彼とともに瞑想して何か答えを得たかった。彼とダルマを共有し、梵我一如の瞑想がしたい一心だった。

そんな思いの去来するシッダッタに、隊長は、なんとかわからせようと懸命に説得する。

「太陽は、天にあるときはもちろん、昇るときも沈むときも、明るく照り輝くからこそ崇められます。そこに、死のイメージなど少しもありません。闇はないのです。シッダッタ王子も、そのように太陽の振る舞を心にかけていたかねばなりません」

シッダッタは、ふと、象のように太つて醜い母を心ならずも捨てた修行者と、人間としての悩みを共有するのが、なぜ、大王らしくないのだろうと疑う。彼は、正しい人の道を求めて内省する立派な民のひとりでないか…。

シッダッタの雨季の旅は、彼自身の大王像を探す旅でもあった。

不

いま、改めて、今回の旅立ちに当たってラインガラ賢者が示したアドバイスの的確さを思う。

「毎日、かならず斥候を出し、行く先々の部落を探らせ、雨季は危険ですから、野営を避けて部落の有力者に宿を借り、道案内を乞うのです。また、この季節、とくに病災の情報にも細心の注意が必ずです…」

師は、まだ三十歳も半ばという若さなのに、いつ、そんな知識を得たのだろう。幼少のころから全国を行脚して体験を積み重ねたのだろうか。

隊長は、ラインガラ賢者のアドバイスに忠実だった。

毎日、斥候を出し、行く先々の部落のようすをシッダッタに報告してくれる。お陰で、シッダッタは、旅する土地のありさまが手にとるようだった。村の貧富や村長の行政手腕、時には、私生活まで報告があった。

戦争など緊急事態では、このようにして進路退路の状況を判断するのだろう。

深い森以外では野営せず、大抵、村の有力者の屋敷に宿をとった。季節から薬草と香料の隊商というふれこみで、実際、高価な薬草や

香料の類も仕入れて専門家を同伴し、怪しまれないよう有力者の屋敷ではしばしば商いも行った。

催淫剤やそうした作用の香料、女の美貌を保つという強精剤や香料などが人気だった。

特殊品を専門に扱う隊商とわかると信用もされ、難所などには、かならず道案内がついてくれた。お陰で、一面水浸しの大平原でも迷うことがなかった。

戦争で軍隊を移動させるときなど、村々の有力者を、このように次々と味方に引き入れて兵糧を調達し、道案内もさせ、敵よりは有利に、戦場へ赴くのがコツだなと、道々、シッターは考えた。

ランガラ賢者は一言もいわなかったけれど、少し視点を変える
と、今回のアドバイスは、斥候の出し方、村々の有力者とのよしみの通じ方、道案内の請い方などすべて、戦争のノウハウを体得させるつもりだったのだと、シッターは師の意図を感じている。

そう思うと、村々の有力者の屋敷で行われる商いなどにも進んで顔を出し、人物評定にも熱がこもった。強力な護衛をもつか、優れた幹部人材がいるかなども観察した。幸い、師のアドバイスに従い、そうした場ではかならず糞掃衣姿だったので、ほとんど怪しまれることもなかった。

それどころか、隊商の庇護で旅する少年修行者ということまで心を

許すらしく、ときには、屋敷の財宝の隠し場所、秘密の抜け道なども、ふと、もらしてくれたりするのだった。

その気で屋敷内に入りこむと、内部情報には何の用心もなされておらず、筒抜けであることが多いのだった。間諜の秘訣だと思う。

ただ一点、最近の心配は、北に、新しい馬賊が興り、いま、急膨張中で、農家などに出没して屈強な男などを拉致するという。北の国々では、長者屋敷などへの被害が急増し、対抗手段として兵士を抱えたり増強したりした長者が急増しているというのだった。

不

シャカ国の国境を越えて二十日はかりの深い森で、一つ向こうの村の長者屋敷に馬賊が押し入ったという情報を、斥候がもたらした。隊長は、ただちに帰還の提案をした。しかし、シッターには、あと一つ、どうしても訪ねたい村落があった。レプラの集落だった。

先の旅で、関心を抱きながらシッター自身が嘔吐を催して食物を受けつけず、ランガラ賢者がやむをえず帰還の決定を下したのだった。いまも、それが口惜しくてならない。

もう嘔吐の心配はないので、ぜひ、謎めいた宗教家まがいの行動をとるあの蜘蛛男に会い、話を聞きたかった。

最初、強硬に反対していた隊長が、シツダッタの熱意に折れ、「それじゃ、わたしがお供させていただきます」

と、本隊は、森の奥深くにひそかに待機させ、偽装工作の糞掃衣ふんそうえ姿二名のほかに数名の兵士、それに、牛二頭に水と食料を積み、往復五、六日の行動予定で小隊を出発させたのだった。

行く先には、ことばの異なる国々が細かく分布しているので、それに見合う通訳の兵士を供とした。

水浸しの平坦地をいくつか渡ると村があつたので、村長を訪ねて道案内を乞う。屋敷にはレプラの集落を知る者がいなかった。

出発しようとする、兵士のように頑丈がんじょうそうな若者が、突然、隊長に近づき、ガイド役をかってでた。ことばが通じないので通訳を介してであった。

ガイドの先導でヒマラヤ山脈の高峰のひとつ、ランタンの秀嶺をめぐらし、ようやく村長屋敷を出発する。

だが、いくらも進まないうちに、ガイドの拳動きんどうを不審に思った隊長が、隊を進めながら、通訳を通じ、彼にうるさくレプラの集落のようすを問いただしてはシツダッタに、

「奴は、そういつていますが、ちがいありませんか」

確かに、説明内容に相違はない。

だが、隊長は、それでも不審感が拭えず、そつと小声で、

「奴は、馬賊かんじゃの間者にちがいありません。途中、道に迷わせて姿をくらまし、本隊に襲せわせるつもりですぞ。いまのうちに、斬きつて捨てましょう」

「いや、間もなく、山道への入口があります。そこさえわかれば、あとは、ほぼ一本道です。そのあたりまで待ちましょう」

そんなやりとりで危険を察したのか、いままで、隊長の側を歩いていたガイドが、急に、はるか前方で道案内を始めた。屈強な若者の背中が見る見る小さくなってしまった。

「奴には、こちらのことばが通じていませんぞ。反応がはや過ぎます」

「確かに。殺気を感じたにしては、彼、出来すぎですね」

そんな会話を交わしながらゆっくり歩いていくと、はるか彼方でガイドが手を振っている。

晴れておれば、目前に、もうランタンの霊峰を仰ぎ見ることができはるである。ところが、ヒマラヤ山脈にはモンスーンの雨雲が垂れ込めている。

「まちがいありませんか」

「あれに、ちがいなさそうです」

周囲の山の形などから判断してシツダッタが答える。

ガイドが手を振ったあたりは、近づいてみると、確かにレプラの集落の入口にちがいなかった。だが、ガイドの姿は、もうどこにも

見あたらない。

隊長が、決然といい放った。

「一日以内に馬賊が攻めてきますぞ。その行動半径内に仲間が待機していて、知らせに走ったはずですよ」

「ここには、金銀財宝などありませんが…」

「われわれ自身です。盗賊仲間にしよつと拉致するつもりですよ。失礼ながら、王子を除いて、こんなに鍛えあげたに肉体は、そう見つかるものではありません」

誇らしげに高笑いする隊長を、シッダッタが見つめる。

「ひよつとしたら、王子自身が目当てかもしれません。奴らのことですから、早々と王子出立の情報を探り、糞掃衣姿を狙って来るかもしれませんぞ」

「それでは、早速、あの兵士に糞掃衣を、脱がせなくては…」

「なりません。任務です。われわれは王子の近衛兵なのです。任務を解くことはできません」

シッダッタが、しばらく考え、

「では、ひとまず、レプラの集落はあきらめよう。あと、大急ぎで本隊にとつて返すのがよいか、それとも、わき道に逸れて奴らを、一時、やり過ぎるのがよいか…」

「やり過ぎるのが賢明かと思えます」

そこで、レプラの集落への道をまっすぐにたどらず、かなり奥に入ってから、尾根伝いに脇道へ逸れることにした。

レプラの集落への本道は、無理すれば騎馬隊でも通れるが、こちららは、牛さえやつの険しい道である。



午後の豪雨に見舞われながらも、野営のできそうな広場を求めて夕方まで尾根をたどった。

すると、夕方近く、ヒマラヤの山懐にしがみつくような集落を発見する。おそらく、ヒマラヤ山脈を越えてインドから中国方面へ抜ける険しい山間交通の要所の僻村なのだろう。そこへ裏道から到着したものらしい。かなり大きな集落であった。

もう夕間も迫っているので、隊長自ら、一番大きそうな家を訪ねる。大きいといっても、前面は、木と土からできたみすばらしい家である。ただ、強い風雨への備えか、三面に石を高く積んで塀をめぐらし、風圧に耐える工夫がなされている。

中から出てきた白髭の老人が、昔、隊商で働いた経験があるという。深い山をたどる人は皆兄弟だ、村の中央に広場があり、旅人のための小屋があるのでそこで雨露をしのぐがよい。村長には、自分

から伝えておくという。

ことは通り村の中央には小屋があった。壁もなく吹きさらしだが、雨露はしのぐことができる。兵士と牛を休めてしばらくすると、

真つ暗闇の中、村長の表敬訪問を受ける。先ほどの白い髭の老人も一緒だった。

レブラの集落へ行くつもりだった道をまちがえたと、隊長が弁明すると、白い髭の老人が通訳し、村長が、大声を出して笑いながら何やら話す。再び、老人が通訳する。

「あの道をまちがえるなんて、象を見落として蟻を見つけるようなものだ。合点がいかがぬ、と、大笑いされているのじゃ……」

シツダッタと隊長が、凶星を指されて肝を潰していると、再び、村長が大声を出した。

「おおかた、盗賊にでも追われなされたのだろう。もう大丈夫だ、神がお創りなされたこの要塞には、どんな悪党も近寄ることはできぬ、と、申されておるのじゃ……」

暗闇の中でシツダッタと隊長が思わず顔をあわせる。村長の話はまだまだ、つづいた。

「訪ねられるからは、よくご存知と思うが、あの集落には、悪魔に呪われた人々が、方々から大勢集まってくる。だが、儀式を行ってよく被い、二度と悪魔を暴れさせない。身体に爪痕が残っても、あ

の村では、皆、幸せに暮らしている。しかし……、しかしじゃ、この村は、もっとすごいのだ……ぞ。明朝、ゆっくりお目にかけてしよ、と、申されておるのじゃ……」

翌朝、いわれた通り村長の家の前に行くと、確かに、レブラの集落よりもすごい光景に出くわす。

村長に呼ばれ、シツダッタと隊長のまえに姿を見せたのは、色白の若い母親だった。黒髪が美しく光る。腕には、小さな乳飲み子を抱いている。

「お見せ……」

村長は、そういったにちがいない。白い髭の老人が、通訳の機会をうかがっている。

促されて母親が、赤ん坊を抱いた片方の腕を出し、内側を見せた。

艶のある腕の中ほどに、少し臃をもった腫れ物があった。若い肌、それが、桃色をして生き生きと見える。

「赤ん坊の方もお見せ……」

村長は、そういったのだろう。白い髭の老人が出番をためらう。

再び促され、母親が、赤ん坊の腕をひっくり返した。そこにも同じ腫れ物があった。赤ん坊は母の胸で安眠をむさぼっている。至福のときが流れている。

村長の発言を、白髭の老人がようやくとらまえ、

「この腫れ物こそ、この村のすこさなのだと、申されておるのじゃ……」

そういつて、村長も通訳も、誇らしげに腕の内側を見せた。傷跡が明らかだった。

村長の説明によると、この腫れ物の元の悪魔が、一旦暴れ出すと、どの村でも半分以上は死ぬが、この村に伝わる方法を使えば助かるというのだった。

悪魔の腫れ物が流行ったとき、子供の膿を少し採って、一度この腫れ物を経験した女の腕に、歯で傷をつけ、ぬりつける。

すると、女は、一度、悪魔に冒されて強くなっているのに、傷口に小さな腫れ物ができるだけ、全身には広がらない。十日もすれば膿をもつので、それを採って、今度は、まだ白紙の赤ん坊の腕に、歯形をつけて移す。

歯形のあとに腫れ物ができるが、やがてきれいに治る。こうしておけば、悪魔が村を襲うことがあっても、誰も悪魔の腫れ物に冒されることはない。

この村では、以前、悪魔に襲われたときの膿を、つぎつぎと若い女の腕に移して残しており、子供が生まれるたび、小さな悪魔の腫れ物を作り、大きな悪魔を封じ込めている。

ただ、この僻村では、腫れ物が大流行することは、滅多にないが、

山裾の村で悪魔が大暴れしていると聞くと、そこへ子供の膿をもらいに行き、もう一度、全員に小さな悪魔を住まわせる。これは先人の教えで、もし大流行したら、古い悪魔は、呪いの力が弱くなっているの、万一の時の備えだという。

「……ということじゃ。お若い方々、どうじゃ、この村のすこさがおわかりかな」

白髭の老人は、長い通訳を終えると、得意そうに胸を張った……。



シッダッタは感動した。

悪霊の祟りで同時に二児を失い発狂した母には、心を動かされ、心底、亡き子らに、由緒正しいバラモンが心豊かな長者の家に生まれ変わってくれと祈ったものだ。

顔さえ知らない彼の母も、シッダッタに万一のときは、あのような悲嘆に暮れたであろうと思えば、あの全裸の女に、母の肌の暖かさを感じたのだった。

だが、今朝の若い母親には、さらに深く心をゆり動かされた。

わが子を失って発狂する母は尊い。だが、子に危害が及ぶまえに、わが腕で育てた小さな悪魔を子に移す母の叡智は、警えようもなく

尊く、貴重である。

慈悲とは、このように、危害を阻止しようとしてさし伸べられる叡智の手のことにちがいない。

シッダッタの亡き母は、どうなのだろう

子を亡くして理性を失い、悲嘆に暮れる人であったか。それとも、静かに叡智を働かせ、危害が及ぶまえに、子をして災厄からその身を護らせる母だったか…。

そう考えると、亡き母のイメージが、シーターの知的で思慮深い姿と重なってならない。いや、シーターの実像を、亡き母に投影したのが、シッダッタの実母像だったかもしれない…。

その朝の出来事は、実母像に迫るほど、シッダッタの心を大きくゆさぶった。

だが、シッダッタが真に心を動かしたのは、そのことでなかった。

この村では、悪魔の呪いに宿るダルマを知り、その振る舞いを生かして、逆に、悪魔の災厄封じに用いていることだった。そこにこそ、深い感銘を受けたのだった。

ちょうど、二児を失って発狂した女のあの村で、悪霊の崇りを絶つと、シッダッタが、真剣に経をあげ、梵我一如の瞑想に耽った、あの一途な思いに通じるのだった。

悪霊といえどもダルマの支配下にあり、いくら経をあげても、

西の太陽を引き戻せないように、悪霊もその独自の振る舞いは制止できない。しかし、太陽の振る舞いをよく知ること、より恩恵が得られるように、悪霊も、その振る舞いを知れば、何らかの恵みもたらされるにちがいない。

必死の思いで梵我一如の瞑想をすれば、悪霊のダルマの振る舞いが見えてきて、人々を益するにちがいない…。

あのときは、そう思って瞑想したのだったが、この村では、すでに実践されていたのである。この部族の祖先の深い叡智とダルマを発見する炯眼に、心からの敬意をあらわさずにいられない

…シッダッタは、あまりの感激で、若い母親の腕をとらえて放さず、桃色の腫れ物に見入ったままなのに気づいていなかった。

若い母親は、しばらく恥ずかしそうに、白い腕をシッダッタの熱い視線にさらしていたが、ふと、思いついたようにささやく。

そのことばを、白い髭の老人がとらえる。

「よろしければ、あなたさまにも、この小さな悪魔を移してさしあげましょうか。十日もすれば膿がでます。誰か、愛する人に、それを移してあげれば、その方を、生涯、悪魔の呪いから護ることができます、と、この方は、申しておられるのじゃ…」

シッダッタは、横にいる隊長の顔を見た。彼は、気味悪そうに首を横に振り、苦笑する。

シッタッタの脳裏をシーターの笑顔が走った。

「お願いします」

シッタッタは、思い切り伸ばした腕を若い母の前に差し出した。にっこりしながら、彼女は胸の赤ん坊を村長に渡した。それから、豊かな黒髪が腕にかぶさってきたかと思うと、二回、痛みが走る。

しばらく女性から遠ざかっているシッタッタの感覚に、積乱雲の目覚めが湧きあがる。

彼女は、人差し指を、まず口にさし入れて唾液で清め、次に、濡れた指先を、桃色の腫れ物とシッタッタの腕の二つの美しい歯形とに運び、膿をていねいに移した。最後に、長い指先で、歯形の出血をやさしくこねた。

「念のため、二つ、移させていただきました。しばらくは、汚さないよう注意してください、と、この方は申しておられるのじゃ…」
シッタッタは心ひそかに思う。

この腕で育てた小さな悪魔をシーターに移してやり、彼女を、生涯、悪魔の呪いから解放するのだ…。



シッタッタ率いる別働隊が無事本隊に戻った翌朝だった。

奥深い森の薄明かりの中、兵士三十名が、牛二十頭とその牛車を真ん中に円陣を敷いた野営は、まだ眠りから目覚めていなかった。

突如、森の入口近辺、約三、四キロ向こうあたりで馬蹄の轟音が起った。馬賊にちがいない。昨夜のうちに森の入口まで馬を進めておいたのであろう。

到着までにはしばらく時間があるので、隊長の指揮のもと、早速、陣が整えられる。

もともと、そういう地形が選んであるのだが、円陣の周りの木と木の間、ちょうど背丈くらいの高さの枝に、ぐるりと牛車の轆をわたしかける。乗馬のままでは牛車に近づけない柵作りである。ただ、一角だけは柵を設けず、そこへ騎馬隊を誘いこむ。兵士の配置も、自ずと、そこが重点となる。

隊長から、糞掃衣当番の兵士二人に指示が飛ぶ。

投げ縄で拉致される危険があるので、あらかじめ切っておいた丸太を高く立てて車に固く結び、その脇に、目立つ格好で王子のように振舞え…。

シッタッタは兵士の姿で剣を佩いて隊長の横に立ち、数名の兵が護衛に当たる。それは、一見、隊長の護衛集団の配備と見え、敵をあざむく布陣である。

やがて森の茂みに蹄の音をこだませ、馬賊が姿をあらわした

かと思うと、円陣めがけ、木々の間からいつせいに襲いかかる。

四、五十騎はあろうか、勢いあまって轅の柵に激突して落馬する者も続出するが、主力は、柵のない一角へとなだれ込む。

蹄と嘶きと黒声が飛び交う中で「シッタータ」「シッタータ」と叫ぶ声が確認できる。シッタータの一行と知って王子拉致が目的の襲撃にちがいない。

しかし、こうした事態に備えた精鋭部隊である。

中央突破してくる馬賊は、強靱な応戦の剣によって、ことごとく首をはねられ、喉を刺され、腕や脚を落とされ、そこかしこに刃傷を浴び、一步も前に進めない。

それどころか、主のない幾頭もの馬が、柵の中を興奮のままに、文字通り放れ馬となって駆けめぐり、馬賊の進路を阻む。

シッタータは、ウパナヤナの儀式以来、武道にも精進したので、襲撃には一刀で刺す体勢にある。だが、近衛隊に阻まれ、賊は陣内へすら侵入がままならない。

王子の気ままな出立にも、見事な精鋭部隊を配備してくれる師に、いまさらながら感謝の気持ちでいっぱいである。

と同時に、ランガラ賢者の厳しい諫めのことばも脳裏をよぎる。王子は法律上の悪事をはたいたわけではないのです。それなのに、悪事から逃れるような行動をなさってはなりません。その懺悔

は、王子個人の良識にすぎません。指導者が単なる個人の価値観で動く、混乱を招きかねません…。

身命をかけて王子を護り、激戦を展開する兵士たちを見ながら、シッタータは、ふと、自らを恥じた。

兵士の命まで巻き添えにし、一体、自分は何をしたかったのか。単なる気まぐれではなかったのか…。

「引け、引け」

敵わないと判断したのである。頭目らしい男の鋭い声が響く。

しかし、そのとき、下馬した数名の賊が、轅の柵をかい潜り、ひたひたと糞掃衣に急接近していた。

先ほどから、糞掃衣の二人に、執拗に投げ縄を投げるが、高い立ち木に阻まれ、目的を達していなかった。どちらかが王子とみて、どちらも拉致するつもりでいるらしい。

円陣を守る兵士たちが、糞掃衣に急接近する賊を迎え撃ち、盛んに剣を浴びせる。二、三の賊が快刀に薙ぎ倒された。だが、辛うじてそこを突破した賊二人が、牛車の中央あたり、糞掃衣の一人に背後から飛びかかる。不意を食らい、手の剣が首を立てて転げ落ちた。その隙に、賊二人、無手となった糞掃衣に飛びつき、縄をかけようとする。

これを見たもう一人の糞掃衣が、助太刀しようと一步踏み出し

た途端、賊の剣が下から一閃した。出会い頭の勢い、剣が、助太刀の腹を刺し貫き、鮮血が噴いた。

次の瞬間、組み敷かれた糞掃衣が、一瞬の隙を突き、腹上で一人きりとなった賊を投げ飛ばす。そうして、起きあがってくるところを、咄嗟に、剣を拾うや、早業でその喉を刺す。残りの賊が、驚いて逃げ出す背後から、もう一太刀浴びせた。

馬賊のモンスーンのような襲撃はあえなく終わった。

シッタッタは、思いあたるふしがあり、早速、倒れた糞掃衣兵士のもとへ駆け寄る。

まさかと思っただが、いつかの夢で、黄泉の国からシッタッタに会いにきたあの兵士であった。彼は、バラモンの屋敷へ訪問のとき、道案内を拒んだのだった。



すまない。

そんな一言では、すまない悔悟の気持ちだつた。

駆け寄ると、死者の腹を貫いたままの剣の柄に手をやつた。心の中なかで、大声で、輪廻転生の経文を唱え唱え、肉に食い入つた鋭利な金属を抜きとる。今度は、もう固まって錆びた血が溢れた。

シッタッタは、苦悶の表情の死者の傍らにひざまずき、この兵士がバラモン屋敷への同道を拒んだとき、心の片隅で、「憎らしい奴め」とひそかに憤ったのを思いだす。

だが、彼は、結局、シッタッタを護って死んで行った。

あの夢は、過去でなく未来への暗示だったのだらうか。あの夜、この兵士のあと、確か、黄泉からの来訪者は次々とあらわれて絶えなかつた。とすれば、殉死者がこれからも後を絶たないというのだらうか…。

そのとき、頭上で、隊長の威令が響きわたる。

「よく聞け、諸君。王子からのお達しだ。

死者は、盗賊であろうとも、ここへていねいに運べ。手厚く葬るまえに、王子自ら、霊を慰める経をおあげになる。

傷ついた馬賊の者も、同じようにここに集め、仲間の死に手をあわせよ。その後、傷の手当をしてやれ。歩ける者は、水と食糧を与えて逃がしてやれ。拉致され、心ならずも盗みを働く者も少ないはずだ。妻子の待つ郷里へ帰してやるのだ。重傷で歩けない者は、牛車に乗せ、同行させる…。

最後に、王子自らの司祭によつて、われらの仲間を荼毘にふす。そのときは、剣を心臓のまえに掲げ、諸君とともに、いまは亡き仲間、よりよき輪廻転生を祈らう」

一言も指示していないのに、隊長の命令は、慈悲深い王子の心そのままだった。シッダッタは、自分自身が、直接命令をくだしても、ここまでの確にその思いを伝達できなかったらうと舌を巻く。

ふと気づくと、直立不動で指示を受ける兵士たちの視線が、死者の傍らにうづくまるシッダッタに注がれていた。

一瞬、アンナプルナの霊峰の雄姿を思いながら、シッダッタは、毅然と立ちあがり、

「諸君のよく鍛えぬいた戦闘能力と勇敢さに敬意を表します。まさに、シャカ国最大の誇りです。勇敢に戦い、惜しくも不運に遭った仲間には、心から武勇をたたえるとともに、よりよき輪廻転生を祈りましょう。

さらにもう一つ、盗賊といえども人の子です、人の道に恥じない扱いをお願いします」

ことは遣いはやさしいが、凜としたシッダッタの声は、兵士の心の底まで響く。兵士たちが、力強く了解の合言葉を発するのを聞きながら、シッダッタは、帰還の決意を固めている。

彼は、再び死者にひざまずき、その母を思う。

すると、全裸の女が、脇に白い包みを抱え、何やら叫びながら糞尿のぬかるみを蹴って駆けてくる姿が、脳裏に蘇る。

彼女は、シッダッタの目前まで迫ると、

「修行者さま…」

と叫んで絶句し、しばらく沈黙の後、再び絶叫したのだった。

「この子を、生き返らせてください。どうか、お慈悲です…」

シッダッタは、全裸の女のまぼろしの叫びを耳にしながら、たいたいま、自分が吐いたことばの空虚さに、耐えきれないでいる。

諸君は、まさに、シャカ国最大の誇りです。勇敢に戦い、惜しくも不運に遭った仲間には、心から武勇をたたえるとともに、よりよき輪廻転生を祈りましょう…。

何と軽薄なことばだろう。この巧言令色を聞いたら、死者の母は、どんなに悲しむだろうか。いや、どれが敬意を尽くしても、自分を護って死んでくれた兵士の母に、シッダッタ自身の口から伝えるべき哀悼のことばなど、この世に存するのだろうか…。

それに、そもそも、この兵士の死は、彼自身にとって、一体、どんな意味があったのだろうか…。

そんなことを考え考え、ふと、腕に目を落とすと、小さな悪魔を育てる腫れ物がふたつ、春の芽吹きのように、シッダッタの肌を赤くふくらませている。



シツダッタ一行はカピラ城へと帰途を急いでいた。

しかし、雨季明けまえの豪雨が何度も行く手をはばんだ。たかだか三十名の小隊であるが、平地に氾濫した濁流を横ぎるのにも、ガンジスへと注ぐ増水の支流川を渡るのにも、周到な時間と熟達が必要だった。

牛車に積みこんだ水甕みずかめは尽きようとし、食料も底をつきかけていた。信用のできる富豪やバラモンの屋敷で、何度も水と食料を調達したが、それも乏しくなった。だが、旅の初めのラインガラ賢者の注意を堅く守り、口から入るものには細心の注意が払われたので、一人の病人も出していない。

「無事にご城下へ戻りたけりや、持参のもの以外、絶対口にするな」
隊長は、口うるさく注意するだけでなく、夜、何日かに一度は、富豪やバラモンの屋敷でも森の野営でも、赤々と火を焚いて存分に料理を準備させ、穀物酒もふんだんに振る舞い、兵士に、余計なものも口にする機会を与えなかった。

そうした計らいで、兵士たちは満腹しただけでなく、士気も高まり、危ないものには手を出そうとしないのだった。

隊長といつても兵士と年の差はない。だが、さすがにラインガラ

賢者の人選だけに、小は食事、大は氾濫河川の渡渉とじょうから馬賊ばぞく征伐など、兵士の掌握と指揮は、実に見事だった。飲食に不満を持たせず、士気を高め、器に応じて兵士を使いこなした。

それを見、シツダッタは、人を使いこなすには、心に使命感、腹に満足感を充たしつつ、事柄に応じ器に応じて役割を与えなければならぬと感心する。一律に型にはめこめば、かえって使いにくくなるらしいとも悟った。

一行は、苦難の末どつにかシャカ国の領地へと辿り着き、あとは一筋の道を、約二日間、南下するばかりとなっていた。

道の両側には、見渡すかぎり稲株が緑の大海となって広がり、穂を出そうとしていた。国を後にするとき、これらは、指の高さも無い、ひ弱な植物にすぎなかった。

南下するほど、稲田の緑が豊かとなる肥沃な国土を見渡しながら、シツダッタは、隊長と並んで牛車に揺られていた。車の振動に身を任せ、達成感に浸っていた。

小隊とはいえ、王子自身が、最高責任者として指揮をとった最初の旅が、一人犠牲者を出しただけで終わるつもりとしている。もちろん、犠牲となった兵士には、哀悼の気持ちがいかに深いか、一面、やむを得ない犠牲かもしれない。しかし、

「その後、例の小さな悪魔のご機嫌はいかがですか」

牛車に揺られながら、隊長が、シッダッタの腕を覗きこむ。

「機が熟してうまく膿をもったのに、受け手の方が、まったくあらわれません…」

シッダッタは、苦笑しながら、ふたつの赤くもりあがった小さな魔物のおできを見せる。

化膿して十日ばかり、膿が破裂しそうであった。

「民に役立つとご判断でしょうが、そうしたものを、ためらいもなくお受けになる、王子のお気持ちが、わたくしごときには、理解が及びません」

隊長の敬愛の眼差しがシッダッタを見つめる。王子が微笑み返す。

「だって、天の法にならなっているじゃありませんか」

「それはわかります。でも気味悪い。そうは思われませんか」

「呪いや占いとちがい、これには理と法があります」

隊長は、黙って、にやにやしている…。

おできが膿をもつてこの方、シッダッタは、黙殺の微笑に苛立つてきた。

山深い寒村に伝わるせつかくの叡智を広めたいと、道すがら、井戸端や市場などで赤ん坊を抱いた母親の姿を見ると、呼び止めてはおできの腕をかざし、小さな悪魔の効能を説いた。しかし、笑って黙殺された。冷笑が待っていた。先、隊長が見せた、あの冷たい微

笑である。

極端な場合、赤ん坊を悪魔に汚されまいと、悲鳴をあげて逃げ去られる始末だった。

道中ついに、誰ひとり共感者はえられなかった。おかしいのは自分の方だろうか、と、気弱になったりもする。

いや、シーターなら、わかってくれる。彼女なら、よろこんで、もらってくれるにちがいない。

シッダッタは、この奇跡の理解者はシーターのほかに、もう誰もいないと思いはじめていた。



ヒマラヤ方面からカピラ城の北の城門へ通じる一筋の道を、長旅を終えた牛車隊が、ゆっくり南下している。道の両側には、雨季明けまへの稲田が、見渡すかぎり濃い緑の大海原を広げ、そこに太陽の光が降り注いでいる。

先頭の車には、王子と隊長、後に続く車には、兵士たちが思い思いの格好で車輪の振動に身を任せている。

国境を入ってから、もういくつかの集落を過ぎ、その間に点在する大きな菩提樹も何本か見た。巨樹の梢は、カラスの大群が騒ぎ、

根方は、深い陰を落としていた。雨季は人影もないが、乾季は、旅行く人々に、快い休憩所を提供する。

領内では、もう盗賊の襲撃に備えることもないので、ただ、ゆったりと過ぎ行く時に身を任せるだけだった。

しかし、先頭を行く王子と隊長の胸には、異なつた思いがそれぞれの心を締めつけていた。

牛車に揺られながら、隊長は、シツダッタの前で平然と振る舞っているが、とんでもない情報を握っているのだった。

いつのころからか、斥候がもたらす情報の中に、城中で異変が起きたらしいという噂が入りはじめた。正確な情報を把握してから報告するつもりで、まだ、シツダッタの耳に入れていない。

確かな情報を入力するため、さらにバラモンや村長の屋敷を重点に探らせると、異変の中身は、侍従頭の服毒死とお側仕えの侍女の投身自殺というものだった。

斥候には厳重に口止めしたが、シツダッタに報告すべきかどうか判断に苦しんだ。それにしても、ランガラ賢者からは、一切、伝令が届かない。的確で、万事遺漏のない賢者のことだから、こんな一大事に対し、手落ちがあつたとは考えられない。

王子に伝令を出さないというのは、旅の王子には知らせず、帰国後、しかるべき手順を踏んで報告するという意思の表現と判断でき

る。隊長は、そう読んだ。

王子が、立派に大王への道を歩みつつあるのは、ランガラ賢者と侍従頭シーターの献身的な教育の賜物と知っている隊長は、事態の重大さに、身のすくむ思いだった。事実を知つた時の王子の心中は、察するにあまりあると思う。

特に、この困難な旅で、シツダッタは、糞尿のぬかるみや死体にも平気で近づくと、悪魔の祟りの高熱・下痢の集落へも恐れずに赴いて村人にその対処を説くなど、逞しい成長を遂げている。

王子が、そんな姿を真つ先に見せたい人、そしてもっとも喜んでくれる人が、もうこの世にいないと知つたら、発狂するのではないかとさえ思われる。

そんなことを思えば、隊長は、もういづべきことばを見つけることができないのだった。

一方、シツダッタは、故郷の城に近づくにつれシーターへの思いを次第に募らせながら、一つの決心を固めているのだった。

帰国したら、正式に、シーターを後に迎えようというのだった。もちろん、国の掟は承知している。しかし、王に、それを廃止してほしいと願ひ出るつもりだった。

そんな過激な思想を正しいと判断させたのは、この旅の体験だった。その象徴がシツダッタの腕のふたつのおできである。ヒマラヤ

の山奥の寒村から持ち帰った、小さな悪魔の腫れ物こそシッタッタを生まれ変わらせたのである。

それは、この世のすべてにダルマが宿り、人の営みはそれに則って行なわねばならない、という哲理であった。

それによれば、愛しあう者が結婚するのは人間のダルマに則った事柄であり、それを妨げる国法は、逆に、ダルマに反している。

王は、ダルマに則って政を行うよう天から権力を預かった人であるのに、人間のダルマを否定するような掟を放置するのは天に反する行為である…。

カピラ城が近くなるにつれ、シッタッタは、牛車に揺られながら、腕の腫れものをにらみ、これこそダルマを生かした奇跡だと心に繰り返し、国法の廃止を父王に申し出ることは、理にかなっていると自分にいい聞かせる。

ちようどそのとき、修行者の一団が牛車とすれちがう。

「どちらから来られましたか」

隊長が敬愛をこめて声をかけた。

「マガダ国の者ですが、カピラのご城下で安居しております。もう雨季が明けますので、次の修行地へ移動いたします」

長老の修行者が、低い声で静かに答えた。

「シャカ国のご感想はいかがでしたか」

「高德の王子さまを誇らしげに語る民にあふれていました…」

「ありがとうございます。どうか、お気をつけて…」

修行者が、まだ続きを話しそうなので話の腰を折り、牛の手綱を引いた。

隊長が、修行者の一行を見送ろうと振り返ったとき、はるか北の空では、季節の変化があらわれていた。

「あつ、あれをごらんください。いよいよ、雨季が明けます…」

頭をめぐらせば、南から押し寄せる青空に押され、厚雲が、急に、北へ北へと飛び散っていた。

「おお、空の厚い蔽おほいが消え、神々の山が姿をあらわすぞ…」

シッタッタも叫んだ。

岩のかたまりのようだった厚い雲が、割れて散り散りとなった。

そうして、人種の異なった人々の顔のように、千変万化の表情を見せながら、北の方、ヒマラヤの嶺々へ飛び去り、霧散して行く。

厚雲の消える向こうに、高い北壁の稜線が、連なる剣のように、天を突いてそそり立つ。頭ひとつ高い、アンナプルナの嶺が神々しい。

進行方向に頭を戻せば、一行の前には、一筋の道が稻田の海のなかを南へと伸びていた。そこへ灼熱の太陽が降り注ぎはじめた。吹きはじめた強い南風に乗る、見渡すかぎり、緑の波が、つぎつぎと

うち寄せる。稲の青い香りが兵士たちの身体を洗う。

はるか遠い南のカピラ城で櫓太鼓が鳴った。

伝令が先着し、王子の帰国を知らせるのだろう。まだ四、五キロ先である。しかし確かな響きが、南風に乗って稲田の上を渡ってくる。

荷車を引く牛が次々と空に向かって咆哮し、車上の兵士の呼吸がにわかに高まる。

わが家の近いのを知り、牛も人も緊張しはじめたにちがいない。

シツダッタは、膿ではちきれそうな腫れ物の腕をかざし、晴れ行

く空に拳を突きあげた…。

完

二〇〇六年一〇月

参考文献

ブッダのことば スッタニパータ

中村 元訳

岩波文庫

ブッダの

真理のことば 感興のことば

中村 元訳

岩波文庫

仏弟子の告白 テラーガータ

中村 元訳

岩波文庫

ブッダ

神々との対話 サンユッタ・ニカーヤ

中村 元訳

岩波文庫

ブッダ

神々との対話 サンユッタ・ニカーヤ

中村 元訳

岩波文庫

ゴータマ・ブッタ 釈尊伝

中村 元著

法蔵館

原始仏教 その思想と生活

中村 元著

NHKブックス

仏典のことば 現代に呼びかける知恵

中村 元著

サイマル出版会

ブツダの人と人生

中村 元・田辺祥二著 NHKブックス

NHK こころをよむ仏典(NHK講座 録音テープ集)

講師(中村 元) NHKカセット

新編 ブツダの世界

中村 元編著 奈良康明・佐藤良純著

学研

釈尊との対話

奈良康明 NHKブックス

ゴタマ・ブツダ

早島鏡正著 講談社学術文庫

釈迦の本 Books Esoterica 学研

釈尊をめぐる女性たち 仏教女性物語

渡辺照宏著 大法輪閣

ジャータカ物語(上、下) 釈尊の前世物語

津田直子 第三文明社 レグルス文庫

釈迦

瀬戸内寂聴

新潮社

ブツダの歩いたインド イラストで読む仏跡巡礼

菅原 篤 佼成出版社

ネパールの碧い空

岩村 昇著 講談社

世界の歴史

山崎元一著 中央公論者

世界遺産を旅する8 インド 南アジア 近畿日本ツーリスト

インド・ネパール・スリランカ・モルティブ

JTBのポケットガイド

ド

インドおもしろ不思議図鑑 トンボの本

松本栄一 宮本久義 編 新潮社

インド聖地巡礼

久保田展弘 新潮選書

迷宮のインド紀行

武澤秀一 新潮選書